

# 上久々茂土居跡・大峠遺跡

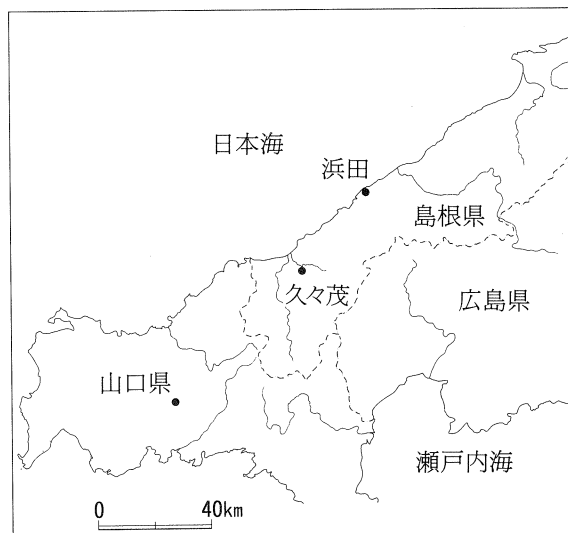
—一般国道191号改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

94

育委員会  
工事事務所

# 上久々茂土居跡・大峠遺跡

—一般国道191号改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



1994

島根県教育委員会  
建設省浜田工事事務所



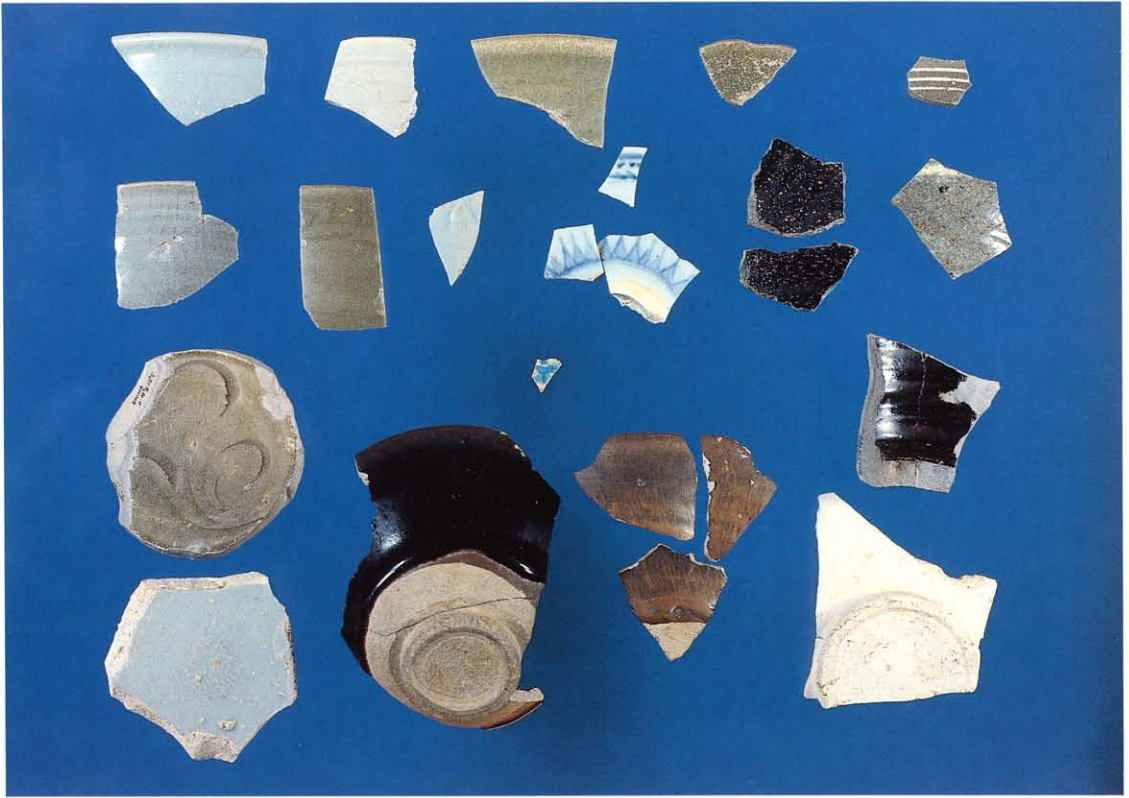


遺跡周辺を北方から望む（上・上久々茂土居跡、下・大峠遺跡）



遺跡周辺を南方から望む（上・大峠遺跡、下・上久々茂土居跡）





上久々茂土居跡出土貿易陶磁



大峠遺跡出土貿易陶磁



## 序

島根県教育委員会では、平成5年度、建設省中国地方建設局の委託を受け、一般国道191号改築工事に伴い上久々茂土居跡及び大峠遺跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査では、両遺跡から奈良時代と中世の建物跡や柵列などの遺構を検出しました。また、中国や朝鮮半島から輸入された陶磁器なども出土しました。この調査の結果、文献資料や遺跡の少ない益田川中流域における古代・中世の様相を僅かながらも知ることができたと考えており、本報告書が広く埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることに、多少なりとも役立てば幸いに存じます。

なお、発掘調査にあたり建設省浜田工事事務所をはじめ、各方面からご支援ご協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

島根県教育委員会

教育長 今 岡 義 治





## 序

建設省浜田工事事務所においては、活力に満ちた島根県西部を目指して、暮らしの利便性、安全性、快適性の向上を図り、人と自然に優しい環境形成にも配慮しつつ、道路整備を進めているところであります。

一般国道191号においては、山陰と山陽を結ぶ重要な路線であり、円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、権限代行として直轄で改築事業を進めているところであります。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています

当一般国道191号改築においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会の御協力のもとに平成5年度発掘調査を行ってまいりました。

本報告書は、「上久々茂土居跡」及び「大峠遺跡」の調査結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術及び教育のために広く活用されると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ進められていることへの御理解を頂くことを期待するものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導御協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し心より謝意を表するものであります。

平成6年3月

建設省中国地方建設局 浜田工事事務所

所長 伊 藤 仁





## 例 言

1. 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成5年度に行った一般国道191号改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査を行った遺跡とその地番は次の通りである。

上久々茂土居跡 益田市久々茂町イ1293-2 他

大峠遺跡 益田市久々茂町イ690-2 他

3. 調査は次のような組織で行った。

事務局 広沢卓嗣(文化課長) 勝部 昭(埋蔵文化財調査センター長)  
山根成二(同課長補佐) 久家儀夫(同課長補佐)  
工藤直樹(企画調整係主事) 田部利夫(島根県教育文化財団嘱託)

調査員 西尾克己(調査第3係長) 守岡正司(同主事・調査担当)  
松谷晴彦(講師兼主事) 寺谷 隆(調査補助員)

調査指導 田中義昭(島根大学教授) 村上 勇(広島県立美術館主任学芸員)  
井上寛司(島根大学教授) 岩崎仁志(山口県埋蔵文化財センター文化財専門員)

調査協力 三辻利一(奈良教育大学教授) 佐藤 豊(和鋼博物館副館長)  
柴垣勇夫(愛知県陶磁資料館学芸課長) 木原 光(益田市教育委員会)  
椿 真二(岡山県古代吉備文化財センター) 中村唯史(島根大学地質学教室)  
水口晶郎 増野晋次 勝部智明(以上島根大学学生)

調査参加者 大谷安彦(自治会長) 湯浅松太郎 島田信義 藤井亮市 吉部政勝 黒谷博士  
野村与嗣 斎藤福督 田中熊市 石田哲老 御神本 堅 西田昭一 石田正道  
藤井寿子 河野直子 寺戸逸子 湯田ミヨ 藤井佐奈枝 石川芳子 三原フミ  
藤井町子 吉部咲子 寺戸春子 澄川広子 松本奈良重 潮カズコ 斎藤久子  
吉部喬子 寺戸信子 野坂宏子 吉部 緑 日比ミヨコ 石山シゲ子  
吉部ユキ子 寺戸キクエ 尼子真百美 可部ナミ子 豊田清子 藤井恭子  
大谷タマヨ 斎藤妃美 大島 操 三浦美智子 岩本哲夫 岩本末子  
杉内恵美子 永安ユキエ 中尾貞子 北村智恵子 仲山キヌエ

遺物整理 大久保真紀 和崎幸子 金津まり子 陶山佳代 金森千恵子 野田直子

4. 挿図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系X軸方向を示す。
5. 本書に掲載した「上久々茂土居跡・大峠遺跡と周辺の主要遺跡など」は建設省国土地理院発行のものを、また、「調査区配置図」は、建設省浜田工事事務所作成のものを浄写して使用した。
6. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

SB-掘立柱建物、SD-溝、SK-土坑、P-ピット
7. 出土した陶磁器については広島県立美術館の村上 勇氏及び愛知県陶磁資料館の柴垣勇夫氏に御教示いただいた。
8. 本遺跡出土須恵器の胎土分析を三辻利一氏（奈良教育大学）にお願いした。
9. 出土した石製品については中村唯史氏（島根大学地質学教室）に御教示いただいた。
10. 出土遺物、実測図及び写真は、島根県教育委員会(島根県埋蔵文化財調査センター)に保管してある。
11. 図版1は1947年米軍撮影、図版2は1986年ワールド航測コンサルタント(株)撮影によるものである。
12. 本書の執筆、編集はセンター職員の協力を受け、守岡を中心に調査員が協議して行った。
13. 本書で使用する「瓦器」は、須恵器・土師器と相違し、暗灰色あるいは灰褐色を呈する中世の焼物をいう。また、従来「土師質土器」といわれていたものも「土師器」とした。



# 本文目次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第2章 位置と歴史的環境 .....	1
第3章 調査の経過 .....	4
第4章 上久々茂土居跡 .....	4
第1節 遺跡の位置と概要 .....	4
第2節 遺構 .....	6
I区 .....	6
II区 .....	15
III区 .....	29
IV区 .....	34
第3節 遺物 .....	38
第4節 小結 .....	48
第5章 大峠遺跡 .....	54
第1節 遺跡の位置と概要 .....	54
第2節 遺構 .....	55
I区 .....	55
II区 .....	60
III区 .....	69
第3節 遺物 .....	72
第4節 小結 .....	85
第6章 ま と め .....	89
第7章 理化学的分析	
第1節 上久々茂土居跡出土須恵器の蛍光X線分析 .....	92
奈良教育大学 三 辻 利 一	
第2節 大峠遺跡出土須恵器の蛍光X線分析 .....	94
奈良教育大学 三 辻 利 一	

## 挿 図 目 次

第 1 図	上久々茂土居跡・大峠遺跡と周辺の主要遺跡など	3
第 2 図	調査区配置図	5
第 3 図	上久々茂土居跡土層断面図	7
第 4 図	上久々茂土居跡Ⅰ区遺構位置図	8
第 5 図	上久々茂土居跡SB01実測図	9
第 6 図	上久々茂土居跡SB02実測図	10
第 7 図	上久々茂土居跡SD05検出状況	11
第 8 図	上久々茂土居跡溝土層堆積図	12
第 9 図	上久々茂土居跡土坑実測図SK01～04	12
第10図	上久々茂土居跡Ⅱ区遺構位置図	13～14
第11図	上久々茂土居跡SB03実測図	16
第12図	上久々茂土居跡SB04実測図	17～18
第13図	上久々茂土居跡土坑実測図SK05, 07, 09, 17	19
第14図	上久々茂土居跡土坑実測図SK27～29, 31	20
第15図	上久々茂土居跡土坑実測図SK23, 33, 34	21
第16図	上久々茂土居跡土坑実測図SK40, 41, 45, 47, 48	22
第17図	上久々茂土居跡土坑実測図SK11, 12, 14, 15	23
第18図	上久々茂土居跡土坑実測図SK19, 20	24
第19図	上久々茂土居跡土坑実測図SK18, 21, 22	25
第20図	上久々茂土居跡土坑実測図SK24～26	26
第21図	上久々茂土居跡土坑実測図SK42, 43	27
第22図	上久々茂土居跡土坑実測図SK46	28
第23図	上久々茂土居跡SB05実測図	30
第24図	上久々茂土居跡Ⅲ区遺構位置図	31～32
第25図	上久々茂土居跡SA01実測図	33
第26図	上久々茂土居跡土坑実測図SK54	33
第27図	上久々茂土居跡Ⅳ区遺構位置図	35～36
第28図	上久々茂土居跡土坑実測図SK59～61, 63, 65, 67	37

第 2 9 図	上久々茂土居跡出土陶磁器実測図	38
第 3 0 図	上久々茂土居跡出土土師器実測図	41
第 3 1 図	上久々茂土居跡出土備前播鉢実測図	42
第 3 2 図	上久々茂土居跡出土瓦器実測図	43
第 3 3 図	上久々茂土居跡出土瓦器実測図	44
第 3 4 図	上久々茂土居跡出土石器実測図	46
第 3 5 図	上久々茂土居跡出土土錘実測図	47
第 3 6 図	上久々茂土居跡出土古錢拓影	47
第 3 7 図	上久々茂土居跡出土金属器実測図	48
第 3 8 図	上久々茂土居跡 S B 0 4 模式図	49
第 3 9 図	大峠遺跡土層断面図	54
第 4 0 図	大峠遺跡 I 区遺構位置図	55
第 4 1 図	大峠遺跡 S B 0 1 実測図	56
第 4 2 図	大峠遺跡 S B 0 2 実測図	57
第 4 3 図	大峠遺跡 S K 0 1、S D 0 1 実測図	58
第 4 4 図	大峠遺跡 II 区遺構位置図	61~62
第 4 5 図	大峠遺跡 S B 0 3 実測図	63
第 4 6 図	大峠遺跡 S B 0 4 実測図	64
第 4 7 図	大峠遺跡 S B 0 5 実測図	65
第 4 8 図	大峠遺跡 S B 0 6 実測図	66
第 4 9 図	大峠遺跡 S B 0 7 実測図	67
第 5 0 図	大峠遺跡土坑実測図 S K 0 2 ~ 0 5	68
第 5 1 図	大峠遺跡 III 区遺構位置図	70
第 5 2 図	大峠遺跡 S B 0 8 実測図	71
第 5 3 図	大峠遺跡 S B 0 9 実測図	71
第 5 4 図	大峠遺跡出土須恵器実測図	73
第 5 5 図	大峠遺跡出土須恵器・土師器実測図	74
第 5 6 図	大峠遺跡出土陶磁器実測図	77
第 5 7 図	大峠遺跡出土土師器実測図	78
第 5 8 図	大峠遺跡出土陶器・瓦器実測図	79
第 5 9 図	大峠遺跡出土瓦器実測図	81

第60図	大峠遺跡出土土器実測図	83
第61図	大峠遺跡出土石器実測図	83
第62図	大峠遺跡出土土錘実測図	84
第63図	大峠遺跡出土古銭拓影	84
第64図	大峠遺跡出土金属器実測図	84
第65図	大湍遺跡の掘立柱建物模式図	85
第66図	大峠遺跡の掘立柱建物模式図	86

## 巻頭図版目次

- 巻頭図版1 遺跡周辺を北方から望む，遺跡周辺を南方から望む  
 巻頭図版2 上久々茂土居跡出土貿易陶磁，大峠遺跡出土貿易陶磁

## 図版目次

- 図版 1 1947年米極東空軍撮影空中写真  
 図版 2 1986年撮影空中写真，上久々茂土居跡・大峠遺跡全景（西から）  
 図版 3 全景（東から），全景（西から）  
 図版 4 上久々土居跡調査前風景，全景  
 図版 5 I区全景，I区全景（東から）  
 図版 6 SD05土層堆積状況，SD05検出状況  
 図版 7 SD05完掘状況，SD03土層堆積状況  
 図版 8 SK01，SK02，SK04  
 図版 9 II区全景，II区全景（北から）  
 図版10 SK14，15，16，17，SK09，10，11，12，18  
 図版11 SK05，SK07，SK08  
 図版12 SK10，SK11，SK15  
 図版13 SK21，SK24，25，SK32  
 図版14 SK43，SK44，SK46  
 図版15 SK47，SK52，SK42遺物出土状況  
 図版16 SK06，SK09，SK18，SK30



- 図版 1 7 SK 3 1, SK 3 9, 4 0, 4 1, SK 4 2, II 区石敷検出状況
- 図版 1 8 III・IV 区全景, III 区南東部 (北から)
- 図版 1 9 SB 0 5, SK 5 4, SK 5 5
- 図版 2 0 SK 5 6, SK 5 7, SK 5 8
- 図版 2 1 IV 区北部 (南から), IV 区南部 (北から)
- 図版 2 2 SK 5 9, SK 6 1, SK 6 3
- 図版 2 3 SK 6 0, SK 6 6, SK 6 7
- 図版 2 4 全景 (南から), 調査前風景 (北から)
- 図版 2 5 調査前風景 (南から), 全景
- 図版 2 6 完掘状況 (北から), I 区完掘状況 (東から)
- 図版 2 7 I 区遺物出土状況, I 区 SK 0 1 土錘出土状況
- 図版 2 8 II 区北側完掘状況 (南から), II 区南側完掘状況 (北から)
- 図版 2 9 SK 0 4, P 5 柱痕出土状況, SB 0 3 柱痕出土状況
- 図版 3 0 III 区完掘状況 (西から), 調査風景
- 図版 3 1 出土遺物 (外面), 出土遺物 (内面)
- 図版 3 2 出土遺物、出土遺物
- 図版 3 3 出土遺物 (外面)、出土遺物 (内面)
- 図版 3 4 出土遺物、出土遺物
- 図版 3 5 出土遺物、出土遺物
- 図版 3 6 出土遺物 (上: 外面, 下: 内面)、出土遺物
- 図版 3 7 出土遺物、出土遺物
- 図版 3 8 出土遺物 (外面), 出土遺物 (内面)
- 図版 3 9 出土遺物、出土遺物
- 図版 4 0 出土遺物、出土遺物
- 図版 4 1 出土遺物、出土遺物
- 図版 4 2 出土遺物、出土遺物

## 表 目 次

第1表	上久々茂土居跡出土土器観察表 .....	45
第2表	上久々茂土居跡土坑一覧表 .....	50~51
第3表	大峠遺跡出土土器観察表1 .....	75
第4表	大峠遺跡出土土器観察表2 .....	82
第5表	大峠遺跡土坑一覧表 .....	87

## 第1章 調査に至る経緯

1983年の石見水害では、益田市の市街地は多くの被害を生じた。こうした災害に対して島根県においては、益田川の治水事業が策定され、治水ダム建設が計画された。このダム建設に伴い、現在の国道191号の付替が必要となり、その建設予定地内の埋蔵文化財との調整が図られた。

1987年、益田土木建築事務所から依頼を受けた益田市教育委員会が分布調査を実施した。その結果、予定地内には遺跡は確認できなかったが、上久々茂の丘陵上には、鎌倉時代に益田氏が居館を構えたことに由来する「土井」という地名が残っていること、周辺に7基の古墓が点在していることなどから、館跡が存在する可能性もあるので事前に試掘調査を行い、遺跡の有無を確認する必要があるとした。その後、益田市教育委員会と島根県教育委員会は上久々茂にある遺跡の取扱いについて協議を重ねた。その結果、島根県教育委員会が調査主体となって遺跡の確認調査を国庫補助金を受け、1990、91年に実施し、中世の遺構および遺物などを検出した。

こうしたなか、益田市の三宅御土居跡の保存問題と関連して、上久々茂土居跡も注目を浴びるようになった。さらに、1990年2月に地元の研究者が上久々茂の丘陵の北側丘陵において分布調査を実施し、青磁などの破片を採集した。これが大峠遺跡の発見である。

ところで、国道191号は石見西部と広島県を結ぶ幹線道路であり、近年、交通量が増大し、道路の拡幅整備が計画された。建設省は権限代行により工事主体となり、計画が練られた。建設省と島根県教育委員会は協議し、建設省が島根県教育委員会に委託し、1993年に上久々茂土居跡と大峠遺跡の発掘調査を行うこととなった。

## 第2章 位置と歴史的環境

益田市は旧石見国に属し、山口・広島両県と接する島根県の西部に位置する。現在は鹿足郡・美濃郡とともに石西と呼ばれ、その中央部を中国山地に源を発する高津川・益田川の二大河川が貫いて日本海に注いでいる。

益田市は両河川のデルタ地帯を中心に拓けた所で、人口約5万人の石西の中核都市である。古くからこの地方での交通の要衝として栄えていたが、今もJR山陰本線が通り、益田駅からはJR山口線が分岐している。さらに、一般国道9号と191号が交差し、道路網も整備されている。

益田平野における弥生時代以前の様子は、遺跡が少ないため明らかではない。しかし、古墳時代以降については多くの遺跡が知られ、古くから拓けた地域であることを物語っている。

古墳時代には平野の周辺部の丘陵や山腹に古墳や横穴墓が造られ、石見地方における古墳文化の中心地域の一つとなっている。主なものとしては、四塚山古墳群（三角縁神獸鏡が出土）、大元1号墳、小丸山古墳、スクモ塚古墳、鶴ノ鼻古墳群などが分布している。また、西平原窯跡群や本片子窯跡などの須恵器の窯跡も調査されている。

奈良時代の遺跡については石見空港建設時に調査された集落跡の大湫遺跡がある程度で、あまり分かっていない。また、平安時代も同様で、集落跡の羽場遺跡や中国の青磁を経筒として埋納した石塔寺権現経塚が知られているにすぎない。

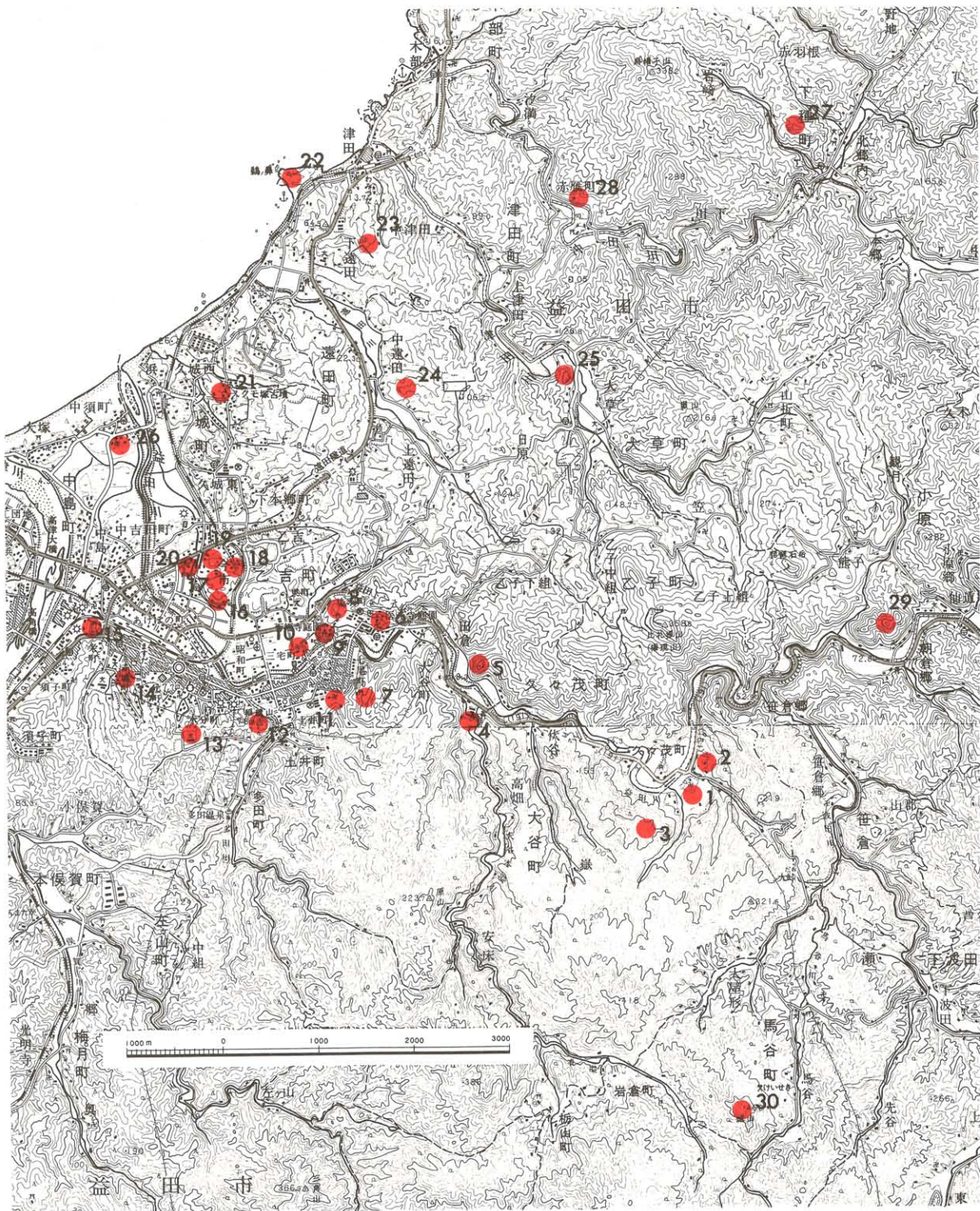
一方、中世以降になると地方豪族の益田氏に関わる良好な遺跡が数多く残っている。その中心的な存在である七尾城跡は益田氏の拠城として築かれた山城であり、周辺には館である三宅御土居跡や城下町にあたる七尾の市街地、貿易拠点の今市船着場跡、上久々茂土居跡より下流側に位置する大谷土居跡などがある。さらには、益田氏の菩提寺である医光寺、万福寺、妙義寺をはじめ、染羽そめば天石勝神社など益田氏との関係の深い神社仏閣も多く残り、それぞれの境内には歴代当主の墓と伝わる五輪塔などが残っている。しかし、関ヶ原の合戦（1600年）に毛利氏に組して参戦したため、江戸時代には毛利氏領内の長門国須佐に移ることとなった。その後の益田は高津川を境に東部が浜田藩、西部が津和野藩に分かれて治められ、商業都市として発展しながら今日に至った。

上久々茂土居跡と大峠遺跡は益田市久々茂町に所在し、益田の市街地より東に約7 Kmの益田川の河岸段丘上に立地する。この両遺跡は小川を挟んだ2カ所の段丘上で向かい合うように位置し、周囲が崖状を呈しており、天然の要害となっている。また、この地は美濃郡美都町や益田市馬谷町および同市真砂地区へ抜ける交通の要衝であり、中世においては益田氏の支配する領地の中央部にあたり、軍事的にみても重要な地点と考えられる。

石塔や古墓としては、上久々茂土居跡の周辺にあわせて10基ほどの五輪塔・宝篋印塔が存在しており、益田川流域では分布が密な地域といえる。このうち注目されるのは土井殿の墓と呼ばれる古墓である。2段の石積基壇上に置かれた小形の五輪塔で、室町時代頃に造られたものと考えられる。宝篋印塔では山根古墓（基礎部）・とうの山古墓（相輪部）が最も古く、南北朝時代頃と推定される。

なお、この地に存在する社寺としては、上久々茂土居跡に隣接する浄土真宗得毫寺があり、さらに、益田川を挟んで対岸の段丘上には惣八幡宮が鎮座している。





第1図 上久々茂土居跡・大峠遺跡と周辺の主要遺跡など

1. 上久々茂土居跡
2. 大峠遺跡
3. 伝バンジョウ山番所跡
4. 大谷土居跡
5. 大谷城跡
6. 医光寺
7. 七尾城跡
8. 秋葉山古墳
9. 万福寺
10. 三宅御土居跡
11. 妙義寺
12. 福積城跡
13. 水分経塚
14. 赤城城跡
15. 高川城跡
16. 鶯ヶ松城跡
17. 小丸山古墳
18. 四塚山古墳群
19. 上の山城跡
20. 今市船着場跡
21. スクモ塚古墳
22. 鶯ノ鼻古墳群
23. 本片子窯跡
24. 大元古墳群
25. 大草城跡
26. 安福寺三重石塔
27. 高倉山城跡
28. 赤雁土居跡
29. 四ツ山城跡
30. 馬谷高嶽城跡

## 第3章 調査の経過

上久々茂土居跡の調査区は南北に長く、また、途中には現在の生活道も挟んでいた。調査区が広いので、畑の区画を考慮して北側からⅠ区とし、Ⅳ区まで設定した。調査としては、まず、5月21日から地形測量を始め、5月25日よりⅠ区から全面発掘に入った。Ⅰ区では掘立柱建物や溝などの遺構を検出した。Ⅳ区はⅠ区に引き続いて、6月14日から入り、徐々にⅢ区、Ⅱ区へと移っていった。Ⅳ区では10数cmの耕作土を除去すると、南側で近世・近代の土坑を確認したが、北側ではほとんど遺構は存在しなかった。Ⅲ区は遺構の占める割合は少ないが、西側で掘立柱建物を、また、東側ではややまとまって土坑と柵列を検出した。そして、Ⅱ区に入ったが、焼土や炭化物が西側や南側で広がっていた。これを取り除くと多くの土坑やピット群が姿を現わした。これらの写真撮影、遺構実測調査を行い、10月28日に終えた。

大峠遺跡は北側からⅠ区とし、畑の区画を考慮してⅢ区まで設定した。9月24日から地形測量を行い、Ⅲ区から発掘調査に入った。地形がやや高くなっており、遺構の残りはよいと考えたが、20～30cmの耕作土を除去した後、西側に、最近掘られた井戸などがあるほか、ほとんど遺構は存在しなかった。Ⅰ区、Ⅱ区は同時に行い、Ⅰ区からは掘立柱建物や溝を、また、Ⅱ区からも、掘立柱建物やピット群を検出した。そして、11月19日に空中写真撮影、翌日に現地説明会を開催し、同月30日に現地調査を終了した。

## 第4章 上久々茂土居跡

### 第1節 遺跡の位置と概要

この遺跡は東西300m、南北100mの標高55mを中心とした河岸段丘上の平坦面に位置する。平坦面の西側には益田川が流れ、南・北・西は約19～20mの比高差をもつ崖になっている。また、東側は平坦面が山裾まで続くが、約100mの所で小さい谷が入り込み、1つの区画をもっている。段丘上は水が豊富で、現在では水田が作られている。調査区は畑地であった。なお、同じ段丘上には古墓が多くある。

今回の調査の結果、Ⅰ区で15世紀～16世紀にかけての遺物と溝、土坑群、ピット群を検出し、2棟の掘立柱建物を確認した。Ⅱ区では多くの遺構が密集しており、約50の土坑群と300近いピット群、さらに、東側で加工段を検出した。調査区の北側と南側で2棟の掘立柱建物を確認し、南側の掘立柱建物は大型であった。遺物としては、調査区全面から中国製磁器、多くの土師器や石





第2図 調査区配置図

器が出土した。Ⅲ区ではⅡ区と一変し、遺構が少なくなる。検出遺構は土坑群とピット群で、東側ではⅡ区の続きの加工段を確認した。ピット群のいくつかは、掘立柱建物と柵列を構成していた。遺物は少なく、ほとんどが小片であったが、朝鮮王朝陶器も出土した。Ⅳ区からは南側で近代の土坑を、また、ピットも数は少ないが検出した。遺物は近世・近代のものがほとんどであるが、中国製青磁や青釉輪花小皿の小片が出土した。

## 第2節 遺構

### I区(第3、4図)

調査区は舗装された道の北側斜面に位置しており、南側から北側に向かって低くなっている。この地は昭和の初めまで桑畑として使用されており、かなり深くまで掘り返されていると思われた。調査区外の北側は高さ2mの石垣を築き、土の崩落を防いでいる。この石垣の下は、幅13mの平坦面の後、急な崖となっている。

調査により、標高52m付近の等高線に平行する大きな溝、それに直角に流れ込む南北に延びる幅のやや狭い溝およびそれらの溝の内側に2棟の掘立柱建物と多くのピットを検出した。

東側の南北壁の土層堆積状況を見ると、40cmのかなり厚い耕作土があり、その下に厚さ20cmの地山ブロックの間層、再び耕作土が堆積し、地山となる。西側は耕作土が20cmと浅く、すぐ地山となる。しかし、調査区中央付近には地山の上に赤茶褐色土の無遺物層が30cmほどあり、その上面から遺構が掘り込まれていた。なお、地山はかなりの傾斜をもって、北側に向かって下がっていた。

#### 掘立柱建物

##### SB01(第5図)

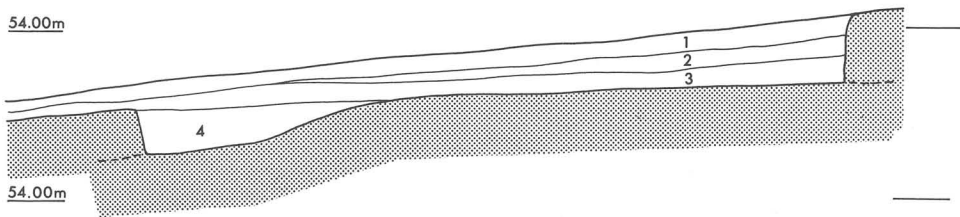
調査区の南側で検出した。SB02とは重複関係にある。桁行2間3m以上、梁行1間2.0mで、桁行は調査区外に続いていると思われ、2間以上と推定される。桁行の方位はN-73.5°-Wで、ピット間は桁行2.3m、2.5m、2.5m、2.3m、梁行2.0mを測る。ピットの大きさは上端で、20~40cm、深さは20~40cmを測り、ややばらつきがある。ピットの一部には25cm前後の石が入っているものもある。床面はやや傾斜して、北側が低くなっている。出土品はなく、時期は不明である。

##### SB02(第6図)

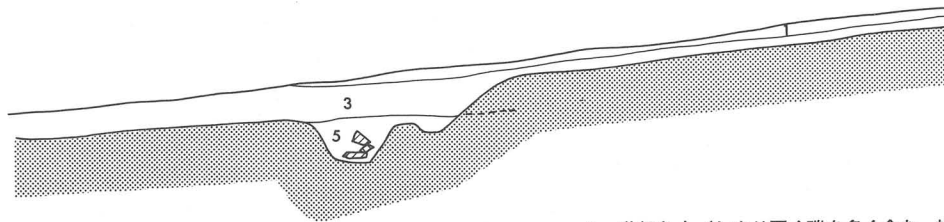
調査区の南側で検出した。付近には多くのピットが存在し、SB01とは重複関係にある。柱穴はP1~P4で構成されている。桁行1間1.8m以上、梁行1間2.8mで、桁行は調査区外に続いていると思われ、2間以上と推定される。しかし、北側の桁行でピットが確認できず、建物とするには躊躇するが、礎石など置かれていた可能性も考えられる。桁行の方位はN-40°-Wである。ピット間は桁行で1.8m、2.0m、梁行2.8mを測る。ピットの大きさは32~52cm、深さは



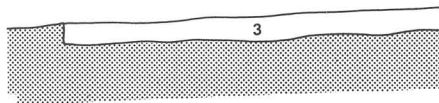
54.00m



54.00m

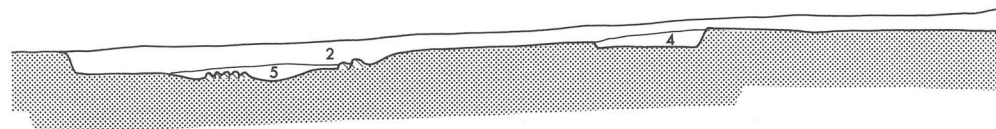


53.00m

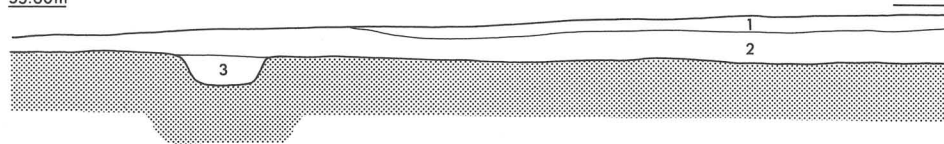


1. 茶褐色土 (しまり悪く礫を多く含む-耕作土-)
2. 赤褐色粘質土 (地山ブロック)
3. 淡茶褐色粘質土 (耕作土)
4. 赤茶褐色粘質土 (無遺物層)
5. 茶褐色粘質土層

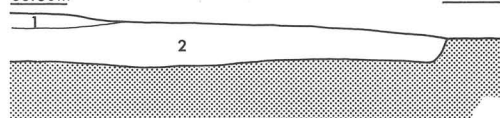
55.60m



55.60m



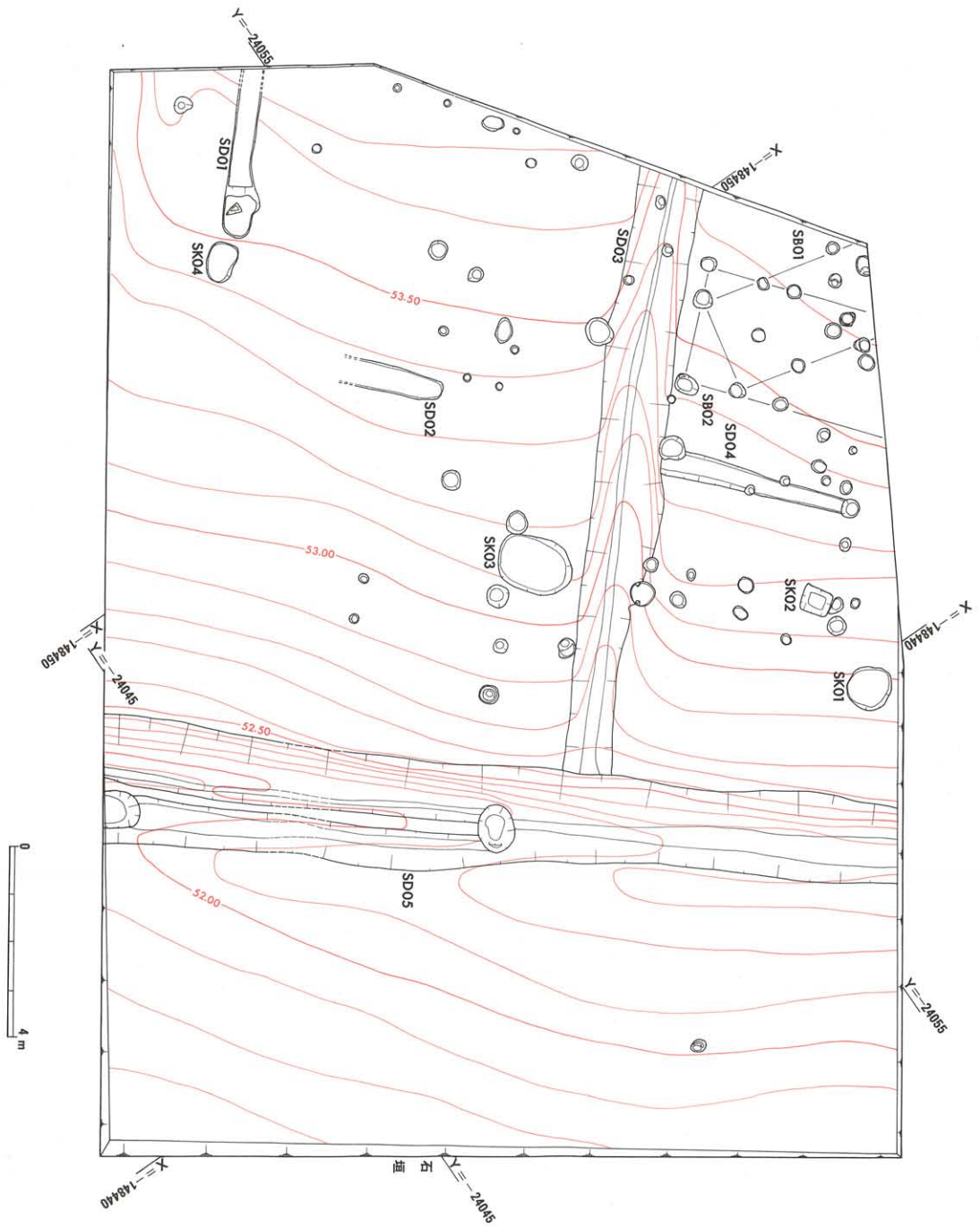
55.60m



1. 赤褐色土 (現在の瓦、セメントなどを含む)
2. 灰褐色土 (小礫を若干含む-耕作土-)
3. 黄褐色土
4. 灰黄褐色土 (2より黄色)
5. 2~3mmの小礫層



第3図 上久々茂土居跡土層断面図 (上・I区 南北壁、下・II区 北端南北壁)



第4図 上久々茂土居跡I区遺構位置図

20～30cmを測る。ピットの一部には1～2個の小さい石が入っているものもある。出土品はなく、時期は不明であるが、溝に平行して建てられおり、溝と同時期の可能性がある。

### 溝 (第8図)

#### SD01

調査区の東側で確認した。長さ3.5m以上、幅60cm、深さ10cmを測り、やや浅い。なお、南側は調査区外に続いている。出土品はなく、時期は不明である。

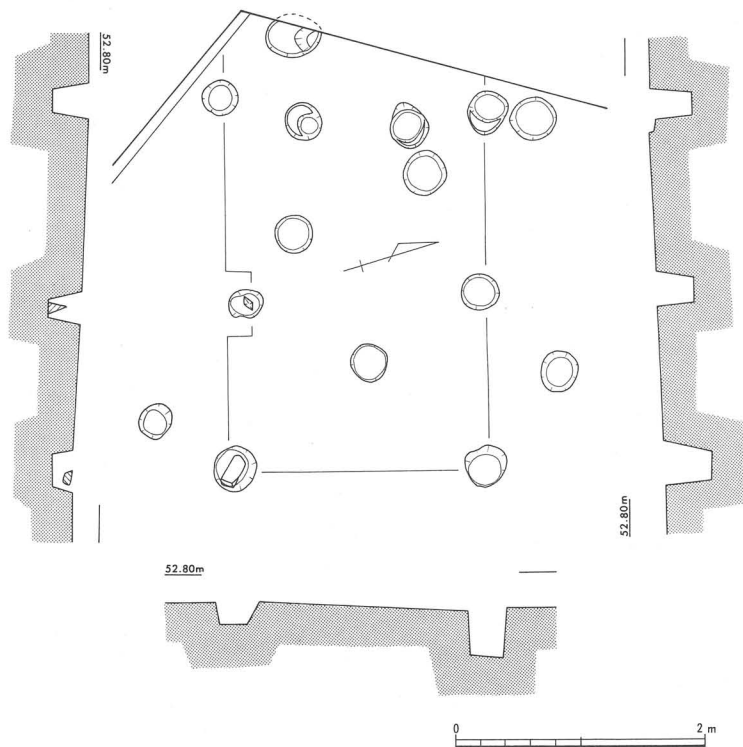
#### SD02

調査区の東側で確認した。長さ2m以上、幅48cm、深さ5cmを測る。東側は未調査であるが、3.6m以上になることはない。出土品はなく、時期は不明である。

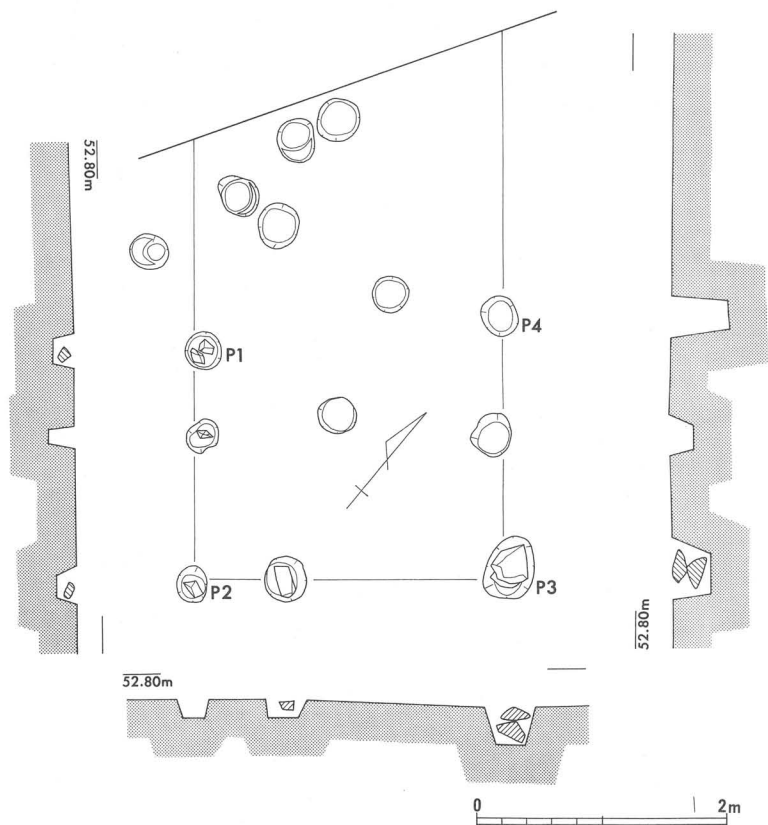
#### SD03

前回のⅧ区SD01に該当する<sup>(1)</sup>。

調査区を南北に貫く幅1.15m、深さ21cmの溝で、やや大きい。傾斜は自然の傾斜と同じで、北側が低い。北側でSD05につながっている。床面はU字形をしており、自然の傾斜を利用した排水溝のようなもので、水がこの溝を通り、北側に流れていたであろう。



第5図 上久々茂土居跡S B 0 1実測図



第6図 上久々茂土居跡SB02実測図

埋土と床面から16世紀の中国製青花が出土した。

SD04

調査区の西側で確認した。長さ4.24m、幅42cm、深さ5cmを測る。調査区の西側へは続かない。SD02を西側にほぼ延長した位置にある。出土品はなく、時期は不明である。

SD05 (第7図)

調査区を東西に走る幅2~2.5m、深さは北で50cm、南で20cmの溝である。傾斜は東が低くなっている。検出時は溝の中央部に幅1m、厚さ25cmの範囲にかなり固く石が敷かれていた。石は10cmほどの拳大の大きさで、やや黄色を帯びた白色で軟質の角礫である。溝の中央には1m、深さ20cmの落ち込みがある。また、溝の東端で、上端が1m、下端80cm、深さ37cmの落ち込みがある。これがピットであるかどうかは半分以上が調査区外のため不明である。この落ち込みにも石が入っていた。溝の床面は中央を15cmほど高く、両側に幅20cmの溝を作っている。その高くなったところ付近に石が敷かれていた。用途は不明である。

溝の堆積はほとんど茶褐色土の一層である。SD05は拳大の石を含む黄褐色土の両脇に茶褐色土が堆積していた。

土坑 (第9図)

SK01、03

8～30cmの角礫が詰められていた。2つの土坑は、壁面も垂直で、床面も平らでしっかりしている。出土品はなく、時期は不明である。

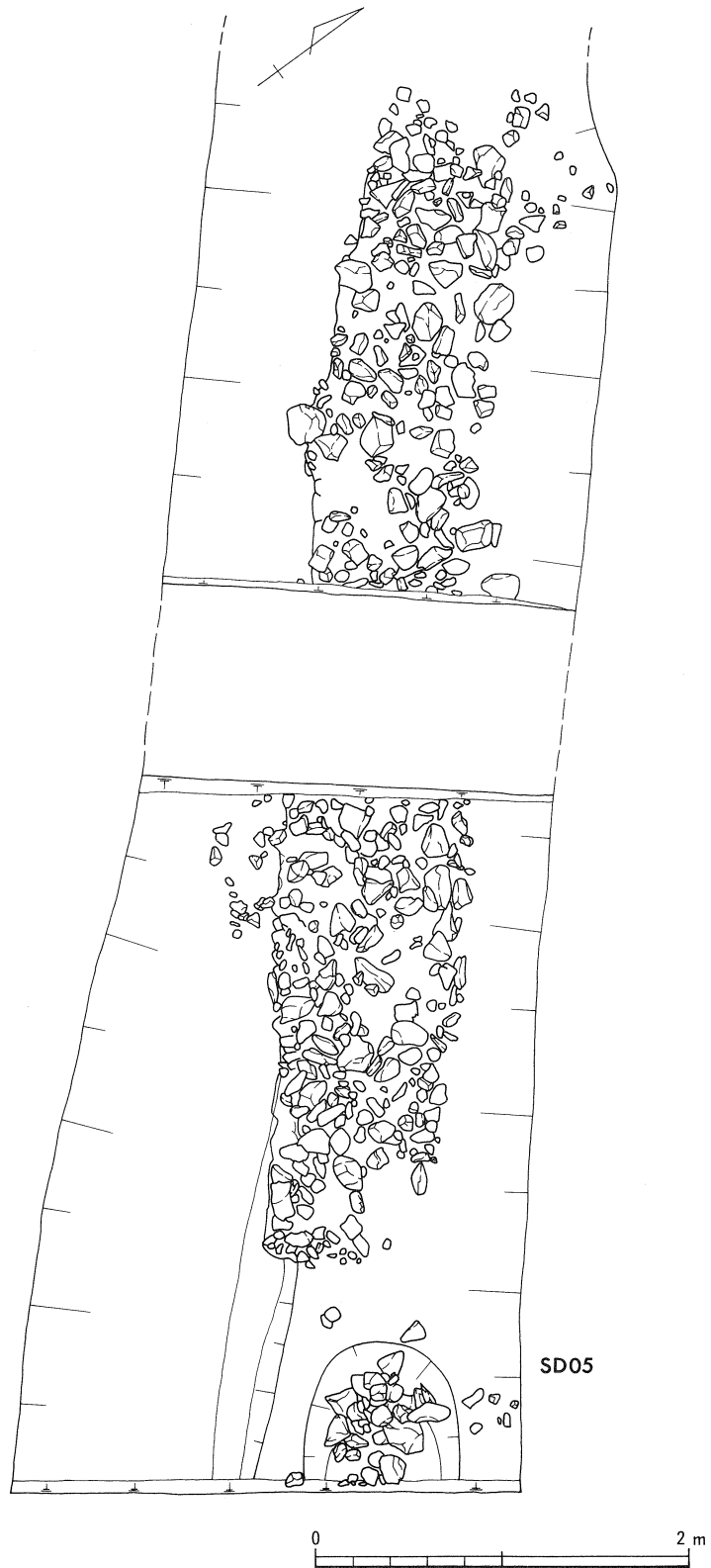
SK02

30cmほどの上面が平らな大きな石を検出した。このため、土坑ではなく、礎石を入れたピットの可能性もある。出土品はなく、時期は不明である。

SK04

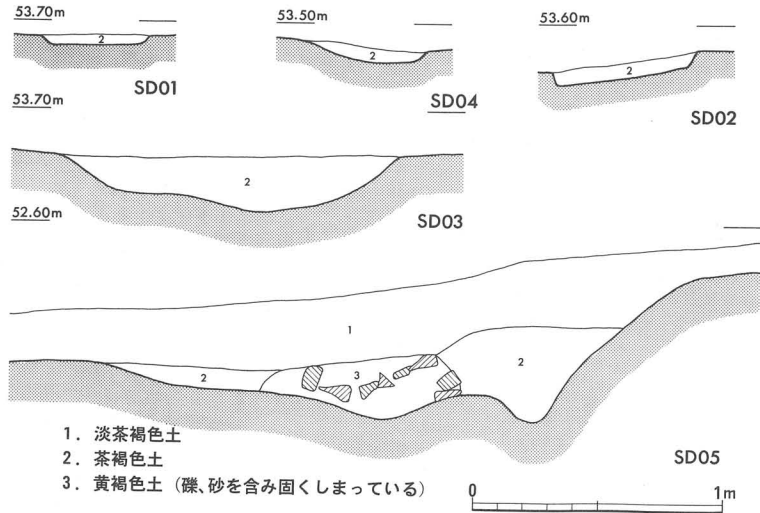
深さ10cmと浅く、楕円状を呈している。内に10～20cmの石が4個あった。出土品はなく、時期は不明である。

ピットから出土品はなかった。しかし、前回の調査では近世の陶磁器が出土しているので、この時期の遺構もあったと思われる。

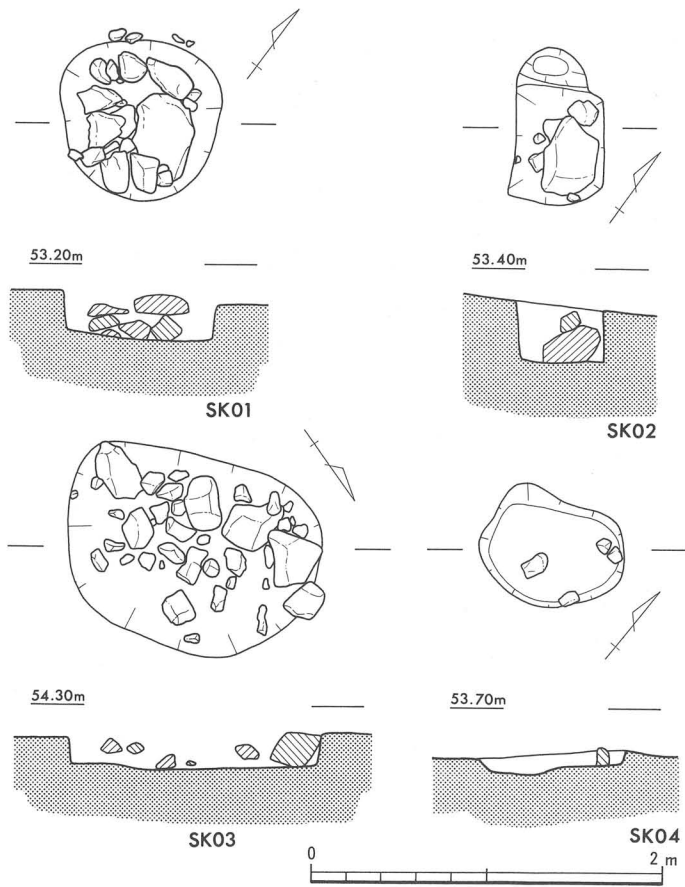


第7図 上久々茂土居跡SD05検出状況

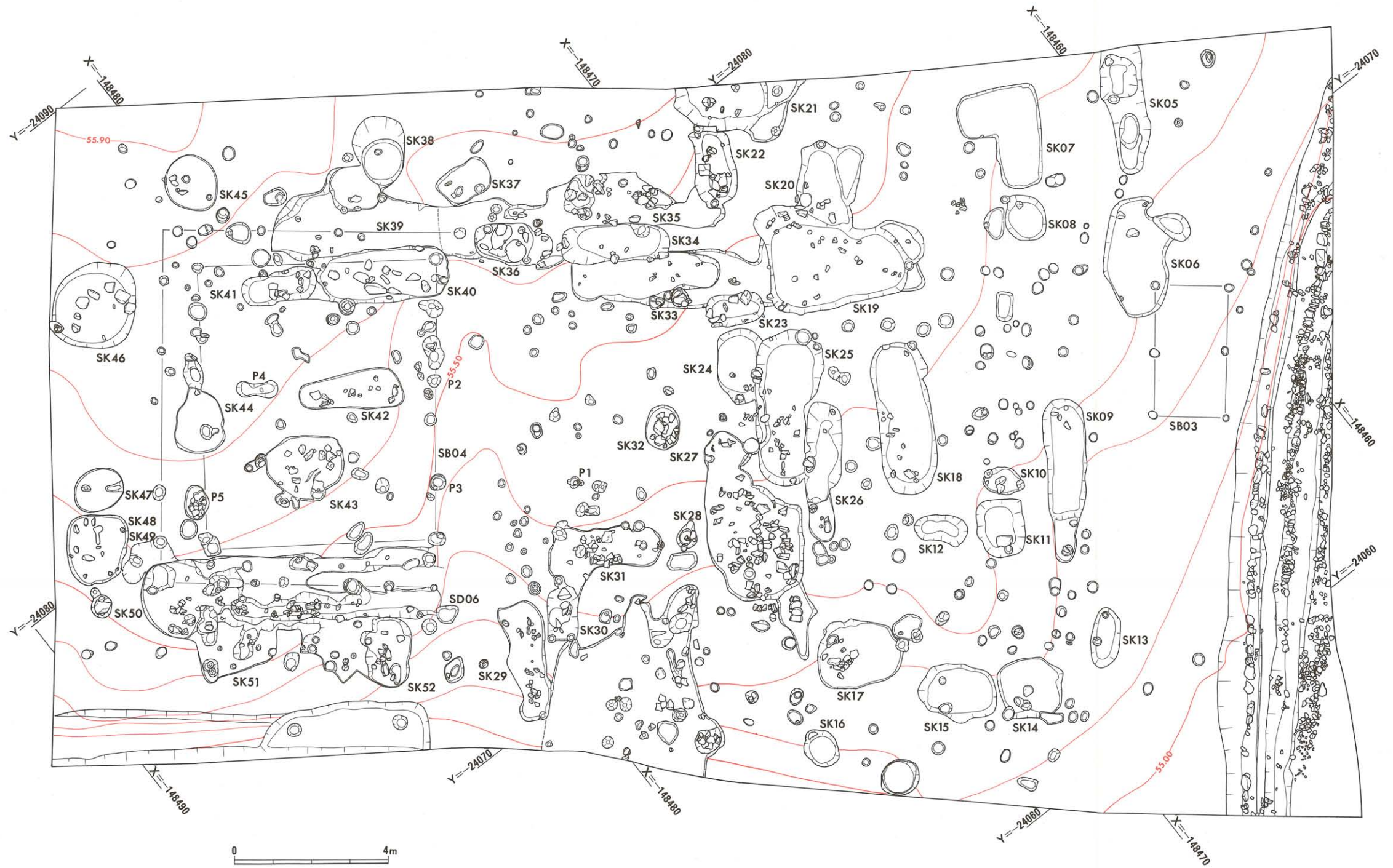




第8図 上久々茂土居跡溝土層堆積図



第9図 上久々茂土居跡土坑実測図



第10図 上久々茂土居跡Ⅱ区遺構位置図

## Ⅱ区（第3、10図）

丘陵上の平坦面北側に位置し、Ⅰ区とは道路を挟んで南側である。調査区の全域から多くの土坑、ピットを検出した。また、東側では加工段を確認した。掘立柱建物が2棟以上存在していたと思われる、1棟は桁行2間、梁行1間で、もう1棟はかなり規模が大きく、桁行5間、梁行3間である。また、土坑は規格性があったと推測され、多くの土坑は調査区に対して直角ないしは平行に存在した。調査前に中央やや南側に畑の区画があった。その畦の下からピットがきれいに並んで確認され、現在の畑の区画は案外、中世の地割りがそのまま残った可能性がある。

土層堆積状況を見ると、基本的には30～40cmの耕作土の下はすぐ地山で、遺構面であった。しかし、遺構の集中する西側には、地山の直上には約10～15cmの焼土や炭化物を多く含んだ赤褐色土が堆積し、遺構を覆っていた。地山は東側と北側に向かって徐々に低くなっている。出土品としては、耕作土から多くの近世・近代の陶磁器に混じり、青磁、土師器、須恵器とともに黒曜石がある。

### 掘立柱建物

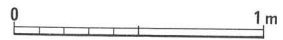
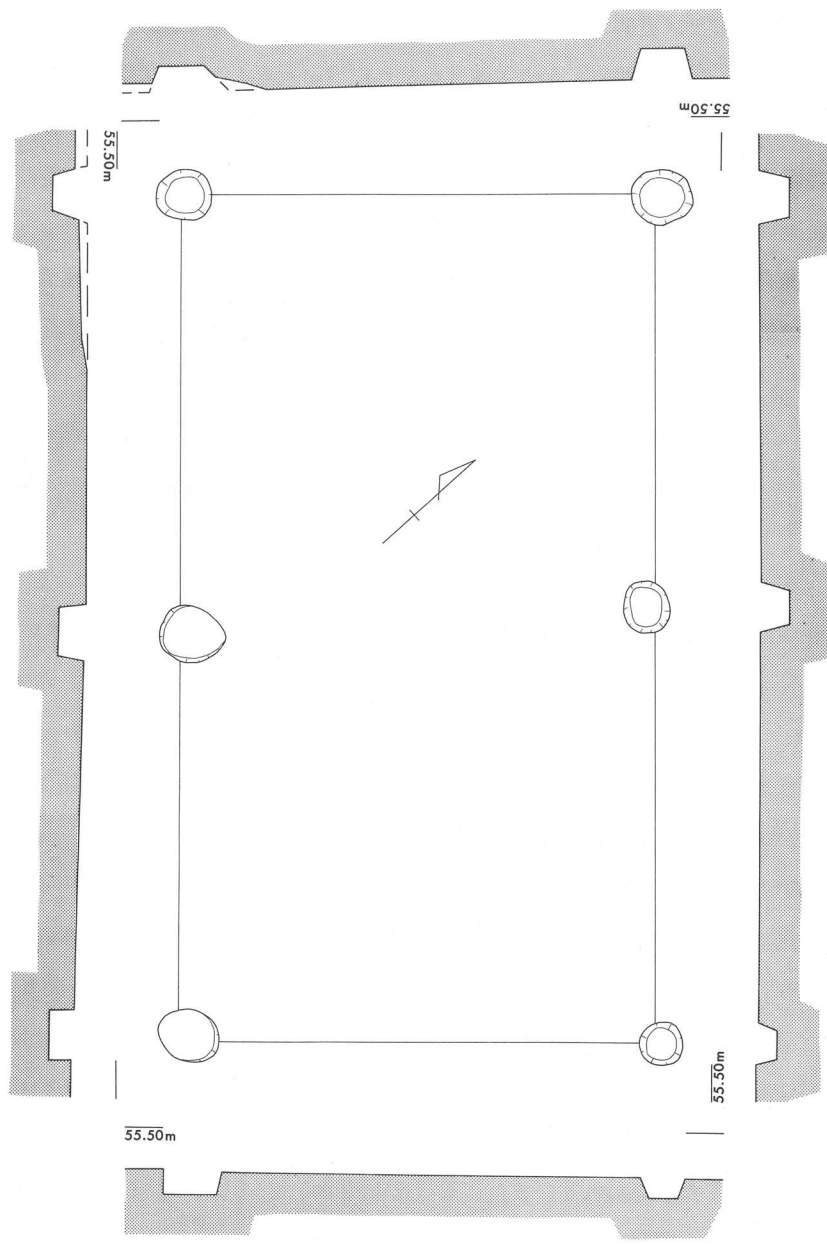
#### SB03（第11図）

調査区の北側に位置する。桁行2間3.4m、梁行1間1.9mで、やや規模は小さい。桁行の方位はN-50°-Wである。ピット間の距離は桁行で、南1.7m、1.6m、北1.6m、1.7m、梁行で1.9m、1.9mを測る。ピットの大きさは上端で18～20cm、深さ10～12cmを測り、ほぼ均一な大きさである。南西隅のピットはSK06と重複関係にある。前後関係は土層観察からSK06の方が新しい。出土遺物はない。

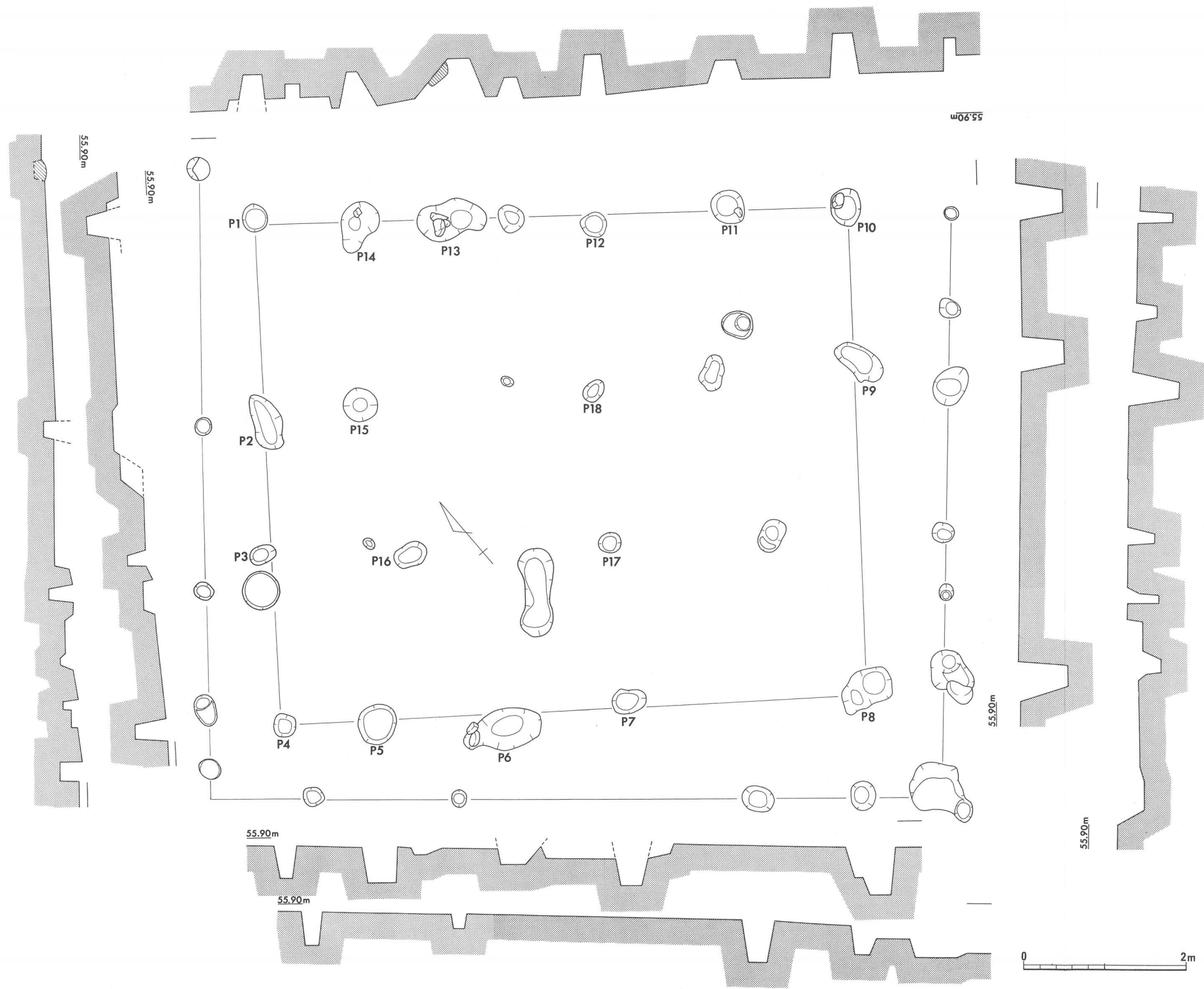
#### SB04（第12図）

調査区の南側に位置し、北側と東側には小さい溝状の凹みがあり、周囲と区画され、20cm程高く見える。調査した中でもっとも大きな規模であり、桁行5間7.2m、梁行3間6mを測り、南側、西側と東側には目隠し塀、あるいは縁側と思われるものが付く。桁行の方位はN-51°-Wである。ピット間の距離はP4～P5、P1～P14が1.2m、他は1.5m～1.6mで、P7とP8の間は3mと広く、間に礎石を置いた可能性がある。P1～P14、P4～P5の間隔は狭く、付設のものであったと思われる。また、梁行は1.8m、2.0m、2.4mで、1.8mと2.0mが多い。P8とP9の間は4.0mあり、間に礎石を置いたと思われる。ピットの大きさは20～40cm、深さ20～60cmとまちまちではあるが、土坑などが重なりあっているため、本来はかなりしっかりしたものであろう。建物の中のピットはP15～P18はほぼ確実で、等間隔である。

周囲のピットの大きさは10～20cmのものが多く、やや小型である。建物跡から東で1.1m、

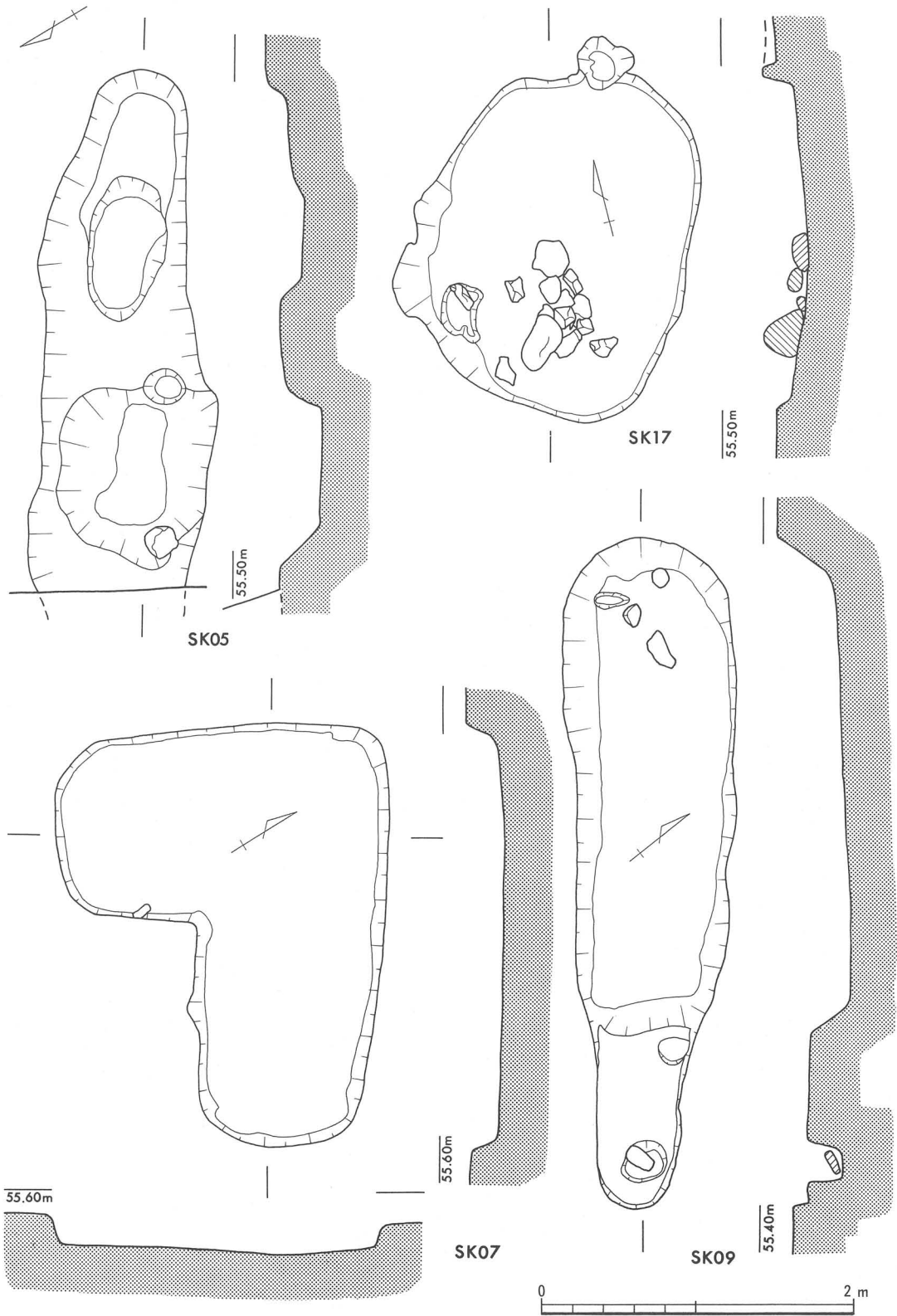


第11図 上久々茂土居跡SB03実測図

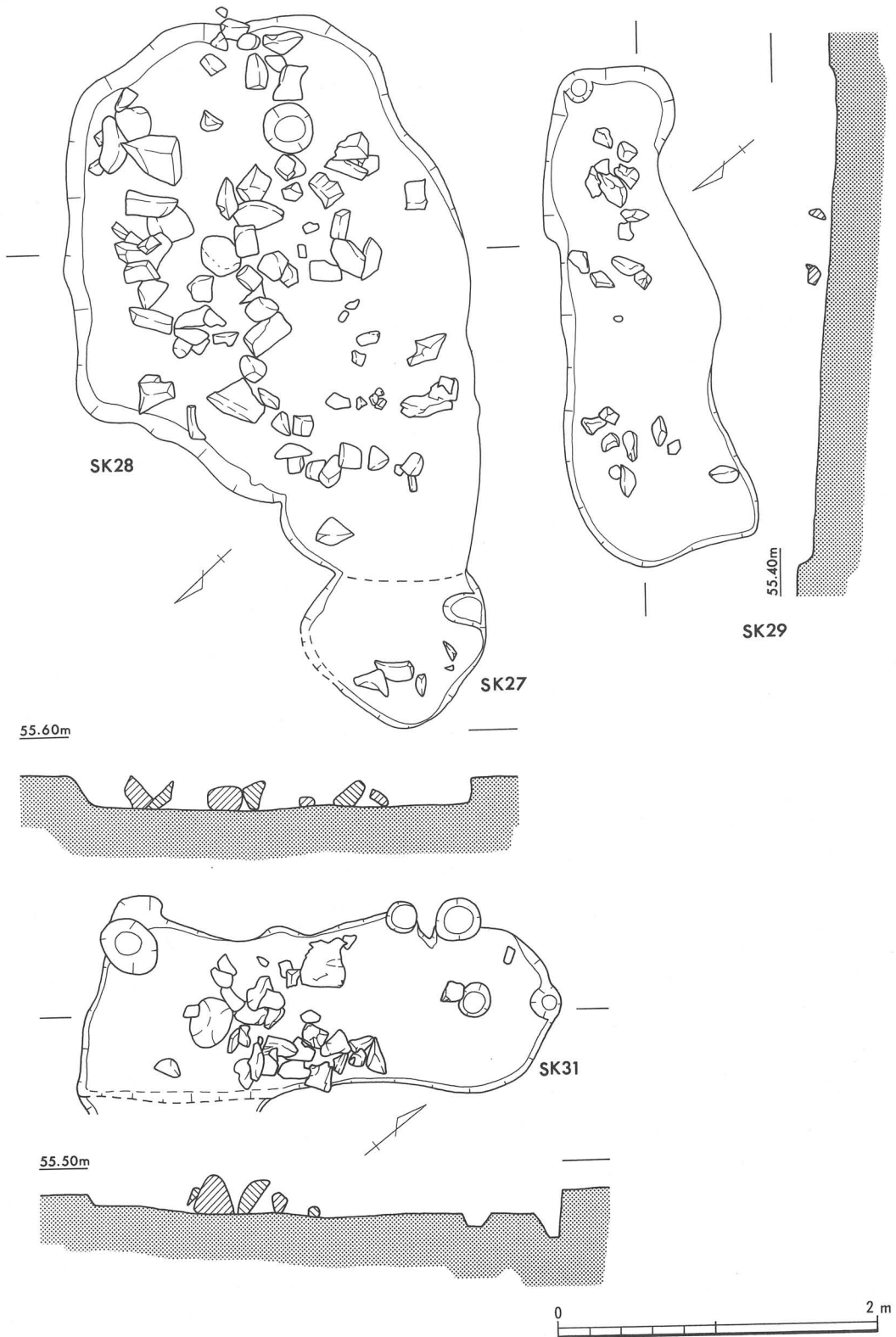


第12図 上久々茂土居跡SB04実測図

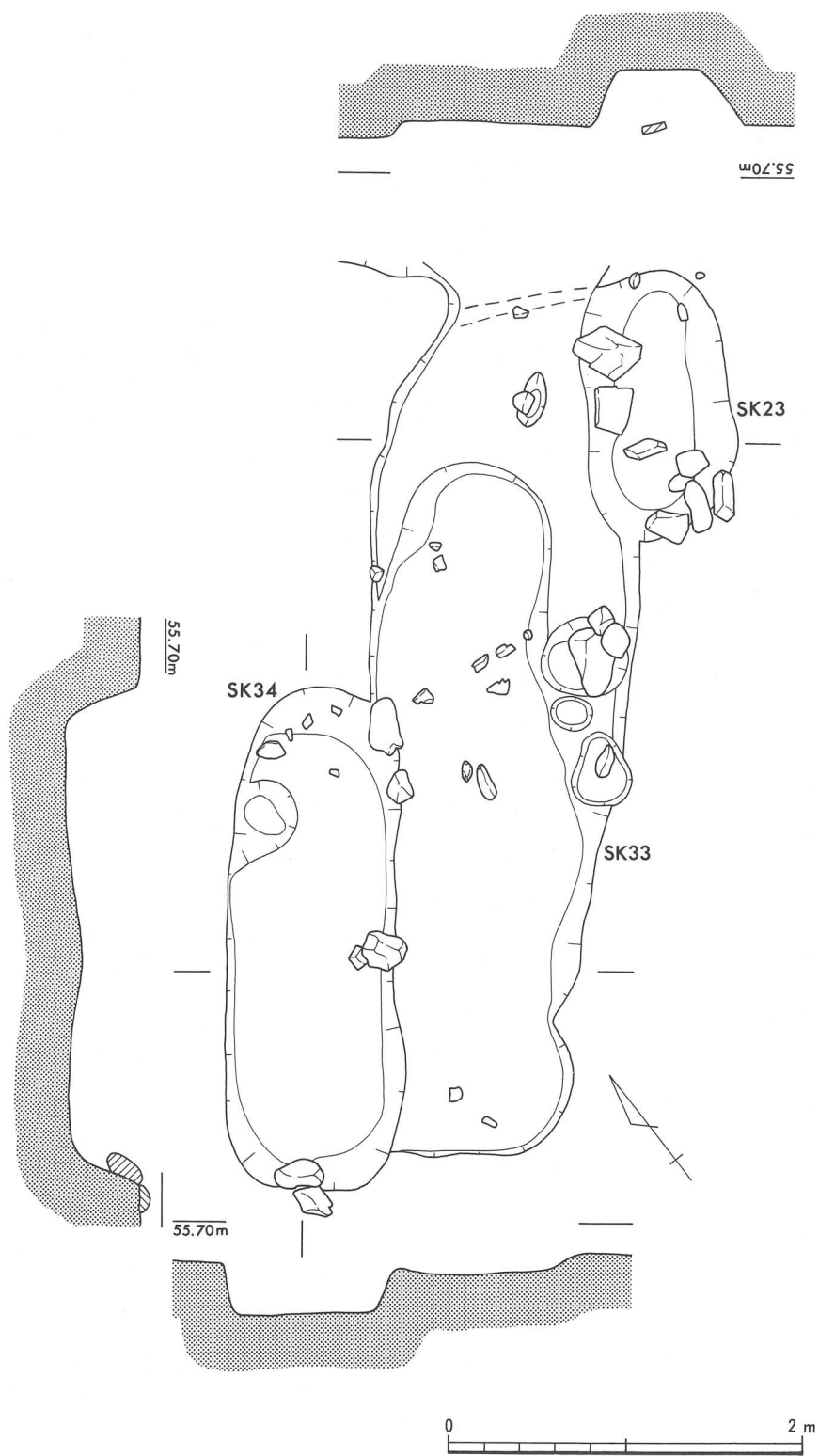




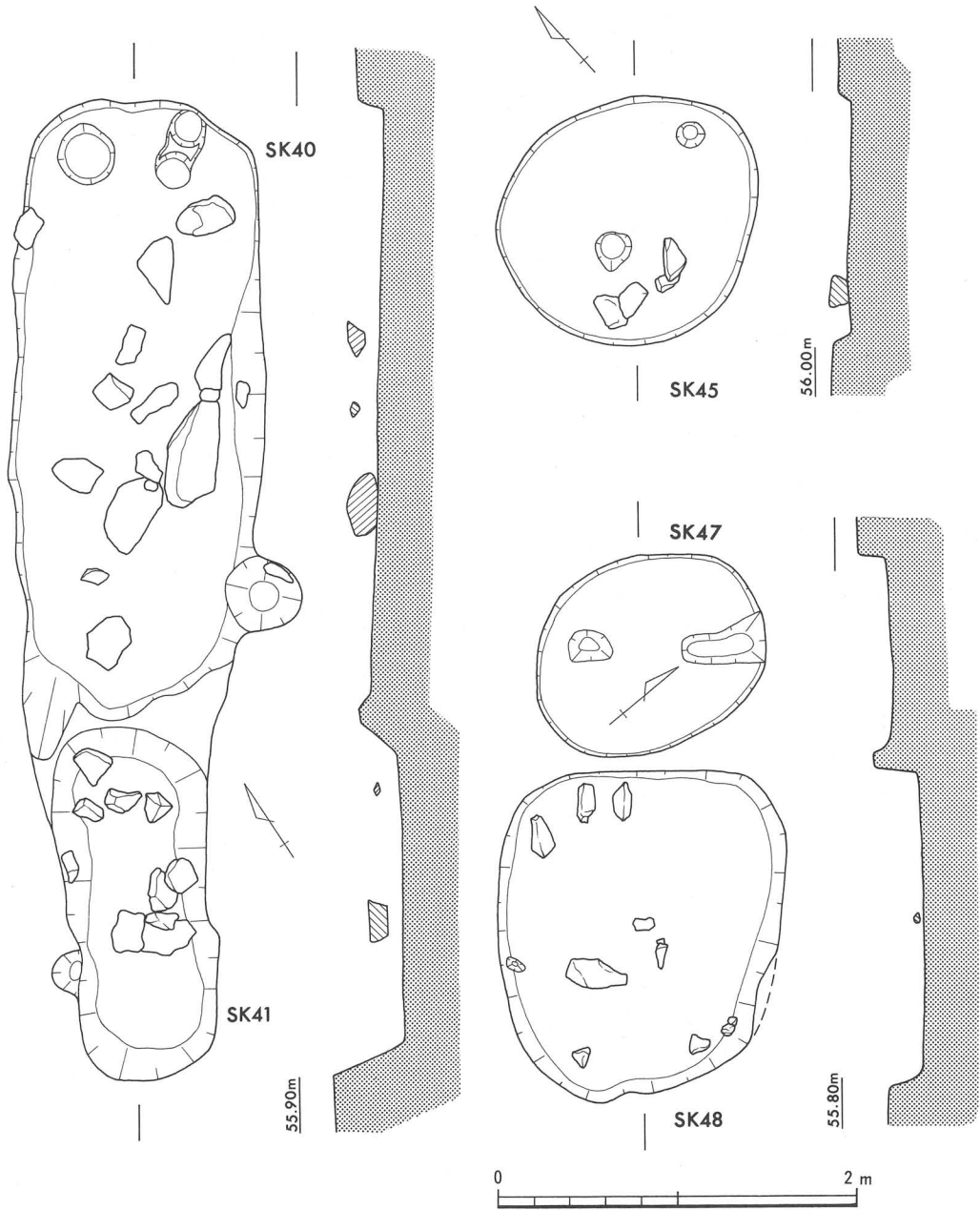
第13図 上久々茂土居跡土坑実測図



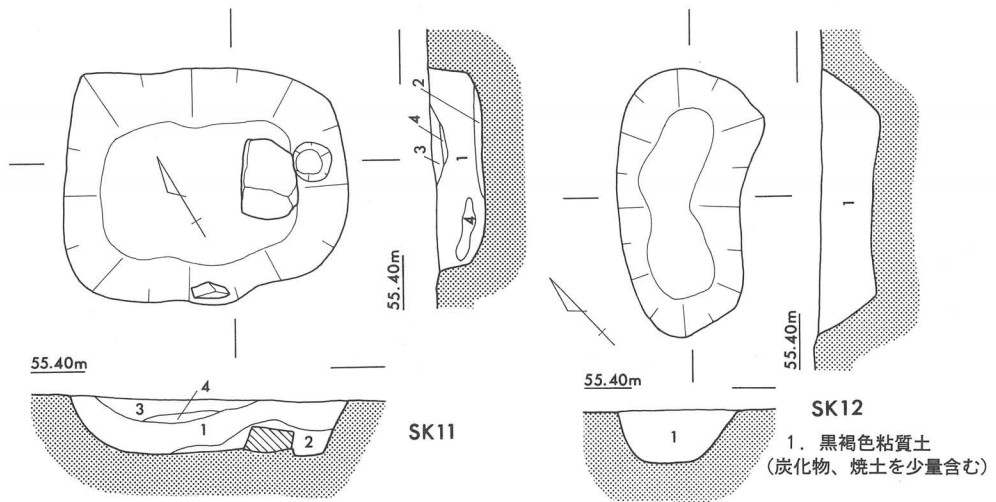
第14図 上久々茂土居跡土坑実測図



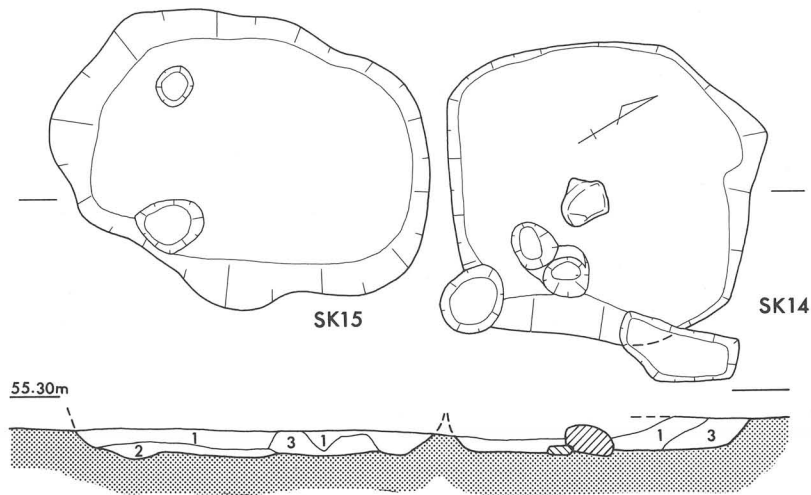
第15図 上久々茂土居跡土坑実測図



第16図 上久々茂土居跡土坑実測図



1. 黒褐色粘質土 (焼土、炭化物を多く含む) 2. 炭化物層  
 3. 黒灰褐色粘質土 (炭化物を多く含む) 4. 焼土・炭化物ブロック

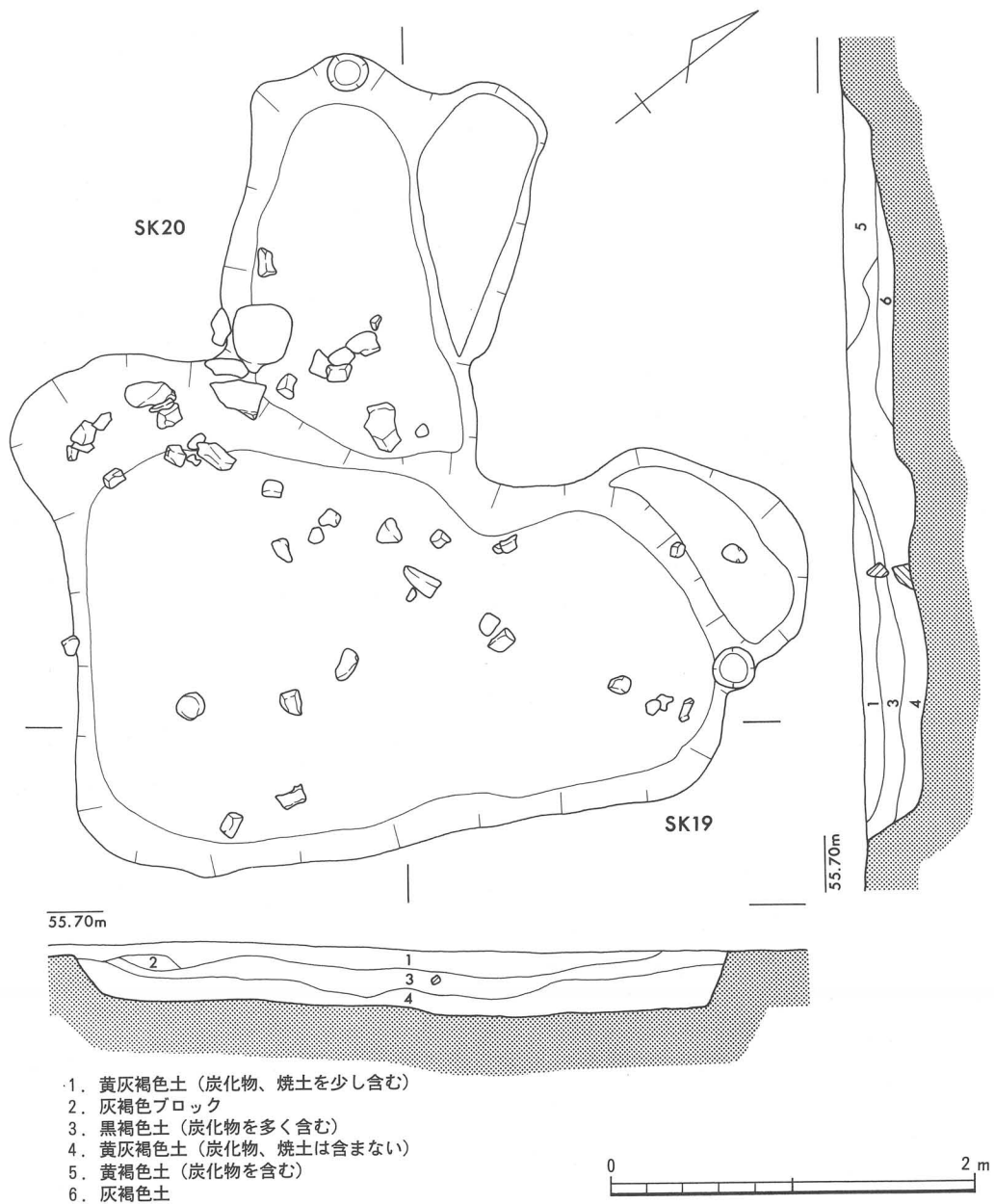


1. 茶褐色土 (焼土、炭化物を多く含む)  
 2. 黒色土 (炭化物を多く含み、焼土も少し含む)  
 3. 黄褐色粘質土 (地山に似るが、少量炭化物を含む)

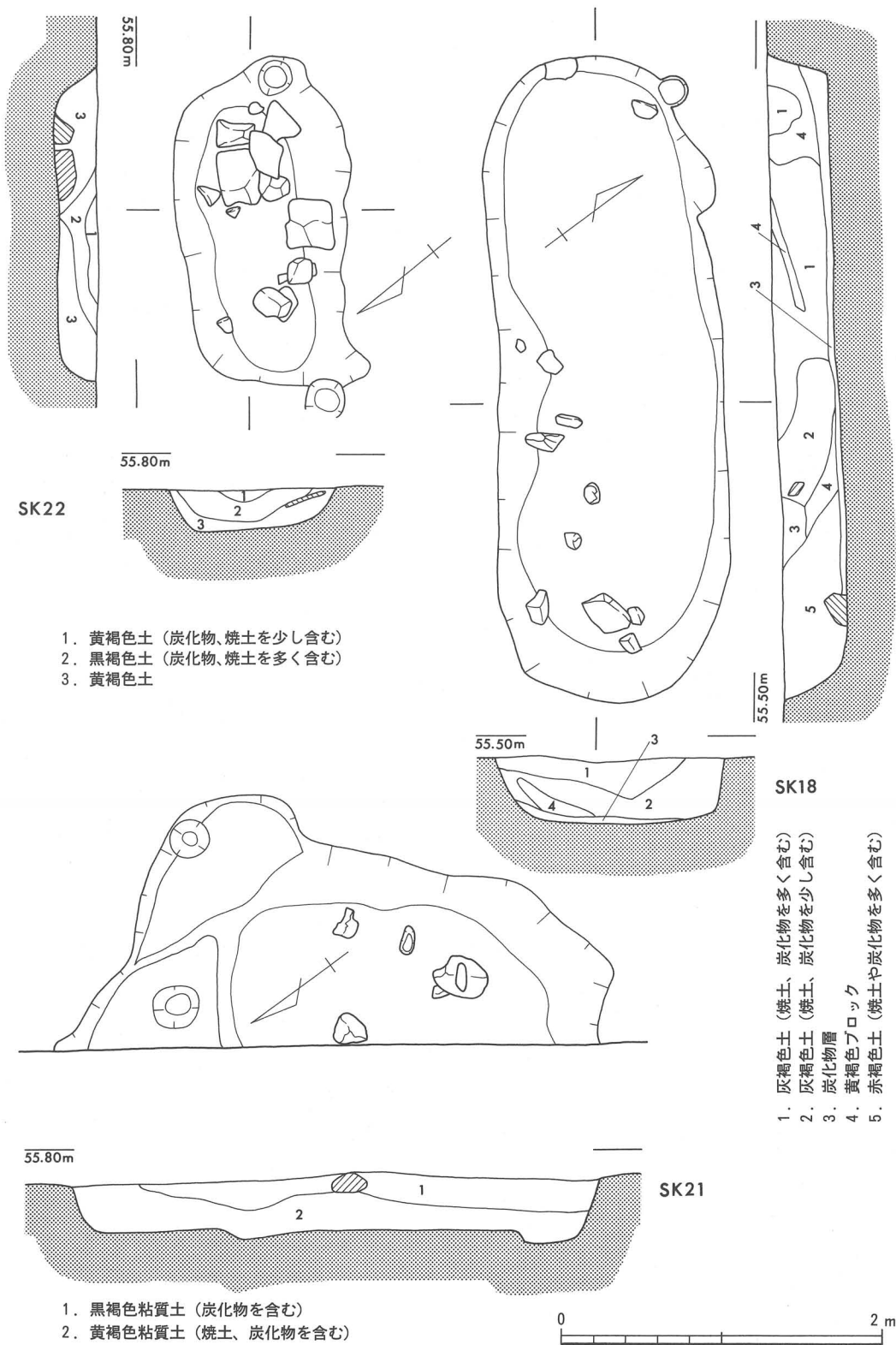


第17図 上久々茂土居跡土坑実測図





第18図 上久々茂土居跡土坑実測図



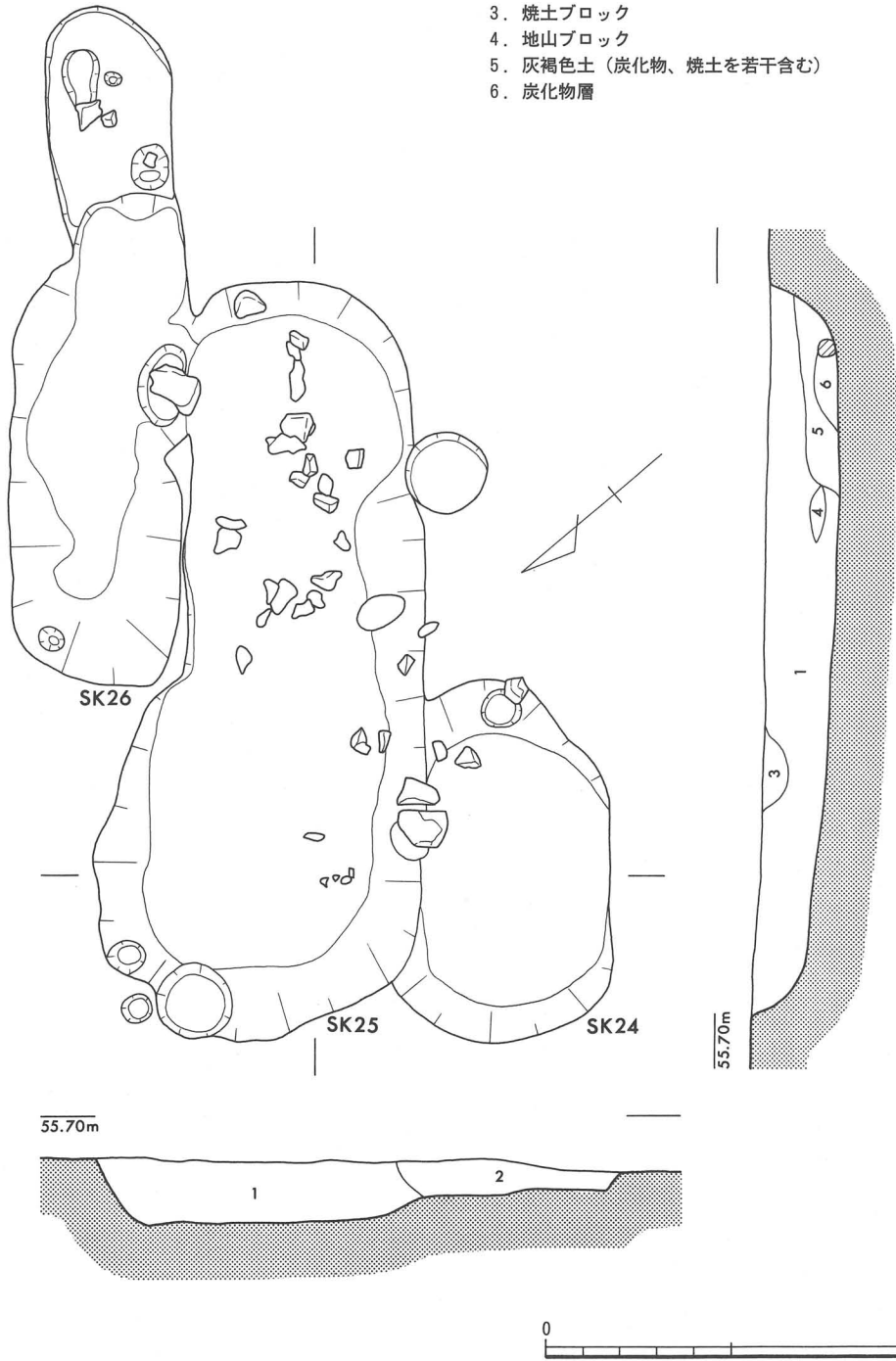
1. 黄褐色土 (炭化物、焼土を少し含む)
2. 黒褐色土 (炭化物、焼土を多く含む)
3. 黄褐色土

1. 灰褐色土 (焼土、炭化物を多く含む)
2. 灰褐色土 (焼土、炭化物を少し含む)
3. 炭化物層
4. 黄褐色ブロック
5. 赤褐色土 (焼土や炭化物を多く含む)

1. 黒褐色粘質土 (炭化物を含む)
2. 黄褐色粘質土 (焼土、炭化物を含む)

第19図 上久々茂土居跡土坑実測図

1. 黄褐色土（炭化物を若干含む）
2. 黒褐色土（多量の炭化物と少量の焼土を含む）
3. 焼土ブロック
4. 地山ブロック
5. 灰褐色土（炭化物、焼土を若干含む）
6. 炭化物層



第20図 上久々茂土居跡土坑実測図

西で0.7～0.9 m、南で1～1.2 m離れて存在する。ピット間は0.8 m～1.8 mとまちまちで、あまり規格性が見出せない。ピットから中国製の青磁が出土している。

なお、SB04の東側には小さい溝（SD06）があり、この方向が梁行とほぼ平行である。また、北側には、浅い凹みが東西にあり、桁行の方向と同じである。

### 土坑（第13～22図）

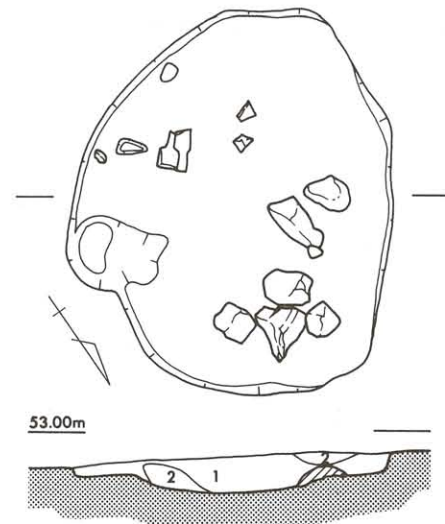
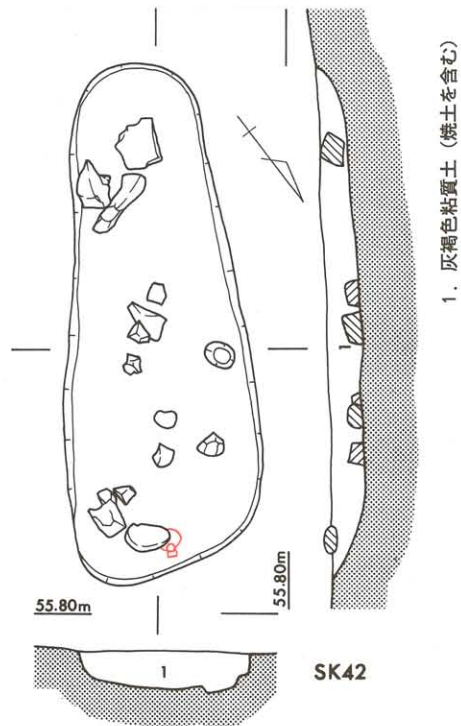
Ⅱ区からは総数47基の土坑を検出した。土坑内からは炭化物や焼土が出土する。遺物はあまり出土しないが、青磁などに火を受けているものもある。分布は中央を空白地として残し、これを避けるように存在し、全体に北側に東西に長い土坑が分布し、中央西側では南北に長い土坑がある。その中に円形の土坑が間を埋めるように位置する。

土坑の平面形は円形、楕円形のほか不整形なものもある。楕円形の土坑は比較的整った形態を呈し、規模は長径で2.8～4.26 m、短径0.75～1.55 mと幅広い。壁面は垂直に落ち、20～40 cmの高さがある。床面はほぼ水平である。これらの土坑には人頭大の石が落ち込んだ状態で検出された。性格については火事場の片付け用の穴や廃棄土坑、墓地と推測できる。

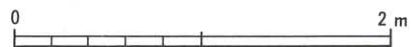
SK09、SK14、SK28、SK46などは、埋土内から焼土、鉄滓、破損した土器片などが出土し、廃棄土坑的な性格が窺える。

### SK42（第21図）

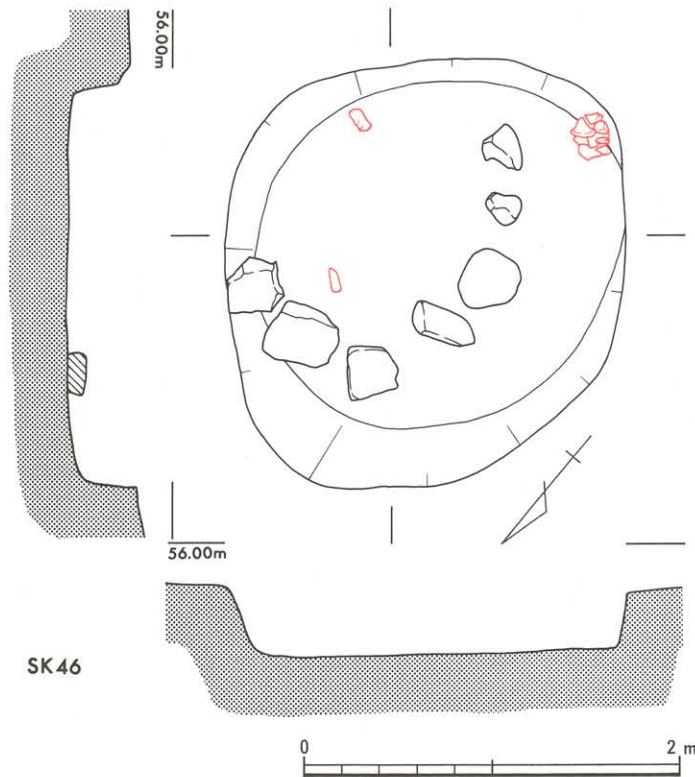
長さ2.7 m、幅は北側で1.1 m、南側で0.7 mを測る楕円形の比較的整った土坑である。



1. 灰褐色土（焼土、炭化物を含む） SK43  
2. 焼土ブロック



第21図 上久々茂土居跡土坑実測図  
(朱線は鉄軸天目)



第22図 上久々茂土居跡土坑実測図（朱線は播鉢）

壁面がほぼ垂直になり、床面は平坦である。土坑内には12～40cmの石が多く入っており、特に、大きく扁平な石が北側と南側に置かれていた。北側の石の下には入り込んだ状態で、完形に近い天目茶碗が出土した。この天目茶碗には骨のしみが付着していた。この天目茶碗は墓の副葬品として頭部に置かれたと推測される。埋土からは土師器が出土している。なお、同様な土坑を列記すれば、SK07、SK09、SK18、SK34、SK36、SK40、SK41である。

#### SK43（第21図）

SK42の東側1mに位置する不整形の土坑である。長径2m、短径1.6mを測る。壁面は垂直に落ち、床面はほぼ水平である。土坑内には20～30cmの石がかなり入っていた。

遺物としては刀子と古銭が各1個出土した。この土坑の性格は出土品や埋土から焼土が出土していないことから推測して墓の可能性もある。しかし、形態が不整形であるので廃棄用の土坑の可能性も残る。

#### SK48（第16図）

長径1.8m、短径1.6mを測り、SK43をやや小型にした円形の土坑である。壁面は垂直に落ち、床面は水平である。土坑の床面と壁面の境に近いところに10～25cmの石が置かれていた。

遺物として、天目茶碗、青磁、備前、釘などの破片が出土した。多くの種類の遺物が出土し、廃



棄用の土坑の可能性もある。しかし、SK42の例を参考にすると、天目茶碗をもつことから墓の可能性を含んでいると思われる。

以上、列記した墓からは人骨などは出土しなかった。しかし、包含層から釘が出土しており、木棺に納めて埋葬した墓が存在した可能性はある。

その他に、多く存在する土坑の性格は不明である。今回の調査で確認された土坑は規格性があり、山口県玉祖遺跡<sup>(2)</sup>など当時、埋葬には規格をもって墓穴を掘っていたと思われるので、規格性を重視すれば、いくつかの土坑は墓になると思われる。

### 石敷

石敷は調査区の北側で長さ10m、幅1.6mにわたり確認した。石敷は、約10～25cmの小石を固く地山上に敷いていた。その南側に石垣を長さ19mにわたり、2列確認した。地山を20cmほど掘り、そこに白色で、拳大から人頭大の大きさの石を使用し、北側に面がそろうように置かれていた。残りは悪く、石はかなり動いていた。また、部分的に崩落し、1～2段のみを検出した。なお、石列と石敷の間には浅い素掘りの溝が存在する。溝は床面U字形で、幅50cm、深さ15～20cmを測る。このことから南側の石垣は畑の土の流失を防ぐためのもので、石敷は石垣をもつ側溝を備えた道と推定できる。出土品は江戸時代末から明治時代にかけての陶磁器が出土している。

### ピット

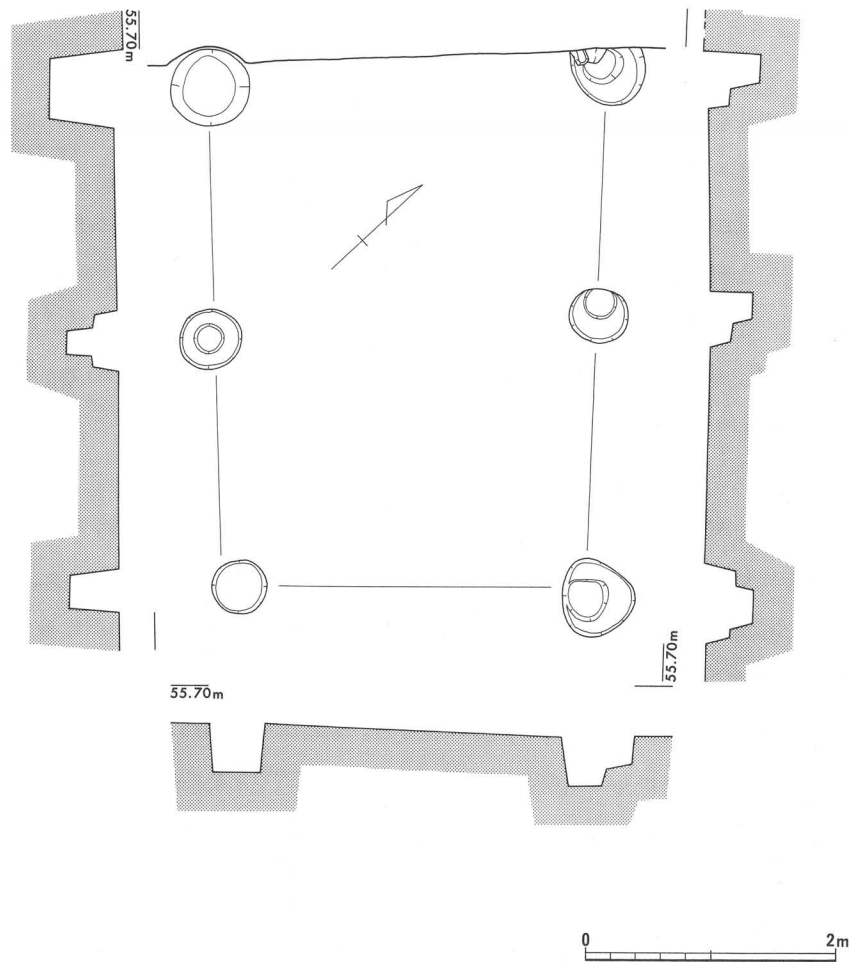
多数のピットを確認したが掘立柱建物に復元できたものは2棟のみであった。ピット内からほとんど遺物は出土していないが、まれに土師器や青磁の破片をもつものもある。さらに、これらのピットの数から考えるとより多くの建物などの遺構を想定できるが、土坑やピット同士の切り合いが多く、今回は復元することは困難であった。

### Ⅲ区(第24区)

段丘の中央部にあたり、前回の調査の第Ⅰ区・Ⅴ区の周辺に位置する。遺構の密度はⅡ区に比べ、極端に低くなる。遺構としては、土坑を調査区の南東側で密集した状態で4基、北側2基の計6基検出した。また、前者の付近で柵列1を確認した。さらに、南西側で、掘立柱建物を検出した。

なお、この建物の北側には前回の調査で遺構の集中したところがあり、7世紀の2間×3間の掘立柱建物跡が検出された。今回はこの地点は調査区外のため未発掘である。

土層堆積状況を見ると、耕作土のみで、地山の上に西側で20cmほど堆積していた。地山は東に向け徐々に下がっており、耕作土も東側では厚く60cmを測る。出土品としては耕作土から近世・近代の遺物に混じって、朝鮮王朝陶磁を2片発見した。



第23図 上久々茂土居跡SB05実測図

掘立柱建物

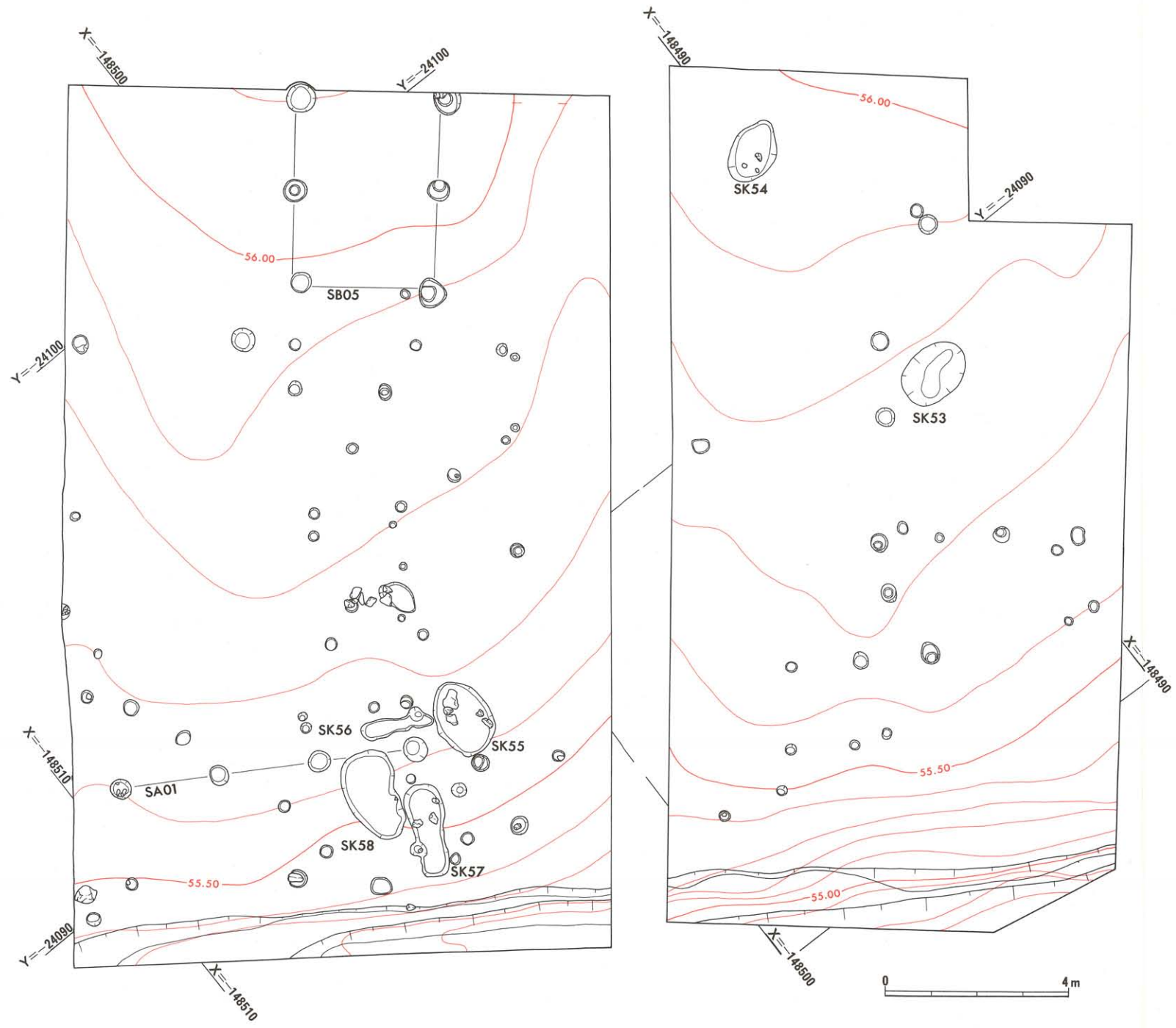
SB05 (第23図)

前回の調査でI区SB02に該当する。前回の調査を参考にすると、桁行3間6.0m、梁行1間3.2mを測る。方位は桁行でN-50°-Wである。ピット間は桁行2.0m、2.0m、2.0m、1.9m、2.2m、梁行2.8mを測り、ほぼ等間隔である。ピットの規模は上端で44~60cm、深さ40cmで深い。柱痕は残っていなかったが、セクション図や二段掘りの大きさから判断して、20cm前後と推定できる。なお、出土品としては前回の調査ではピット内から青磁片が出土している。時期は不明である。

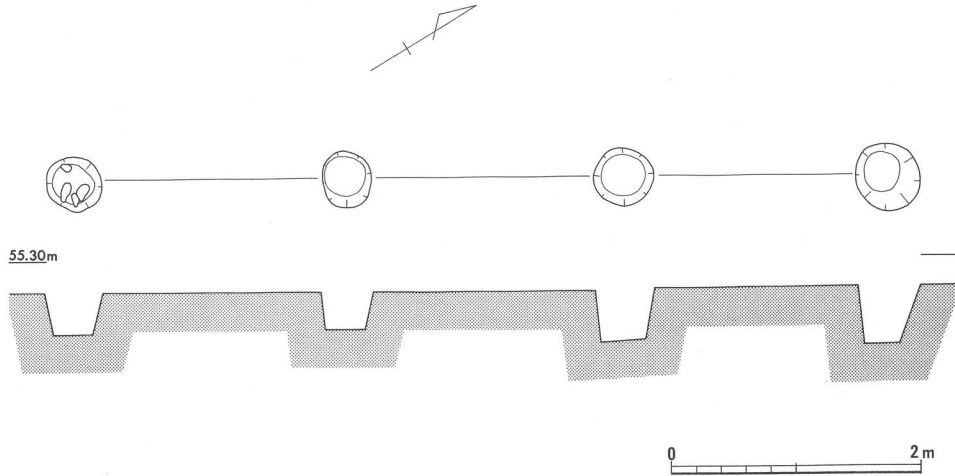
柵列

SA01 (第25図)

前回の調査でI区SB03に該当する。掘り方などから掘立柱建物を想定したが、左右に同規模のピット群は確認できず、3間6.6mの柵列とした。なお、周辺のピットと較べ大きさはかなり



第24図 上久々茂土居跡Ⅲ区遺構位置図



第25図 上久々茂土居跡SA01実測図

違う。ピットは上端で44～52cm、深さ40cmを測り、柵列としては大型である。ピット間は2.2mと均一で、方位はN-32°-Eである。この方向は加工段とほぼ平行である。SA01の柱穴から遺物が確認できなかったため、時期は不明である。

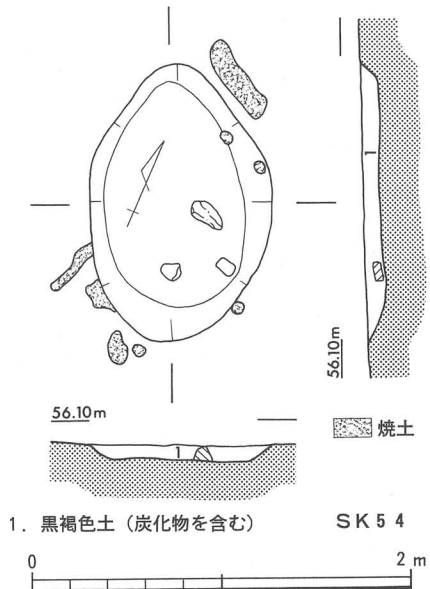
#### 土 坑

##### SK54 (第26図)

Ⅲ区北側に位置し、SK53の南西6.2mで検出した。土坑内には8cmの小石が3個あった。埋土は1層で、炭化物を含んでいる。Ⅱ区の土坑と違い、浅く、挿鉢状になっている。周辺は少し赤褐色に焼けているが、土自体は軟質であり、あまり高温ではなかったと思われる。出土品はない。なお、SK53、SK55～SK58は前回の調査で検出しており、詳細は既に発行している報告書にゆずる。

#### 加工段

Ⅱ区の南端付近から始まり、Ⅲ区まで続く。南側中央部までは二段に加工され、南方では一段である。一段目は高低差10cmで、平坦面の幅は56cmである。そこから再び掘り込まれ、北側では、50cmを測る。南側では徐々に浅くなり、10cmになる。Ⅳ区の状況は調査区外のため加工段の詳細は不明であるが、Ⅲ区の上端を延長していくと、現在の畑の区画とほぼ一致している。



1. 黒褐色土 (炭化物を含む) SK54

第26図 上久々茂土居跡土坑実測図

一方、東側は調査区外のため溝であるのか、また、削りだしているのかはわからない。現状を観察すると、調査区外は排水溝になったり、谷が入り込んだりしているので、地面が調査区より一段下がっている。このようなことから、溝ではなく、削っていると推測できる。

#### IV区 (第27図)

段丘の南端に位置し、調査区中央の畦は「赤道」である。この畦の南側には明治時代まで酒蔵があり、その後、畑に改良したとのことである。また、北側にはレンコン畑があり、地山が約1m以上深く掘られていた。近代の陶磁器が多く出土した。

土層堆積状況は厚さ20cmの耕作土を除去すると地山となり、そこから遺構が掘り込まれている。この区の地山には多くの河原石が入っており、II区、III区とは様子が異なっている。地山は中央の畦を最高点として北、南、東側に下がっていた。調査区の南側は高さ1.5mの石垣を築き、土の崩落を防いでいた。その石垣の下は、幅6mの平坦面を作り、畑にしている。さらに、その南は急な崖となっている。北側は耕作のためか遺構はほとんど残っておらず、土坑1と数穴のピットのみであった。中央には深さ5～10cmの溝状の遺構があったが、中には耕作土に似た土が入っており、耕作時にできたものと推測できる。南側では、石が詰め込まれた土坑を7基確認した。ピットは数穴あるが、建物を構成するような深いものはなく、播鉢状を呈し、深さ10～20cmのものが多し。耕作土から中国製青磁と青釉輪花形小皿が出土し、この遺物に伴う遺構も存在した可能性がある。しかし、今回は確認できなかった。

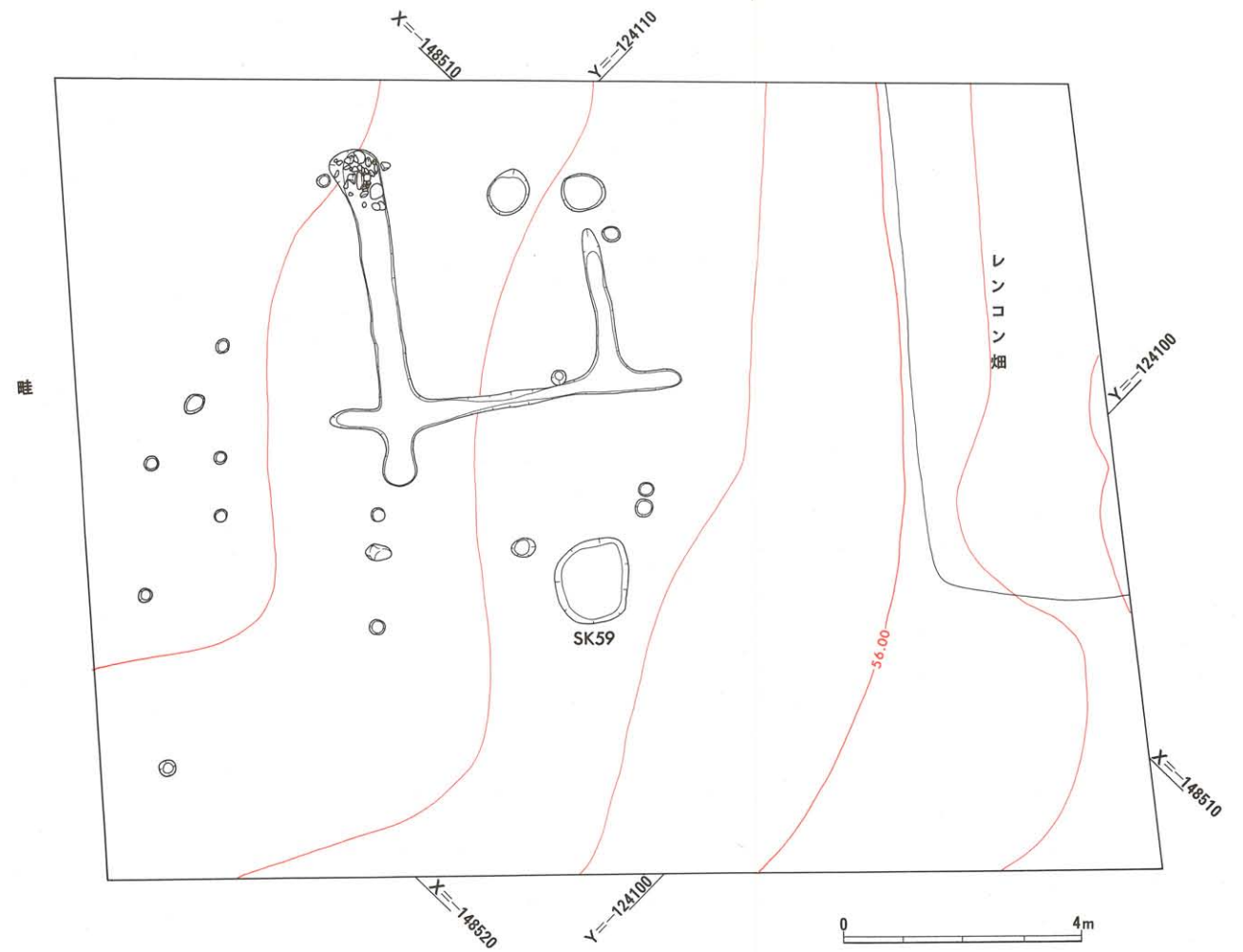
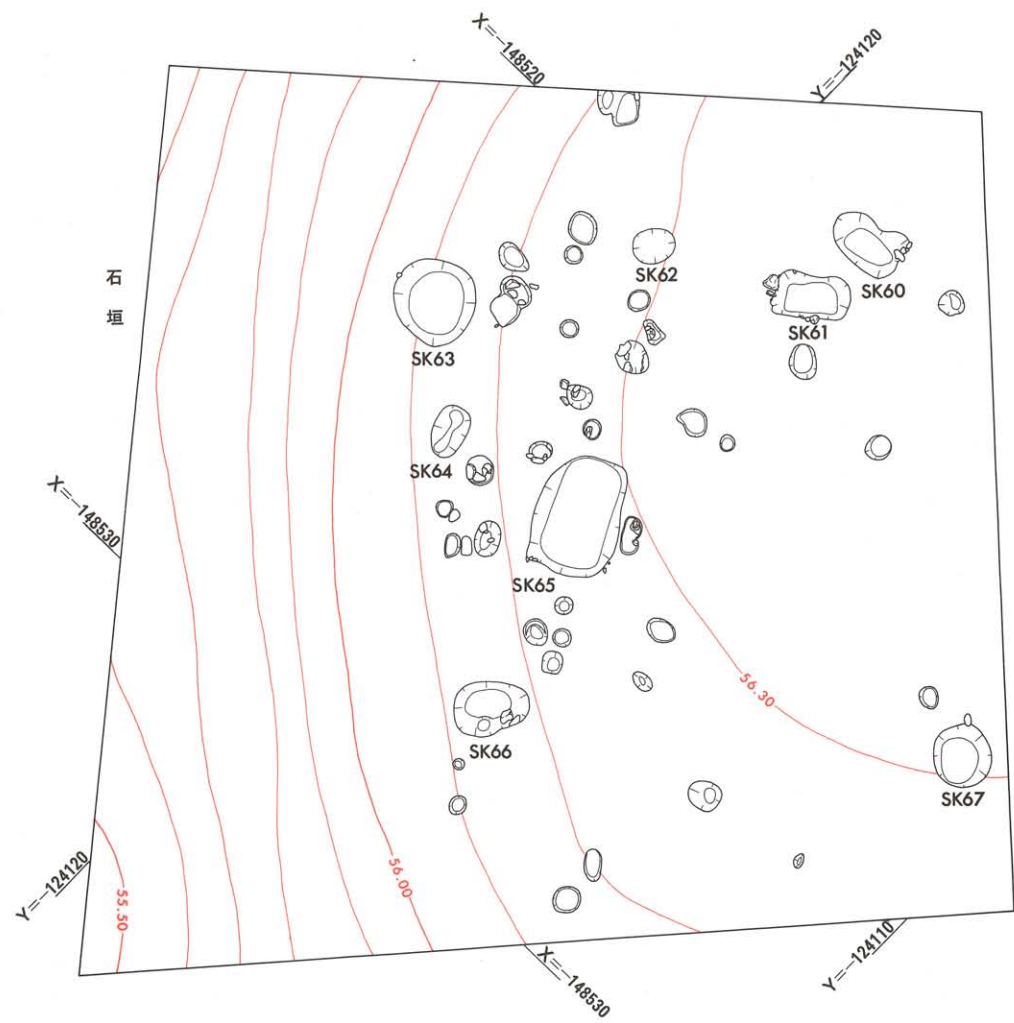
#### 土坑 (第28図)

##### SK59

調査区の北側に位置しており、長径1.56m、短径1.26mで、平面形は楕円形である。深さは15cm程しかなく、床面は播鉢状を呈す。堆積土は茶褐色土である。遺物は無く、少量の炭化物が出土した。時期は不明である。

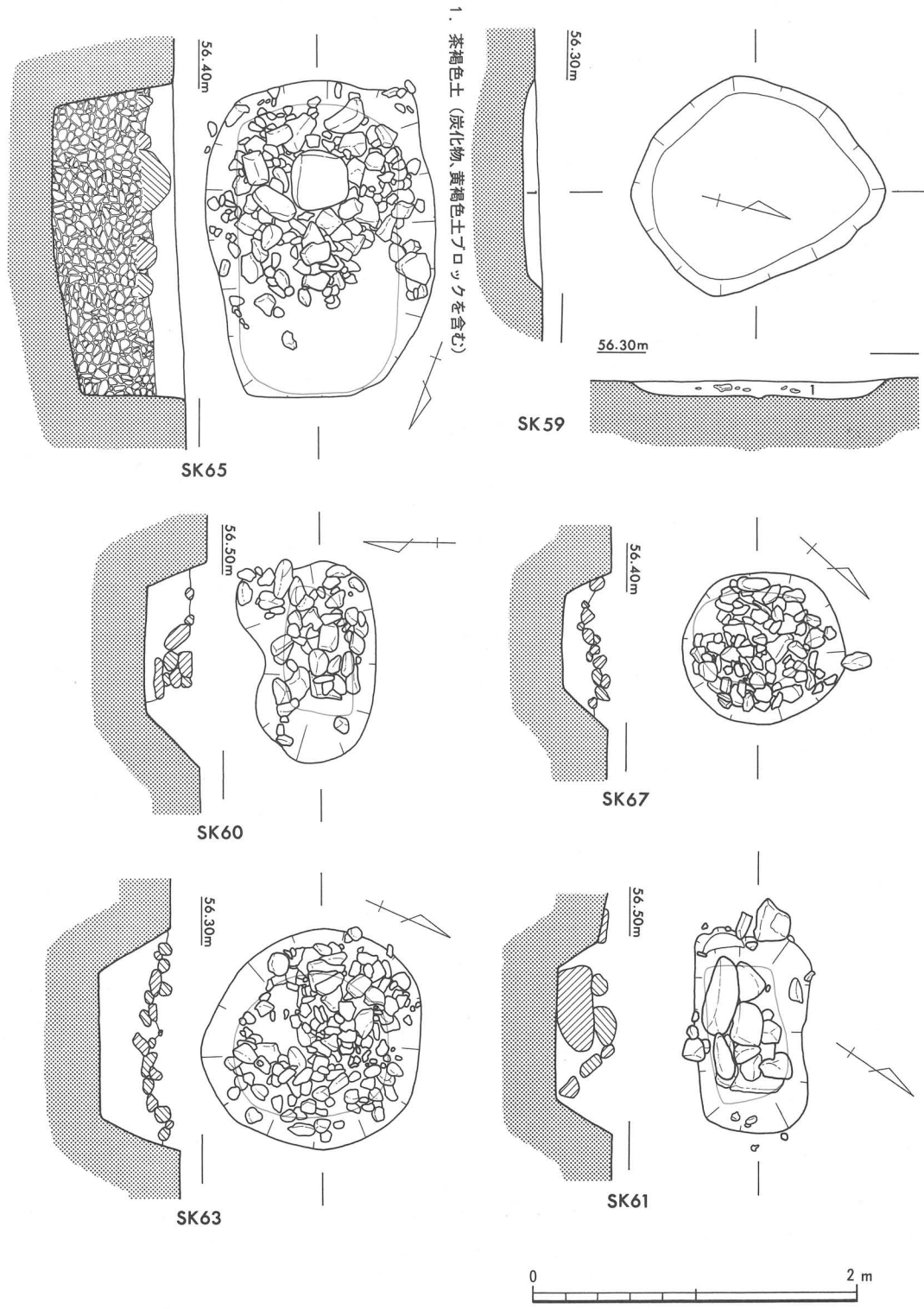
##### SK60～SK67

IV区の南側の平坦面に密集した状態で検出した。平面形はSK60、61、65、66は楕円形を呈し、他は円形である。長径1～1.92m、短径0.7～1.4m、深さ23～86cmで、大きさはまちまちである。SK60、61、66は規模、形態もよく似ている。SK65は前述の土坑に形態的には似ているが、規模は大型にしたもので、壁面はほぼ垂直で、床面は平らである。土坑には20～30cmの大型の河原石が詰め込まれたものや5～10cmのやや小型のものを入れたものもある。石は大きいものになると人頭大にもおよび、大人1人で運ぶのも苦勞する重量である。これらの土坑内からは江戸時代末から明治時代にかけての陶磁器(碗、播鉢、皿)などが出土している。



第27図 上久々茂土居跡IV区遺構位置図





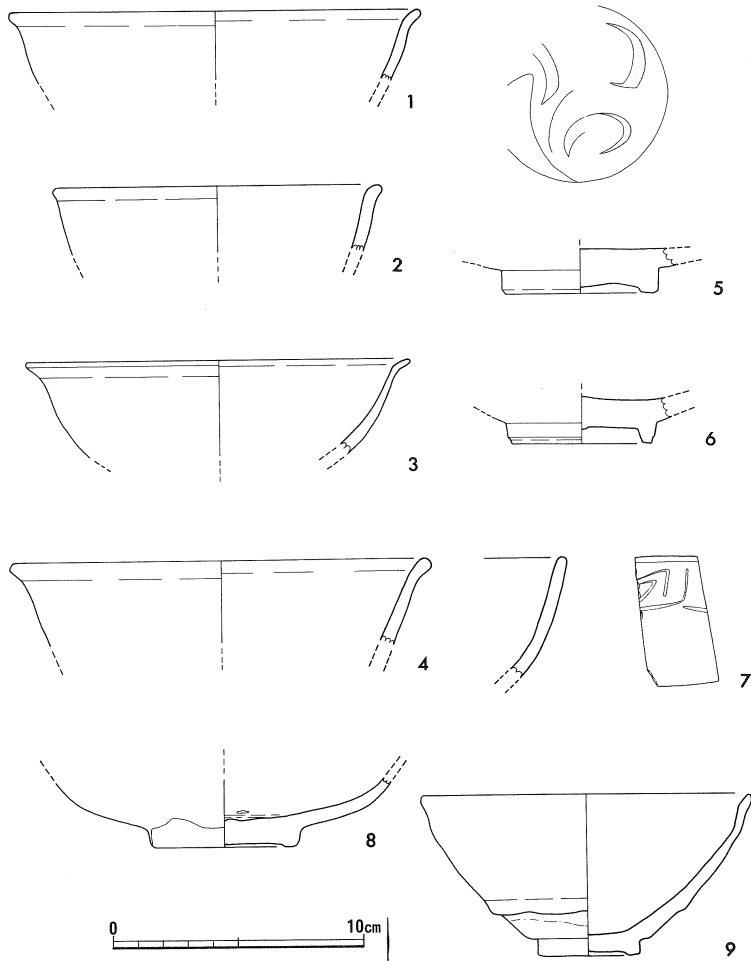
第28図 上久々茂土居跡土坑実測図

### 第3節 遺物

上久々茂土居跡からは古代から近世・近代までの多くの遺物が出土した。その大半が近世・近代のもので、集落が現在まで営まれていることから考えても当然の結果である。本報告では、古代・中世の遺物を中心に説明する。古代から中世の遺物には須恵器、土師器、貿易陶磁、瓦器、土錘、石器、鉄器、古銭、鉄滓がある。

#### 須恵器

須恵器はビニール袋に2個ぐらい出土し、すべて細片である。全域から発見されているが、特に、II区に集中している。器種としては、蓋坏蓋、蓋坏身、短頸壺、高坏が見られる。時期は大峠遺跡とはほぼ同じ奈良時代から平安時代初めに属する。



第29図 上久々茂土居跡出土陶磁器実測図 1: SK31 2: SK46 3: SK50 4: SK51 5: SK24  
6: P2 7: IV区耕作土 8: SK28 9: SK42

## 貿易陶磁

貿易陶磁としては、中国の青磁・白磁・青花、朝鮮王朝陶磁などが全域から出土し、特にⅡ区から多くの量が確認された。

### 青 磁（第29図、図版31）

上久々茂土居跡の青磁はⅠ～Ⅳ区から出土し、Ⅱ区から多くの量が検出された。器種としては碗、皿がある。しかし、すべて小片であり、全体を窺わせるものはなかった。また、火を受けたと思われる青磁も出土している。

(1)～(4)は、碗の口縁部の破片で、口径13.2～16.8cmである。体部は丸みを持ち、すべて口縁端部が外反する。内外面は無文である。胎土はやや灰色を呈し、釉は緑色や青緑色を呈する。(2)は、やや陶質な胎土である。(5)は、幅の広い高台を持ち、底径6.0cmを測る。見込には、草文がへうで削り出されている。釉は緑色で、高台内面にもかかる。(6)は、幅の狭い高台を持ち、底径5.6cmを測る。見込には、印文(草文か)が施されている。釉は水色で、高台内面にも一部かかる。(7)は、碗の口縁部の破片である。口縁外側には、かなりくずれた雷文帯がかすかに確認できる。胎土は密で、灰色を呈し、釉は厚く、緑色である。その他に、Ⅰ区耕作土から高台付き皿の口縁部の破片が出土している(図版31-2)。また、蓮弁のしっかりした青磁の胴部の破片が、Ⅱ区耕作土から出土している。蓮弁は切り込みが下まで及んでいない。釉は淡水色である(図版31-1)。

### 白 磁（第29図、図版31）

白磁は小片しか出土せず、底部のみ図化した。

(8)は、皿の底部の破片で、底径は5.8cmである。型作りで、高台は低く、見込には3箇所目跡がある。焼成は良好で、胎土はやや粗い。釉は内面および一部の高台にかかるのみで、やくすんでいる。

### 青 花（図版31）

量は少ないが、調査区内の全域から出土している。すべて小片で、全体の形は復元できない。(図版31-3)は、Ⅰ区SD03から出土の底部付近の破片で、碁笥底。外面に剣先文を描き、口縁部外面には波濤文や列点文の文様帯がある。

### 鉄 釉（第29図、図版31）

天目茶碗が2個体、瓶子の底部と胴部の破片がある。

(9)は口径13.2cm、底径は4.1cm、器高6.5cmを測る天目茶碗である。厚い鉄錆と銅錆の化粧掛けが二重に行われ、底部付近には釉が垂れ、黒色を呈する。高台は削り出しである。口縁部下がわずかにくびれる。(図版31-4)はSK48から出土の天目茶碗である。器形的には、

(9) とほぼ同じで、口縁部下がわずかにくびれる。釉の発色は、茶褐色になっている。2つとも胎土は密で、底部は露胎である。

(図版31-5、6) は、鉄釉瓶子の胴上部と底部と推定できる破片である。底径は8.4 cmを測る。釉の発色は、黒色で、全面に施されている。二次的に火を受けている。SD06出土。

#### 朝鮮王朝陶磁 (図版31)

Ⅲ区耕作土から2片出土した。(図版31-8) は、小片のため器形は不明だが、一部に象嵌が施されている。胎土は、黒色粒子を含みやや粗い。灰緑色を呈する。(図版31-7) は、高麗青磁の碗である。内面には、白嵌象で三重円圈と思われる線が描かれている。

#### 青釉輪花形小皿 (藍彩) (図版31-9)

Ⅳ区から1片出土した。小片のため法量は不明だが、釉は水色で、胎土はやや粗い。やや外反し、外面には浅い溝がある。

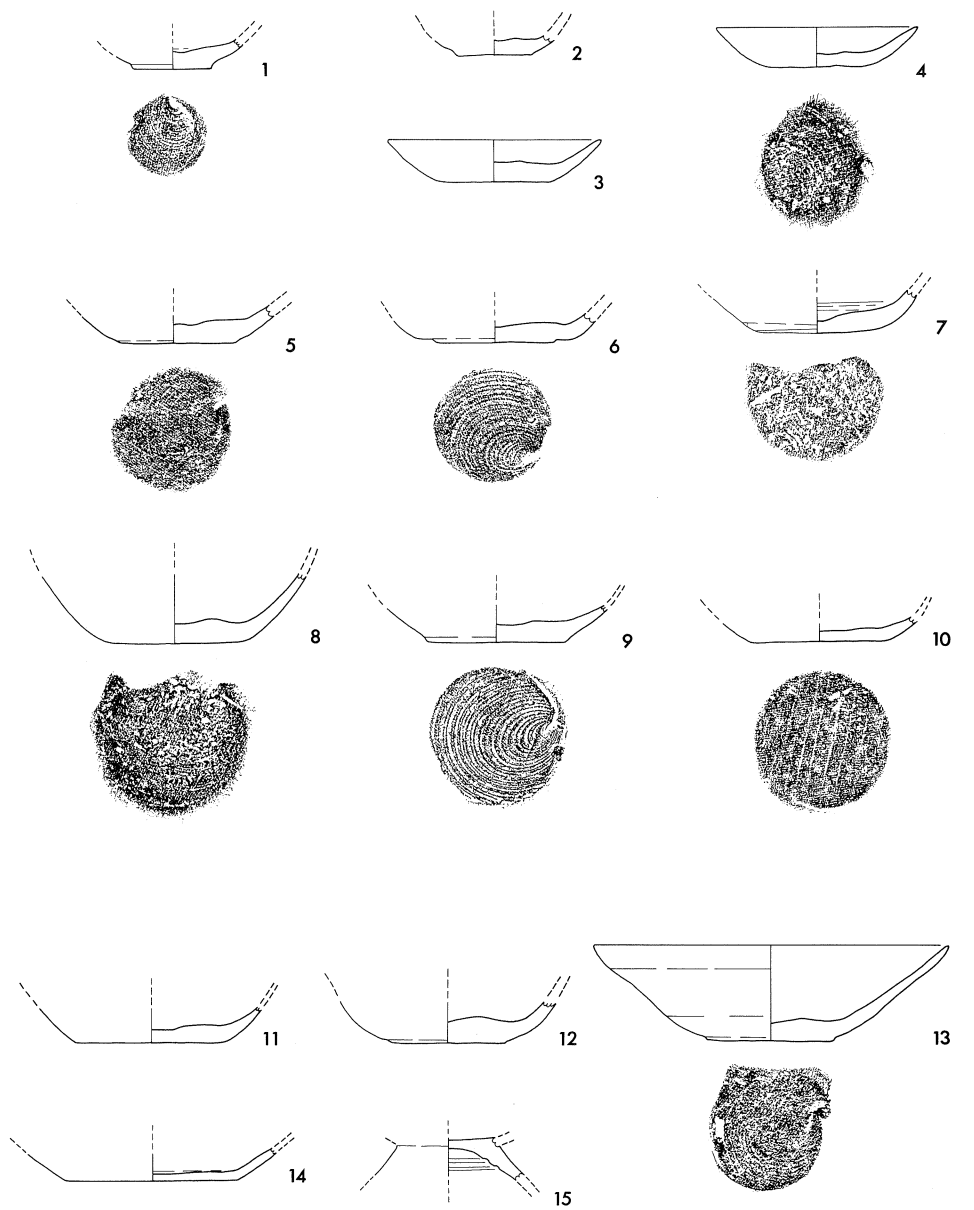
### 中世土器

国産のものとしては、備前と地元産の瓦器や土師器があり、器種としては、鍋や播鉢が大部分を占める。出土地点としては、青磁や白磁と同様、Ⅱ区を中心に発見されている。

#### 土 師 器 (第30図、図版32)

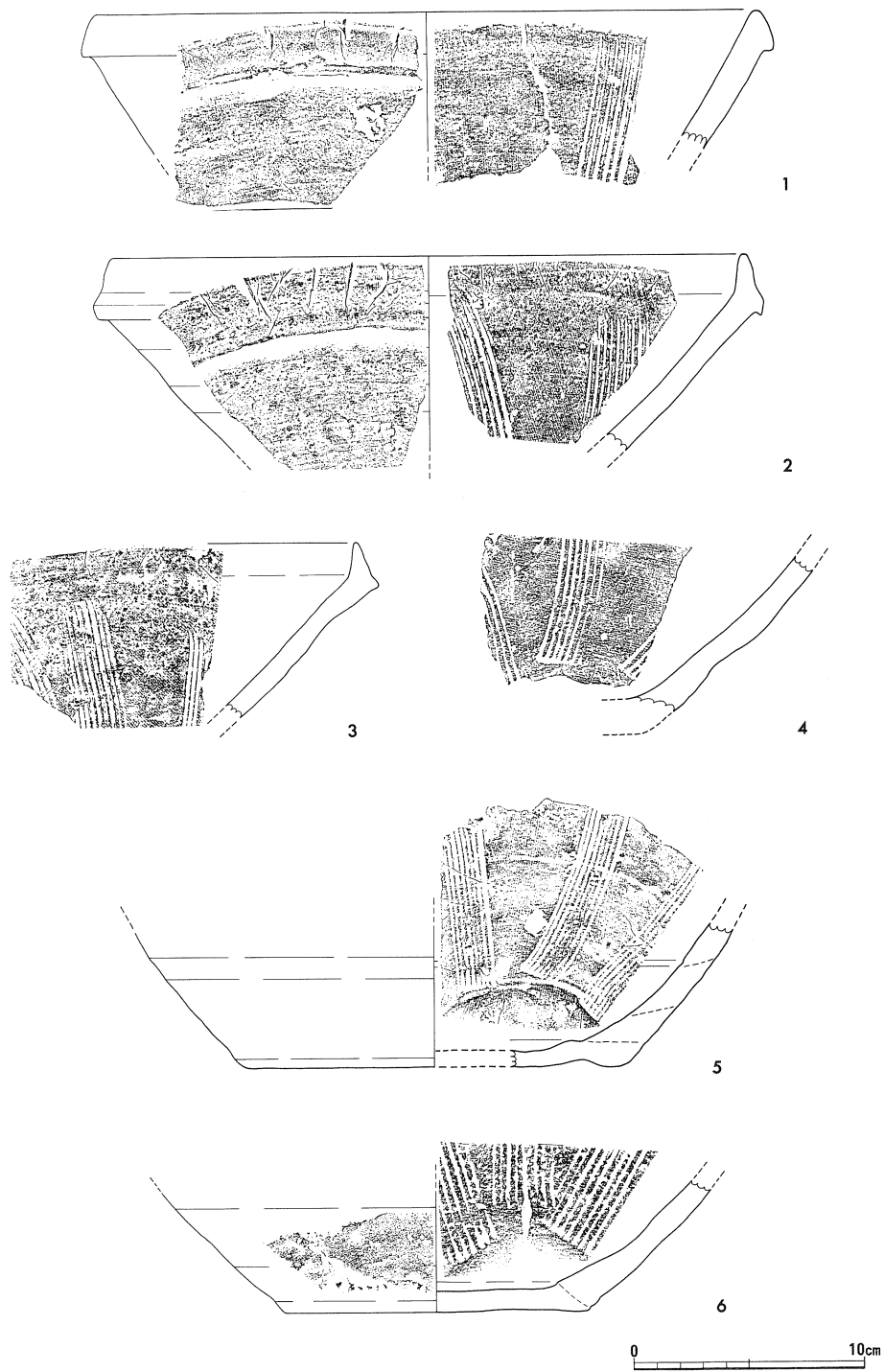
土師器はⅠ～Ⅲ区から出土し、須恵器と同様に、Ⅱ区に集中していた。これも小片が多く、また、風化が著しかった。高台をもつものは1片確認できたが、他はすべて高台をもたないものである。器種としては、皿、坏がある。胎土はすべて精良で、(4)、(6) は炭化物の付着が認められた。作りはロクロ整形で、底部は確認できるものはすべて糸切りである。

(1)、(2) は小型の皿で、底径は3.0 cmである。(3)、(4) は、口径8.2～8.6 cm、底径3.5～4.5 cm、器高1.6～1.7 cmを測る皿である。口縁部端部は丸い。(5)～(13) はやや深みのある坏である。底径は4.7～6.0 cmで、5.5 cmのものが多い。底部は、厚く、底部から緩やかにカーブを描いて体部に至るもの(7)、(8)、(10)、(11)、(12) と、底部が肉厚で、底部近くにアクセントをもち、体部が内湾気味に立ち上がるもの(5)、(6)、(9) とがある。器壁は厚く、底部内面中央部が凹んでいる。(10) は、糸切りの後、板で押さえており、幅0.5 cmほどの板目が残る。(14) は坏で、器壁はたいへん薄く、底部は平らで、体部も直接的に上外方に伸びる。色は灰白色で、他のものとは形態が異質である。底径7 cmを測る。(15) は高台の一部で、作りはしっかりしている。高台内部には、ロクロの回転の跡が溝状に残る。(13) は、口径14.4 cm、底径5.0 cm、器高3.8 cmを測る坏である。底部近くにはアクセントがあり、底部中央は凹んでいる。体部は直接的に口縁部にいたり、端部は鋭い。



- 1 : SK 5 0    2 : SK 1 2
- 3 : SK 3 9    4 : SK 1 9
- 5, 6, 7, 8 : Ⅲ区耕作土
- 9 : SK 0 5    10 : SK 3 2
- 11 : SK 4 3    12 : SK 3 2
- 13 : SK 1 8    14 : SK 3 6
- 15 : P 1

第30図 上久々茂土居跡出土土師器実測図



第31図 上久々茂土居跡出土備前擂鉢実測図

1, 5, 6 : II区SK35

2 : II区黒褐色土

3 : II区SK19

4 : II区SK34



### 備前 (第31図、図版33)

上久々茂土居跡からは、かなりの備前の播鉢が出土している。しかし、壺などの貯蔵具はほとんど見られない。

#### 播鉢

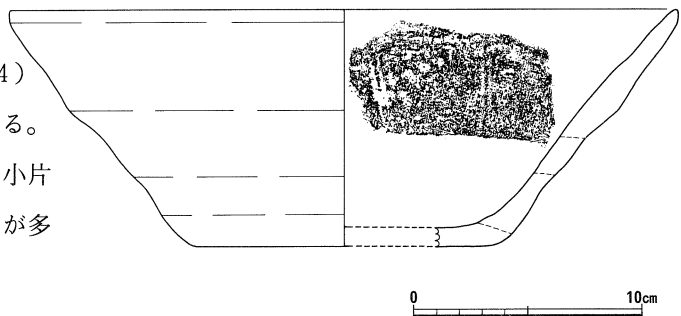
(1)は、口縁部から体部の破片。体部は逆ハの字状を呈し、口縁部は下方が多少垂れている。櫛目は6条。(2)、(3)も(1)と同様の形態であるが、口縁部は上方へ伸びる。櫛目は9条。(4)～(6)は、体部の下方から底部の破片。櫛目は7、8条で、底部から口縁部にかけて放射状に描く。(6)の体部外面下端には乾燥時についた圧痕が残る。

#### 壺

壺の胴部の小片が1点ある。

### 瓦器 (第32・33図、図版34)

瓦器はⅡ区を中心に出土している。器種としては、播鉢と鍋がある。小片のため、全体の器形は不明なものが多い。



#### 播鉢 (第32図)

体部は逆ハの字状に外側へ傾き、口縁部は単純で、丸くおさまる。体部外面は横方向に粗くなでられ、凹凸が明瞭に残り、内面には6条の櫛目が部分的に残る。なお、二次的に火を受けて軟質となり、桃色を呈す。

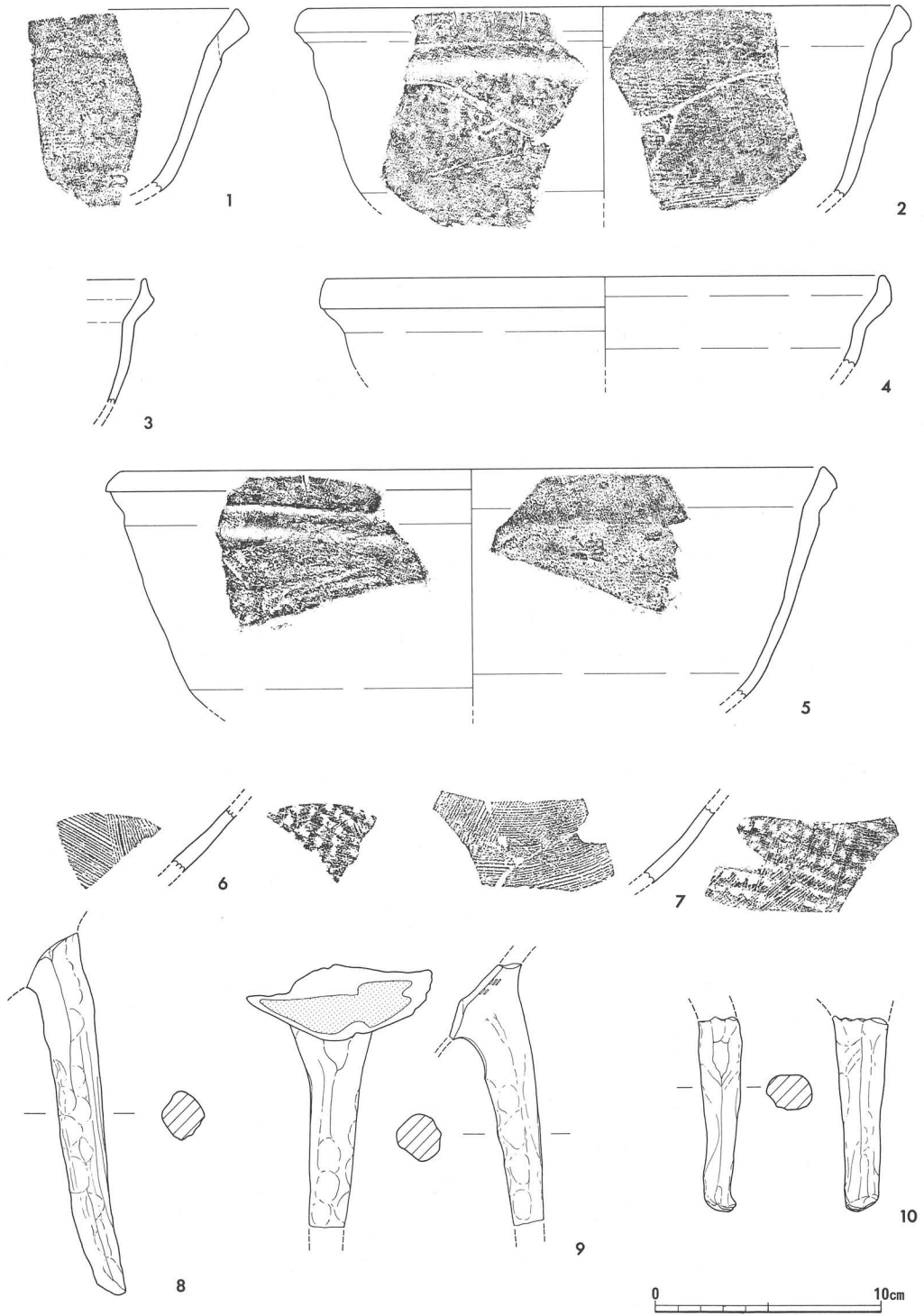
#### 鍋 (第33図、図版34)

瓦質の土鍋で、口縁部の形態や足(脚)より、防長系といわれるものである。(1)～(5)は口縁部から体部の、(6)、(7)は体部から底部の、(8)～(10)は脚の破片である。(1)の口縁部は短く、外に開く。端部はやや膨らむ。(2)～(5)の口縁部は上方へ伸び、口唇部はやや内湾する。(8)～(10)は鍋の脚。直線状を呈し、先端は外へ屈曲させている。表面は手づくねのため凹凸が残る。長さ15cm、断面の径2cm。

### 石器 (第34図、図版34)

上久々茂土居跡から少数であるが、石器が出土している。これらは土坑内の埋土から発見されている。(1)は遺構面上からの出土である。

(1)～(4)は、自然石の円礫をそのまま使用した磨石である。平端になった部分はよく磨かれ、(3)、(4)においては、全面に使用痕が残る。長さ10～11.3cm、幅7.8～9.6cm、厚

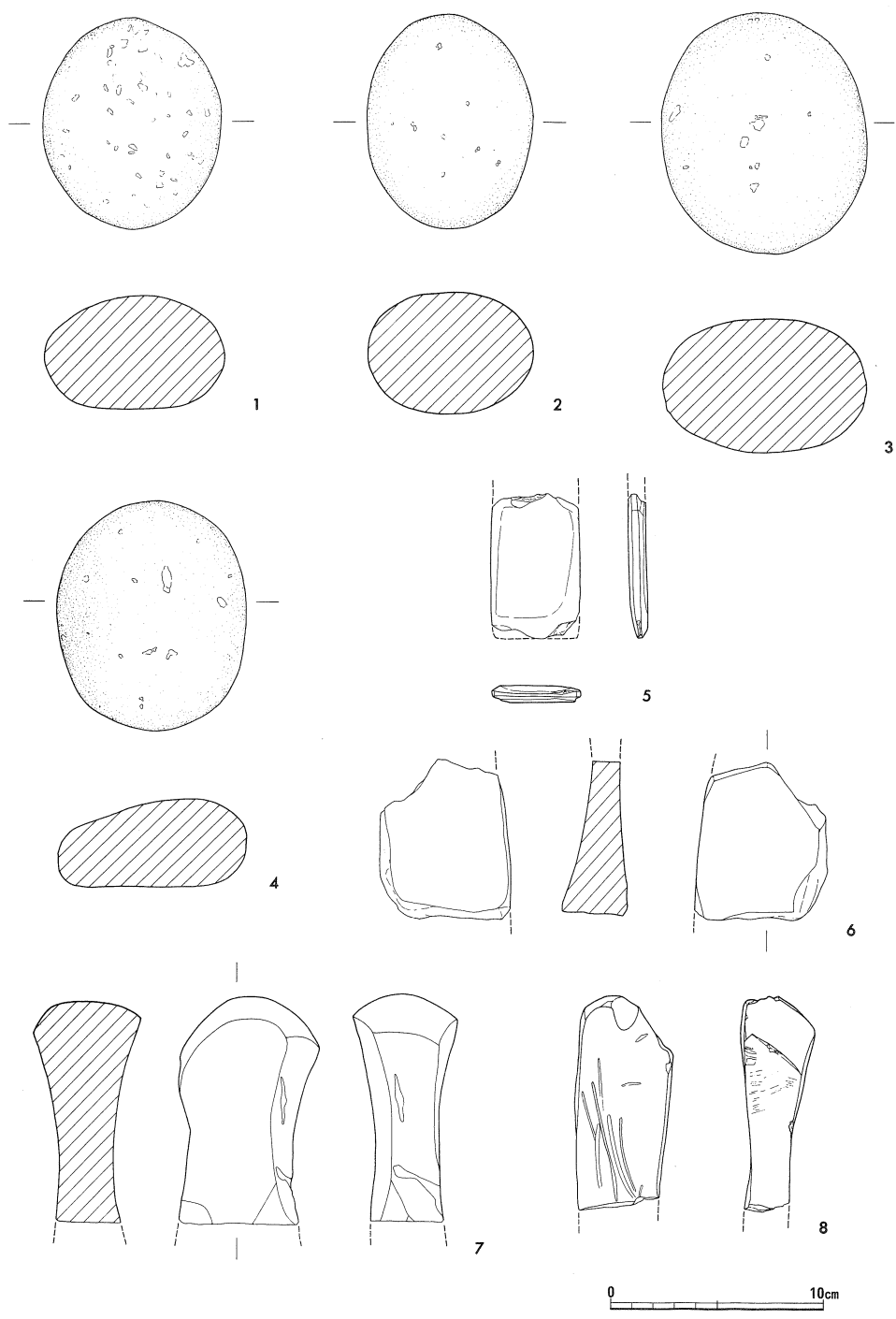


第33图 上久々茂土居跡出土瓦器实测图

1 : SK24 2 : SK28 3 : SK21 4 : P3  
 5 : II区黒褐色土 6 : III区耕作土 7 : SK25  
 8 : SK41 9 : SK39 10 : SK40

第1表 上久々茂土居跡出土土器観察表

器種	挿図番号	調査区	法量 (cm)	焼成・胎土・色調	調整	備考
陶器挿鉢	図31-1	II	口径 29.6 器高 底径	焼成：良好 胎土：砂粒を多く含む。 色調：内外とも赤茶色	内外面ともヨコナデ	備前 口縁部 放射状6条の櫛目
	-2	II	口径 27.6 器高 底径	焼成：良好 胎土：2～4mm大の砂粒を多く含む。 色調：内外とも茶褐色	内外面ともヨコナデ	備前 口縁部 9条の櫛目
	-3	II	口径 器高 底径	焼成：良好 胎土：1～3mm大の砂粒を多く含む。 色調：内外とも茶褐色	内外面ともヨコナデ	備前 片口部分 9条の櫛目
	-4	II	口径 器高 底径	焼成：良好 胎土：1mm大の砂粒を多く含む。 色調：内外とも淡緑灰色	外面：ヨコナデ 内面：使用痕のため調整不明。	備前 体部下端 7条の櫛目
	-5	II	口径 器高 底径 16.4	焼成：良好 胎土：1～3mm大の砂粒を多く含む。 色調：内外とも茶褐色	内外面ともヨコナデ 外面：底部凹凸著しい。	備前 体部下端～底部 8条の櫛目
	-6	II	口径 器高 底径 13.2	焼成：良好 胎土：1～2mm大の砂粒を多く含む。 色調：内外とも茶褐色	外面：底部静止ナデ、底部の端に乾燥時についた 圧痕残る。 内面：ヨコナデ	備前 8条の櫛目
瓦器挿鉢	32-1	II	口径 25.4 器高 10.4 底径 13.4	焼成：不良、火にあい軟質化。 胎土：砂粒を多く含む。 色調：内面底部は黒褐色、他は淡桃色。	全面風化のため調整不明	地元産（防長系） 放射状の櫛目がかす かに確認できる。
鍋	33-1	II	口径 器高 底径	焼成：不良 胎土：密 色調：内外面とも黄褐色	内外面とも口縁部ヨコナデ 内面：体部横方向のハケ目	地元産（防長系） 口縁部
	-2	II	口径 25.0 器高 底径	焼成：不良 胎土：密 色調：内外面とも黄褐色	内面：横方向の荒いハケ目	地元産（防長系） 口縁部～体部
	-3	II	口径 器高 底径	焼成：良好 胎土：密 色調：内外面とも灰色	内外面とも口縁部ヨコナデ 外面：体部荒いナデ 内面：体部ヨコナデ	地元産（防長系） 口縁部
	-4	II	口径 14.6 器高 底径	焼成：不良 胎土：1～2mm大の砂粒を少し含む。 色調：内外とも灰褐色	内外面とも口縁部ヨコナデ 内面：横方向のハケ目	地元産（防長系） 口縁部
	-5	II	口径 31.0 器高 底径	焼成：不良 胎土：密 色調：内外面とも黄褐色	内外面とも口縁部ヨコナデ 外面：体部縦方向のハケ目 内面：体部横方向のハケ目	地元産（防長系） 口縁部～体部
	-6	II	口径 器高 底径	焼成：良好 胎土：密 色調：内外面とも灰褐色	外面：タタキ 内面：ハケ目	地元産（防長系） 底部
	-7	II	口径 器高 底径	焼成：良好 胎土：密 色調：内外面とも灰褐色	外面：タタキ 内面：ハケ目	地元産（防長系） 底部
	-8	II	足の長さ 15.0 径 2.0	焼成：良好 胎土：密 色調：内外面とも灰色	表面に手のにぎり痕残る。	地元産（防長系） 足
	-9	II	径 2.0	焼成：良好 胎土：密 色調：内外面とも灰色	表面に手のにぎり痕残る。	地元産（防長系） 足
	-10	II	径 2.0	焼成：良好 胎土：密 色調：内外面とも灰色	表面に手のにぎり痕残る。	地元産（防長系） 足



第34図 上久々茂土居跡出土石器実測図 1: 地山直上 2, 3: SK31 4: SK28  
5: P5 6: IV区耕作土 7: P4 8: SK50

さ4～6.3cm、重量0.62～1.0kgを測る。(5)は破損した磨製石斧で、1片のみ出土した。三方向の局部が丁寧に研磨され、刃部を作り出している。長さ6.8cm、幅4.2cm、厚さ0.8cmを測る。(6)～(8)は短冊状の砥石で、幅4.5～6.2cm、長さ7.5～10.7cmを測る。(6)は三面が使用され、内の二面は激しく擦り減っている。(7)も三面が使用され、幅0.3cm、深さ0.3cm程度の溝が三ヶ所確認できる。(8)は四面が使用され、幅0.2cm、深さ0.4cm程度の溝が六ヶ所確認できる。他の面にも擦痕が認められる。石材は(1)～(4)が石英斑岩、(5)が泥岩、(6)、(7)が砂岩、(8)が流紋岩である。

### 土 錘 (第35図)

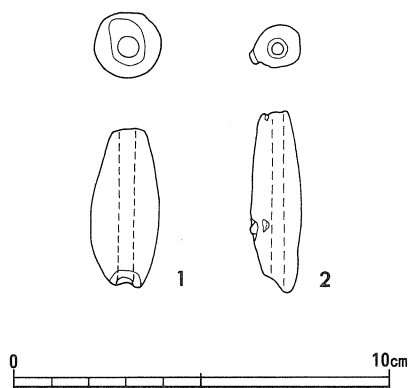
出土総数3個で、内2個を図化した。残存状態は比較的良好である。成形はすべて手づくね、作りは雑である。色調は橙色を呈し、胎土中には砂粒を多く含む。長さ4.1～4.8cm、最大幅1.3～1.8cmを測る。形態はやや膨らみをもち、管状を呈し、多少中央部の張りに大小はあるが、基本的に同じである。重量は4.8～10.3gであるが、欠損しているため正確な重さは不明である。

### 古 銭 (第36図、図版42)

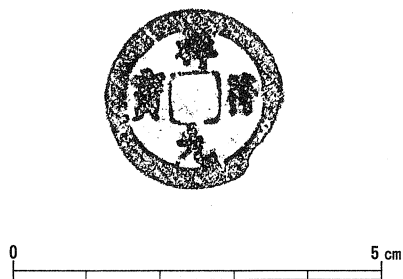
3点が耕作土から出土している。破損しているが、2点は寛永通宝と読める。もう1点は、北宋時代(1008年)に初鑄された渡来銭の祥符元寶である。直径2.5cm。

### 鉄 器 (第37図、図版42)

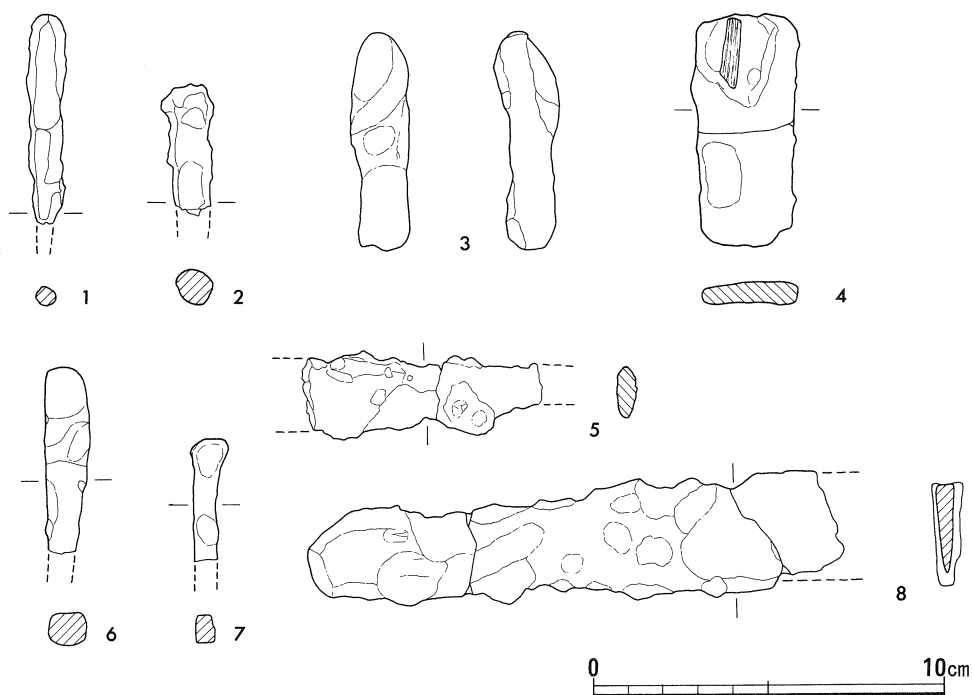
(1)、(2)、(3)、(6)、(7)は角釘である。(5)は刀子の類と思われる。全面錆が著しく、詳細は不明である。(8)は刀で、断面は二等辺三角形を呈し、中央部で幅2.9cm、厚さ0.7cmを測る。(4)は、長さ6.6cm、幅2.8cm、厚さ0.6cmの長方形を呈するが、用途は不明である。



第35図 上久々茂土居跡出土土錘実測図  
1: SK51 2: SK24



第36図 上久々茂土居跡出土古銭拓影



第37図 上久々茂土居跡出土金属器実測図 1, 2, 5 : SK34 3 : SK25 4 : SK46  
6, 7 : SK48 8 : SK43

#### 第4節 小 結

1990・92年の範囲確認調査と本年度の本調査の結果、大型のものを含む掘立柱建物や多くの土坑を検出することができた。さらに、多数の須恵器、土師器、貿易陶磁、瓦器、陶器などの古代・中世の遺物が出土した。大型の掘立柱建物や多くの貿易陶磁などの出土から、一般農民の屋敷とは考えにくく、当時、この地域の支配層の屋敷跡と考えられる。

今回の調査は道路予定地内の限られた範囲であるが、石見西部における中世の支配者層の屋敷跡の様相を知ることができた。

#### 遺物について

中世の遺物としては、中国製の青磁・白磁の他、鉄釉（天目茶碗や瓶子）・青釉（輪花形小皿）、朝鮮王朝陶磁があり、国産の土師器・備前・瓦器も出土した。

遺物から時期を推定すると、次のようになる。

青磁については第29図(1)～(4)は15世紀代のものであろう。(5)は13世紀後半、(7)は14世紀後半から15世紀前半のものであろう。青磁は14世紀から16世紀で、15世紀を中心とする碗が多い。天目茶碗は二個とも中国製で13世紀のものと考えられ、高麗青磁とともに他のものと極端に時期が異なり、伝世品と思われる。青釉輪花形小皿が1片のみ出土しており、



16世紀の時期が当てられる。青花としては皿がある。碁笥底で、外面に剣先文が施され、時期は15世紀末から16世紀前半である。

(4)  
土師器皿の第30図(14)は山口県の大内氏館の編年を参考にすると、15世紀後半以降のものである。

(5)  
備前の播鉢は多くが間壁編年のIV期に属する。ただ、第31図(1)はやや古いと思われる。また、瓦器は「防長系」に属するが、口縁部の形態や焼成が異なり、在地のものである。器種としては足鍋と播鉢があり、当地では瓦器の編年がなされておらず、不明な点が多い。これらは「防長系」瓦器の影響を多分に受けたと考えられるので、山口を中心とした編年(6)に当てはめると、実年代は14世紀半ばから15世紀後半で、15世紀後半が最も多い。しかし、16世紀に下がるものも存在する。(7)鉄滓は、理化学分析を行い(和鋼博物館・佐藤豊氏)鍛冶滓という結果を得た。

## 遺構について

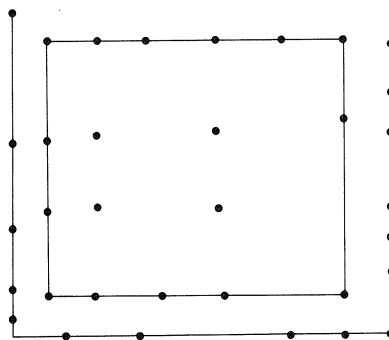
遺構としては掘立柱建物、柵列、土坑、溝、加工段などを確認した。まず、遺構個別の性格付けを行う。

### 1、土坑

Ⅱ区からは多くの土坑を検出した。土坑は調査区に対し、平行あるいは直角に位置するものが多く、何らかの規格が認められる。この内部には石や破損した遺物が投げ込まれ、また、多くの炭化物や焼土が出土した。このような土坑は、根固め石を入れたピットとも考えられるが、配置や出土品の状況から山口市大内氏館跡や鳥取市鳥取城跡などを参考にすると、ゴミ処理用の穴、あるいは(8)火事場整理のための穴と考えられる。しかし、SK42・SK48のような墓もあったと思われる。土坑の時期は、内部から出土する遺物としては土師器が多く、時期を決め難い。青磁などからおおよその時期が判明するものがある。SK11、18、19、25、28、29、34、39、41、46、48は14世紀後半から16世紀前半で、15世紀を中心とした時期であろう。

### 2、掘立柱建物・柵列

調査区内で5棟を確認した。1間×2間が1棟、1間×2間以上が2棟、1間×3間が1棟、3間×5間が1棟である。SB01、SB02、SB03は出土品がなく、時期は不明である。SB04、SB05からは青磁などが出土し、15世紀の建物である。しかし、SB02は溝(SD03)と、また、SB03はSB05や土坑などと方向性がほぼ



第38図 上々々茂土居跡SB04模式図

第2表 上久々茂土居跡土坑一覽表

土坑番号	区	平面形	規模 (cm)			出土遺物	主軸方位	備考
			長軸	短軸	深さ			
SK01	I	円形	90	90	24			
SK02		方形	90	50	32		N-34, 5-W	
SK03		不整形	150	110	22	近世陶磁器	N-54, 5-W	Ⅷ区SK01
SK04		不整形	82	60	10		N-51, 5-E	
SK05	II	楕円形	330	108	44	土師器 青磁	N-56, 5-W	
SK06		楕円形	312	160	7	備前(播鉢) 鉄滓	N-54, 7-W	
SK07		楕円形	270	120	32		N-57, 0-W N-30, 0-E	
SK08		円形	120	104	28	土師器 備前(播鉢) 鉄滓		
SK09		円形	426	103	48	土師器 備前(播鉢)	N-50, 8-W	15世紀前半
SK10		円形	110	72	29			
SK11		方形	149	125	33	土師器 須恵器 青磁	N-54, 5-E	14世紀後半～ 15世紀前半
SK12		不整形	142	65	34	土師器 土錘	N-42, 0-E	
SK13		楕円形	155	75	13	土師器 鉄滓	N-44, 2-W	
SK14		円形	160	155	23		N-38, 0-E	
SK15		方形	200	120	26		N-39, 5-E	
SK16		円形	96	70	142			
SK17		不整形	212	179	30	土師器	N-33, 5-E	
SK18		楕円形	398	140	52	土師器 青磁 石器	N-58, 9-W	14世紀後半～ 15世紀前半
SK19		不整形	360	180	44	土師器 備前(播鉢)	N-38, 0-E	14世紀後半
SK20		不整形	220	140	28		N-55, 3-W	
SK21		不整形	340	120	39	土師器 瓦器	N-36, 5-E	
SK22		楕円形	195	104	34	土師器	N-59, 4-W	
SK23		楕円形	152	80	30		N-31, 0-E	
SK24		楕円形	198	120	19	青磁 瓦器 土錘	N-51, 9-W	
SK25	楕円形	410	150	45	土師器 青磁 金属器(釘) 瓦器	N-49, 6-W	14世紀後半～ 15世紀前半	
SK26	楕円形	366	86	23		N-51, 4-W		
SK27	不整形	118	90	18		N-37, 0-E		
SK28	不整形	340	252	29	土師器 青磁 白磁 瓦器 石器	N-66, 5-W	14世紀後半	
SK29	楕円形	312	100	20	土師器 青磁	N-61, 0-W	14世紀後半～ 15世紀前半	
SK30	楕円形	140	75	39	土師器	N-46, 4-W		
SK31	楕円形	292	100	24	土師器 須恵器 青磁 石器	N-39, 0-E		
SK32	円形	115	87	7	土師器			
SK33	楕円形	386	104	37		N-37, 4-E		

SK 3 4	楕円形	280	100	41	土師器 青磁 金属器 (刀子、釘) 備前 (播鉢) 鉄滓	N-38.8-E	14世紀後半～ 15世紀前半
SK 3 5	不整形	456	130	24		N-36.0-E	
SK 3 6	楕円形	203	110	22	土師器	N-38.6-E	
SK 3 7	方 形	134	93	11		N-1.0-E	
SK 3 8	円 形	180	140	70			
SK 3 9	楕円形	436	160	3	土師器 青磁 瓦器 鉄滓	N-38.0-E	14世紀後半～ 15世紀前半
SK 4 0	楕円形	342	140	24	土師器 瓦器	N-36.6-E	
SK 4 1	楕円形	196	77	42	土師器 瓦器 鉄滓	N-26.7-E	14世紀後半
SK 4 2	楕円形	266	106	23	土師器 天目	N-34.4-E	
SK 4 3	不整形	204	164	23	土師器 金属器 (刀子) 古銭	N-34.0-E	
SK 4 4	不整形	157	123	30	土師器 青磁 須恵器 土錘	N-51.0-W	
SK 4 5	円 形	150	146	13			
SK 4 6	円 形	230	220	39	土師器 青磁 備前 (播鉢) 金属器 (刀子) 瓶子 鉄滓		14世紀後半～ 15世紀前半
SK 4 7	円 形	128	112	19			
SK 4 8	円 形	180	158	32	土師器 青磁 金属器 (釘) 天目 備前 (播鉢)		14世紀後半～ 15世紀前半
SK 4 9	不整形	146	66	16	土師器 青磁 金属器 (釘) 石器 鉄滓	N-6.5-E	
SK 5 0	不整形	240	160	32	土師器 須恵器 青磁 石器 土錘	N-33.5-E	
SK 5 1	不整形	210	110	26	青磁 土錘	N-51.0-E	
SK 5 2	不整形	180	114	35		N-47.5-W	
SK 5 3	不整形	200	160	50	青磁		V区SK 0 1
SK 5 4	楕円形	146	97	11			
SK 5 5	楕円形	170	120	18	近世陶磁器		I区SK 0 2
SK 5 6	不整形	160	25	12			I区SD 0 1
SK 5 7	不整形	205	65	21			I区SK 0 3
SK 5 8	不整形	200	116	21			I区SK 0 4
SK 5 9	円 形	156	126	15			
SK 6 0	楕円形	120	70	41	近世・近代陶磁器		
SK 6 1	楕円形	120	66	35	近世・近代陶磁器		
SK 6 2	円 形	68	56	60			
SK 6 3	円 形	134	132	51	近世・近代陶磁器		
SK 6 4	楕円形	83	50	23			
SK 6 5	楕円形	192	140	86	近世・近代陶磁器		
SK 6 6	楕円形	120	80	26			
SK 6 7	円 形	190	187	31	近世・近代陶磁器		

同じであることから、これらと同時期の可能性がある。SA01も加工段の方位とほぼ同じであることから同時期と推測される。SB04は目隠し塀あるいは縁側と思われるものをもつ掘立柱建物で、規模も大きい。また、周囲より少し高く、東側には雨落ち溝とも考えられるSD06もあり、調査区内で発見されたものでは中心的な建物で、このような大型の建物は屋敷跡と推測できる。<sup>(9)</sup>この建物は、切り合いからSK34、44が掘られる前に存在した。

### 3、地割

I区SD03からは青花が出土し、II区の加工段からは小片の青磁が出土している。これらは15世紀から16世紀前半の時期である。これら溝や加工段が同一時期に存在した確証はないが、ほぼ中世の遺構として間違いはない。これらの溝や加工段の性格は、遺構の密集度が溝内の方が高いことから、区画のためのものと推測される。

II・III区の加工段と西側の赤道の距離は約40m、一方、西側の山際にある平坦面の端までは50mを測る。山際の平坦面は赤道から一段高くなっており、そこに「土井殿の墓」が存在している。<sup>(10)</sup>この平坦面が当時のものかは不明であるが、かなりの面積を確保できる。

南北については北側ではSD05というはっきりした溝があり、これは前回の調査で東側に続くことが知られている。残念ながら、南側では溝などは検出できず、南北の範囲は不明である。しかし、北、南、西が急な崖、東側に谷が入り込んでいることを考えると、調査区以西が一つの区画内であると推測することもできる。地籍図ではもう少し広い範囲に「土井」の地名を見出せ、<sup>(11)</sup>これらの多くはいまだ未調査であり、地籍図との照合など残された課題は多い。

### 注

(1) 島根県教育委員会『上久々茂土居跡』1992年 以下、前回の調査についてはこれによる。

(2) 山口県教育委員会『玉祖遺跡・西小路遺跡』1983年

(3) 国立歴史民俗博物館「日本出土の貿易陶磁」『国立歴史民俗博物館資料調査報告書』4  
1993年

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2 1982年

(1)～(4)は龍泉窯系碗D類、(5)は龍泉窯系碗I類、(7)は龍泉窯系碗C2類である。

(4) 山口県教育委員会『大内氏館跡』VII 1987年

(5) 間壁忠彦「備前焼」『考古学ライブラリー』60 1991年

(6) 岩崎仁志「防長地域の足鍋について」『山口考古』17 1988年

岩崎仁志「防長型播鉢について」『山口考古』19 1990年

以上の論文を参考にすると第33図(1)はII型式、(2)～(5)はIII型式にあたる。また

(8)、(10)の足鍋の足を見ても先端を屈曲させている。

- (7) 島根県で「防長系」瓦器が出土している遺跡は報告書によると、足鍋は益田市七尾城跡、三宅御土居跡、鹿足郡六日市町前立山遺跡、鹿足郡津和野町高田遺跡、また、播鉢は鹿足郡六日市町前立山遺跡、河内遺跡、九郎原Ⅱ遺跡、鹿足郡津和野町高田遺跡がある。

益田市教育委員会『三宅御土居跡』 1991年

島根県教育委員会『中国縦貫自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1980年

津和野町教育委員会『高田遺跡』Ⅲ 1993年

- (8) 鳥取市教育委員会『史跡鳥取城跡附太閤ヶ平天球丸発掘調査概要報告書』 1992年

- (9) これまでの発掘調査では井戸は確認できなかった。この時期の集落や館跡からは必ずといってよいほど、井戸は確認されている。調査区の周辺に目を向けると15～20m離れた西側に、石組の井戸が3ヶ所存在した。出土品などは無く、時期は不明である。これらは区画内にあり、同時期の可能性もある。なお、石組遺構は検出できなかった。

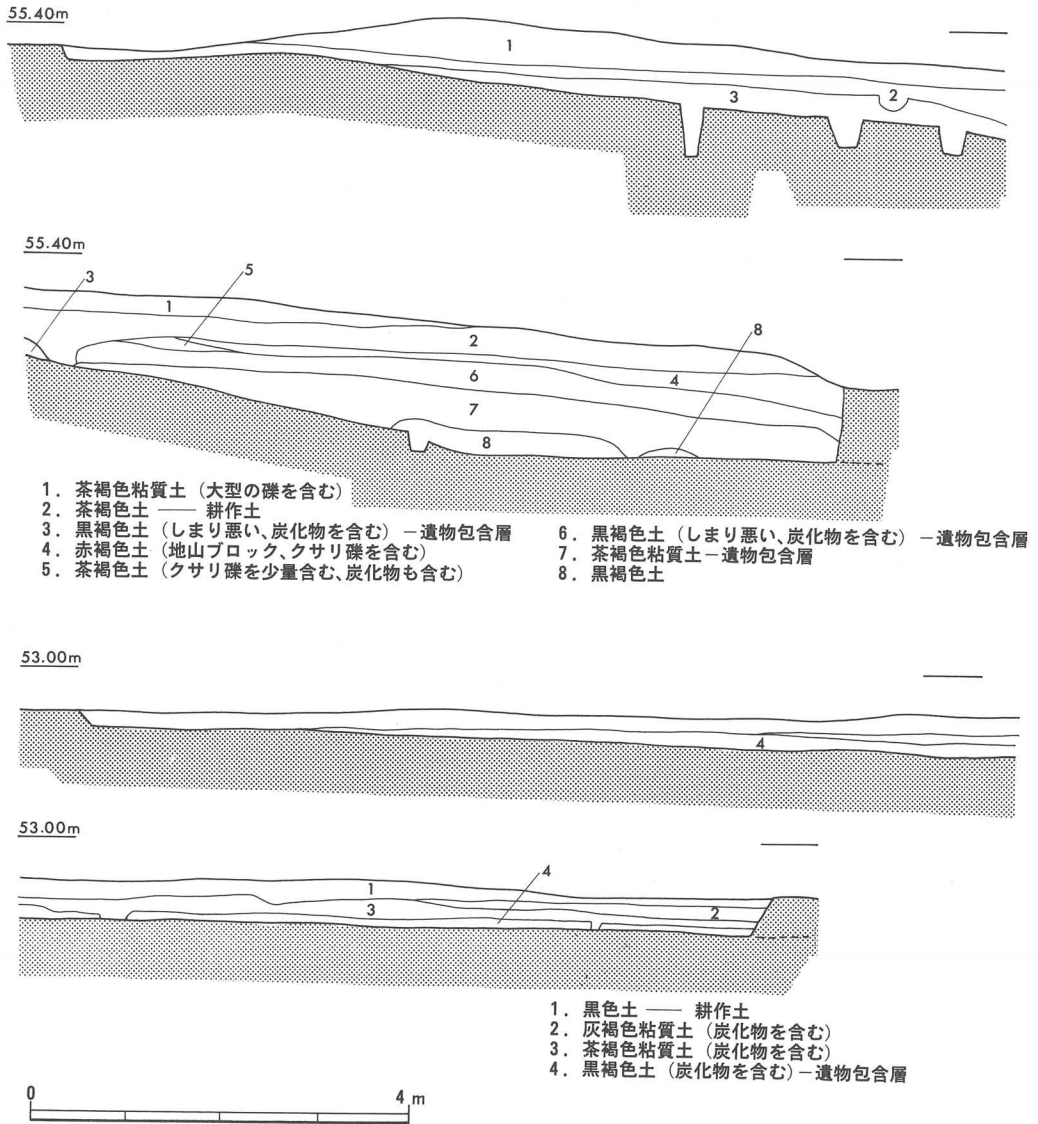
- (10) 今岡稔「上久々茂地区の中世石塔と古墓について」『上久々茂土居跡』 1992年

- (11) 井上寛司「上久々茂土居跡の歴史的 성격」『上久々茂土居跡』 1992年

## 第5章 大峠遺跡

### 第1節 大峠遺跡の位置と概要

大峠遺跡は上久々茂土居跡の北側約100mにある標高52mの河岸段丘上に位置する。上久々茂土居跡との間には、大峠川が流れ、川からの比高は約15mを測る。一方、東側も小さい谷が入り込み、東側に緩やかに傾斜をもつ。I区は丘陵の南斜面に位置し、II・III区は段丘上の平坦面に



第39図 大峠遺跡土層断面図 (上. I区北壁、下. II区東西中央壁)



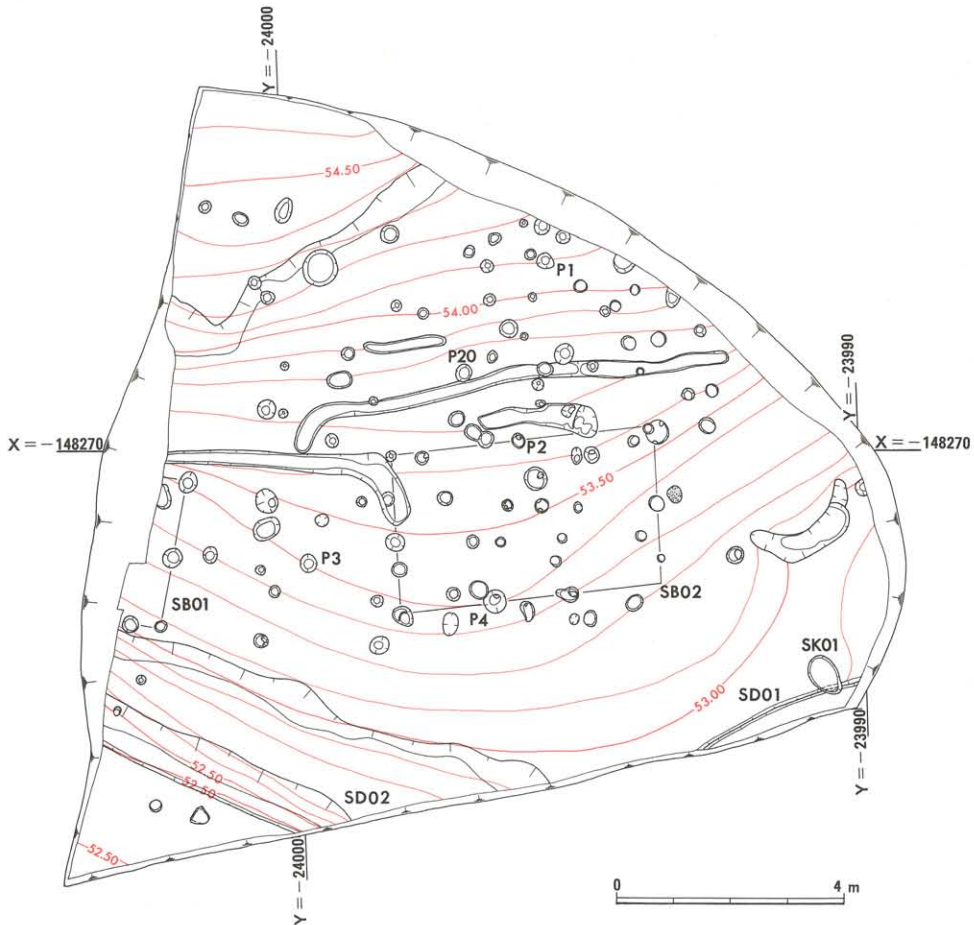
あたる。現状では畑地である。なお、I区調査区外の西約10mに大峠古墓が存在する。

今回の調査の結果、I区から奈良時代の掘立柱建物2棟のほか、ピット群や土錘を出土した土坑1基などを確認した。遺物としては土師器や須恵器および中国製青磁が多く出土している。II区からはピット群や土坑群を検出し、5棟の掘立柱建物を確認した。遺物はかなり出土し、土師器、須恵器、中国製青磁などがある。III区では近代に造られた池、井戸、石垣やピット群、礎石の根石と思われる石群を検出した。これらの遺構からは近代の陶磁器しか出土しなかった。

## 第2節 遺構

### I区(第39, 40図)

I区は範囲確認調査から遺物が出土したことにより設定した。丘陵頂部から南に向けて緩やかに傾斜する畑地に立地する。西側以外は生活道で囲まれており、調査は限られた範囲のみ実施した。この畑地は江戸時代に造られたといわれ、地山から1.2mとかなり土が盛られていた。



第40図 大峠遺跡I区遺構位置図

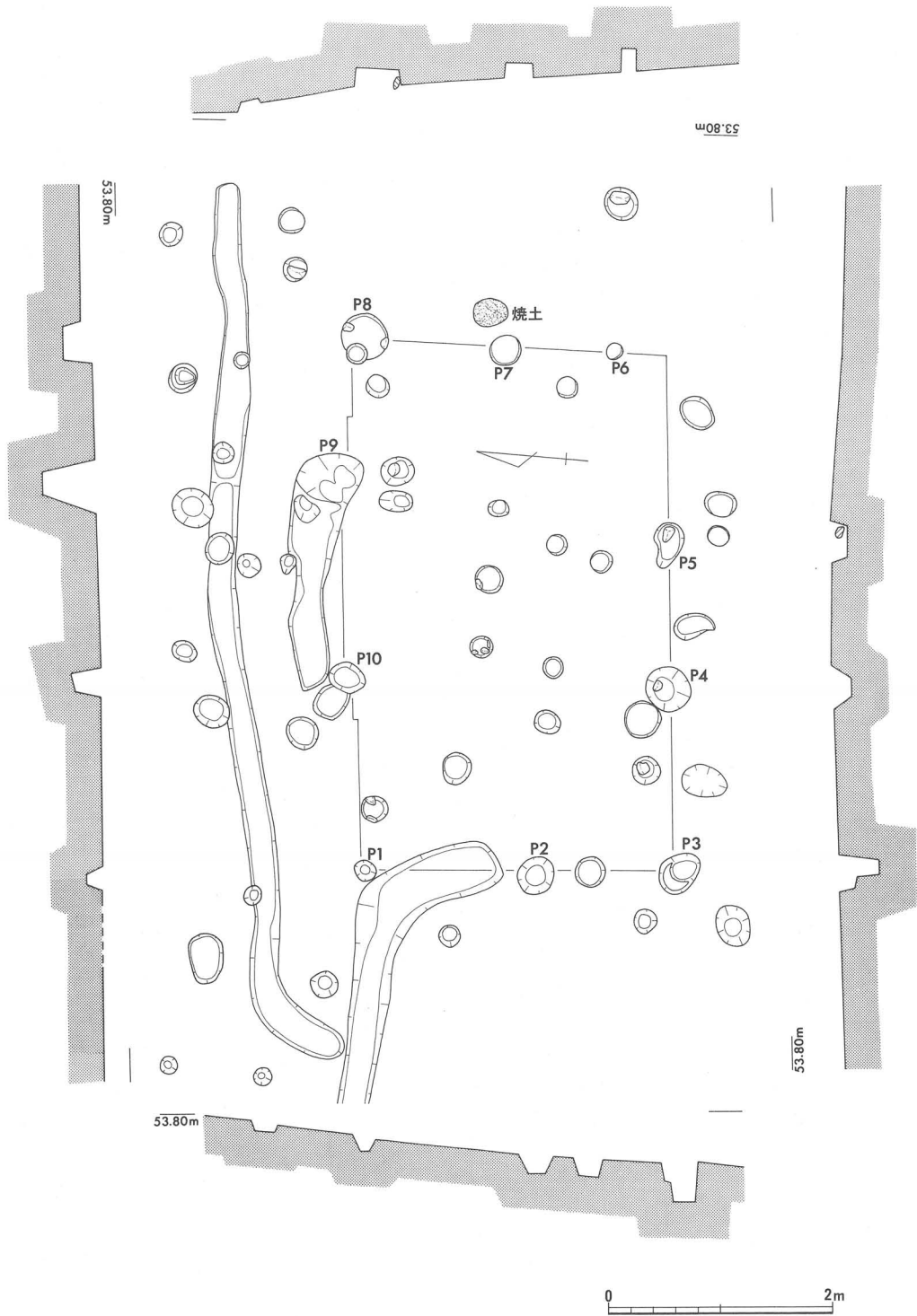


第41図 大峠遺跡SB01実測図

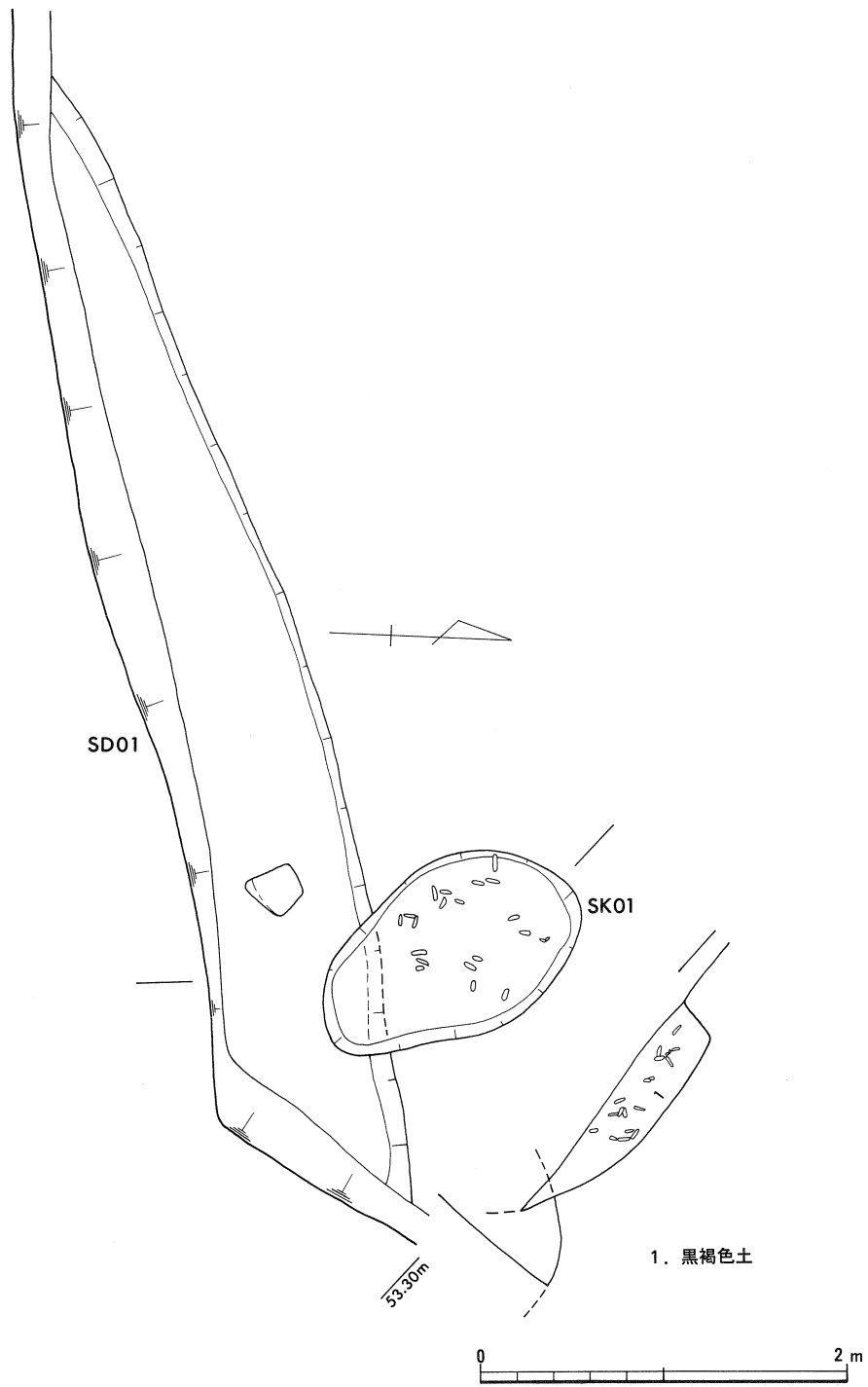
土層堆積状況を見ると、北側では15cmの耕作土の下は地山であった。南側に下がるにつれ、耕作土は厚く、谷側には地山の上に茶褐色土層が50cmの厚さである。この層から須恵器や土師器が出土した。また、この茶褐色土層上面からは中世のピットを数穴検出した。茶褐色土の上には黒褐色土が10～20cmあり、この土層から中世の遺物の土師器や青磁が少数出土した。地山は北から南へとかなりの傾斜をもっている。

斜面には多くのピットが存在した。奈良時代の掘立柱建物2棟、奈良時代の溝1条、江戸時代の溝1条と土坑1基を検出した。掘立柱建物は重複しており、遺物は包含層である茶褐色土から一括出土した。また、中世の土師器などを含むピットがあるため、この時期の遺構が存在すると考えられるが、明確に確認できなかった。

なお、トレンチ調査の結果、丘陵頂部は畑地や家屋のため地山まで掘り込まれ、明瞭な遺構や遺物がなく、面的には拡張しなかった。



第42図 大峠遺跡SB02実測図



第43図 大峠遺跡SK01, SD01実測図

#### SB01 (第41図)

調査区の頂部から1m下がった加工段に位置する。遺構は地山面に設けられている。加工段の山側には浅い溝が巡り、その溝の谷側に掘立柱建物がある。溝は素掘りで、全長4.5m、幅30cm、深さ10cmを測り、東端で南側に屈曲している。

掘立柱建物は溝に沿って南側に位置している。P1～P3からなり、梁行2間2.6m、桁行は未発掘のため不明である。梁行の方位はN-11.5°-Eである。ピット間は梁行で1.4m、1.2mである。ピットは上端で20～40cm、深さ20～40cmで、ややばらつきがあるもののしっかりしている。南側は傾斜しており、本来は盛土などがあり、平坦に造られていたと考えられる。さらに、建物の東側には溝との間に長さ3.2m、幅3.0mの空地がある。ピットから須恵器の小片が出土している。

なお、建物の西側は調査区外のため、未発掘である。

#### SB02 (第42図)

SB01の東側に位置し、溝など一部が重複している。SB01の方が約20cm低い。加工段の山側には浅い溝が巡り、その谷側に掘立柱建物がある。溝は素掘りで、全長7.6m、幅30cm、深さ10cmを測り、西端で南側に屈曲している。

掘立柱建物は溝に沿って南側に位置している。桁行3間4.8m、梁行2間2.8mである。ピットは上端で20～40cm、深さ15～35cmを測る。ピット間は桁行で1.4m、1.8m、梁行1.3m、1.5mで、不揃いである。桁行の方位はN-8.4°-Eである。南側は傾斜しており、本来は盛土などがあり、平坦面を造っていたと考えられる。

なお、建物の東側には溝との間に長さ3.0m、幅1.4mの空地があり、その中には長径30cm、短径25cmの焼土面が残る。高温のため赤褐色に変色していた。

#### SD01 (第43図)

調査区の南端の谷部で検出した。幅0.8m以上、長さ3m以上を測るが、南側及び東側が現在の道路下のため未発掘で、規模は不明である。深さ30cmを測り、溝の中からは角礫が3個、須恵器が数片出土した。埋土は黒褐色土の単層である。

#### SD02

調査区の南端で検出した溝で、幅1m、深さ20cmを測り、床面や壁面はしっかりと加工されており、西側の調査区外へと延びている。埋土内から肥前系の陶磁器が出土しており、江戸時代に埋没したことがわかる。

#### SK01 (第43図)

SD01を切って造られている。長径1.5m、短径0.9m、深さ10cmを測り、平面形は長楕

円形である。中には黒褐色土が堆積しており、その内部から全面にわたってかなり散らばった状態で、土錘が出土した。土坑は土錘を付けた網を処理したものであろうか。時期を確定する遺物は出土していないが、遺構が茶褐色土から掘り込まれており、中世の可能性が高い。

P 1 の底部には柱痕が残っていた。形態は円形で、先端は平らである。残存長は 22 cm、直径 16 cm を測る。

## II 区 (第 39、44 図)

調査区の中央に位置し、調査前には I 区から傾斜してきた斜面が畑地となり、平坦面を形成していた。また、東側には小さな谷が入り込み、一方、西側は益田川に向けて急な斜面になっており、調査区内が広い平坦面を確保できる唯一の場所である。

調査後の地形は東端から調査区中央部に向かって、10 m にわたり谷が入り込んでおり、山からの谷水が流れる道筋となっている。よって、湧水が激しく、水はけも悪い。このことより、一部のピットの底部には柱痕が残っているものもある。

II 区は全面から多くのピットを検出した。掘立柱建物 5 棟を確認したが、3 棟は谷部にある。

土層堆積状況を見ると北側はやや厚く、50 cm の黒色土の耕作土があり、その下に約 10 cm の遺物包含層が認められ、その下は地山となる。南側は黒色土の耕作土が 5～10 cm しか堆積しておらず、すぐに地山となる。地山は南側から北側に向け徐々に下がっており、窪地状になっている。

### SB03 (第 45 図)

II 区の北部に存在する。桁行 3 間 5.0 m、梁行 2 間 4.2 m の建物跡で、規模はやや大きい。桁行の方位は N-25°-E である。ピットの大きさは 40～60 cm、深さ 40 cm を測る。ピット間は桁行 1.1～2.1 m、梁行 2.0 m、2.2 m で桁行はやや不揃いであるが、梁行はほぼ等間隔である。また、南西隅のピットは確認できなかった。床面は南方に傾斜している。この遺構に伴う溝などは検出できなかった。出土品としては土師器がある。

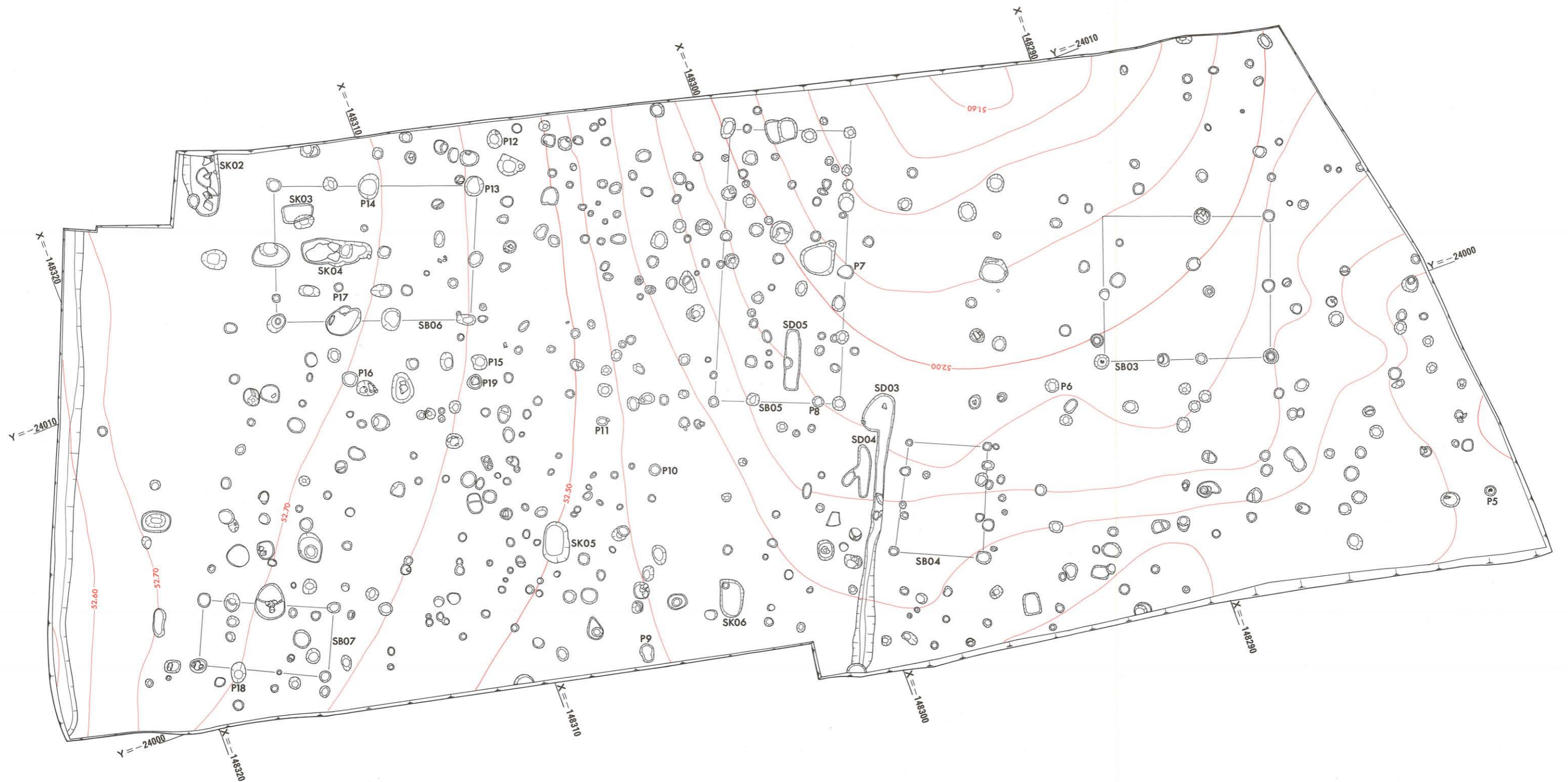
### SB04 (第 46 図)

II 区の中央部に存在する。桁行 3 間 3.4 m、梁行 1 間 2.4 m の建物跡で、桁行の方位は N-65°-W である。ピットの大きさは 20～40 cm、深さ 30 cm を測る。ピット間は桁行 1.0 m、1.0 m、1.4 m、梁行 1～3.3 m で、やや不揃いである。床面は西方に傾斜している。この遺構に伴う溝や遺物などは検出できなかった。

### SB05 (第 47 図)

II 区の中央部に存在する。桁行 4 間 8.4 m、梁行 2 間 4.0 m の建物跡で、規模はやや大きい。桁行の方位は N-65°-W で、SB04 と同じである。ピットの大きさは 30～60 cm、深さ 50 cm を測る。ピット間は桁行 2.0 m、梁行 2.0 m で、等間隔である。床面は北西方に傾斜してい

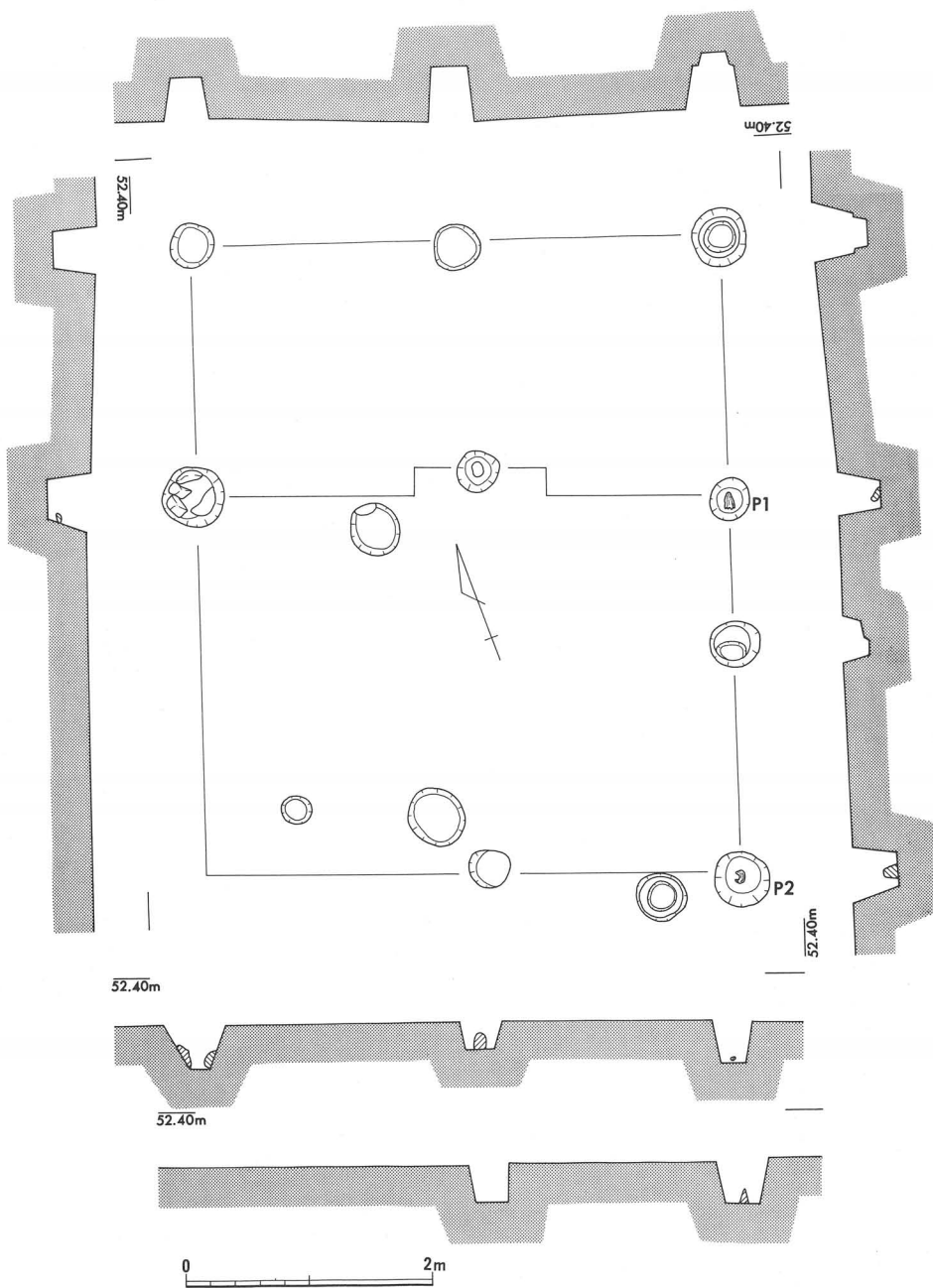




第44图 大峠遺跡Ⅱ区遺構位置图



る。この遺構に伴う溝などは検出できなかった。ピットから李朝陶器が出土している。



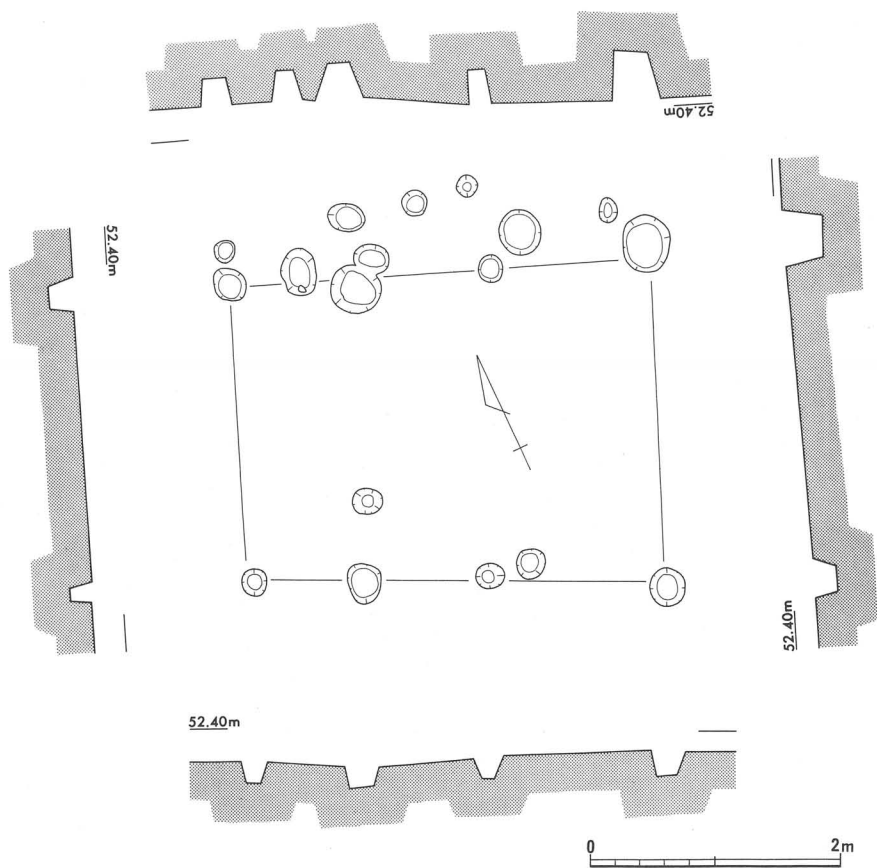
第45図 大峠遺跡SB03実測図

SB06 (第48図)

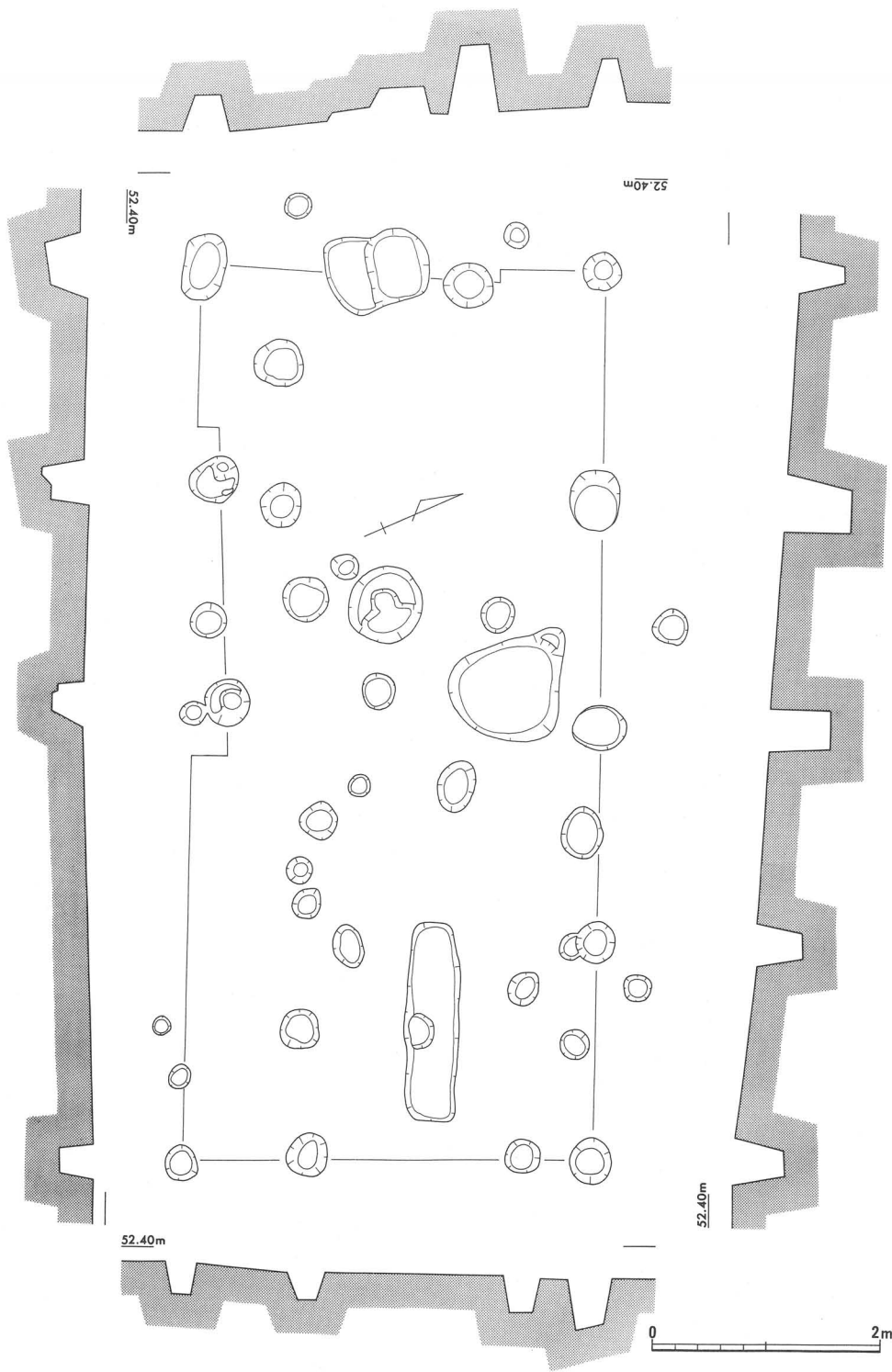
Ⅱ区の南部に存在する。桁行3間6.0m、梁行2間4.2mの建物跡で、規模は大きい。桁行の方位はN-24°-Eである。ピットはしっかりしており、大きさは40~60cm、深さ40cmを測る。ピット間は桁行1.8m、1.2m、3.0m、1.6m、1.8m、2.2m、梁行2.0m、2.2m、2.2m、2.0mで、やや不揃いである。床面はやや北方に傾斜しているが、ピットの規模が大きくしっかりしており、乾燥したやや高台にあることから、この遺跡の中心的建物と思われる。この遺構に伴う溝などは検出できなかった。ピットから備前の挿鉢・白磁が出土している。

SB07 (第49図)

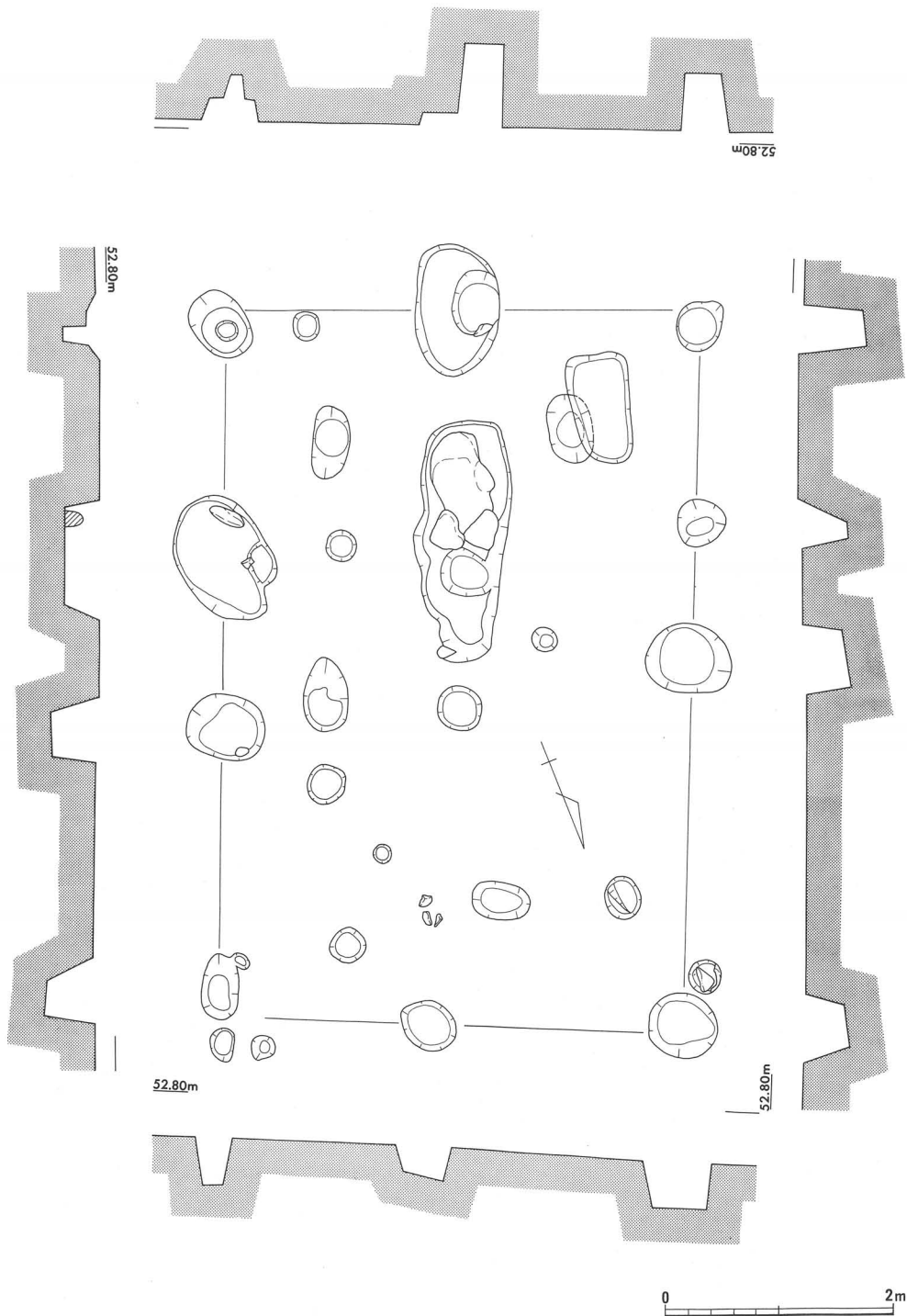
Ⅱ区の南部に存在し、SB06の8m東側に位置する。桁行3間4.0m、梁行1間2.0mの建物跡で、規模はやや小さい。桁行の方位はN-22°-Eである。ピットの大きさは40~60cm、深さ30~50cmを測る。ピット間は桁行2.0m、1.0m、1.0m、1.2m、1.4m、梁行2.0



第46図 大峠遺跡SB04実測図



第47図 大峠遺跡SB05実測図



第48図 大峠遺跡SB06実測図

mで、やや不揃いである。床面は北方に傾斜している。この遺構に伴う溝などは検出できなかった。ピットから16世紀の青花が出土している。

#### SD03

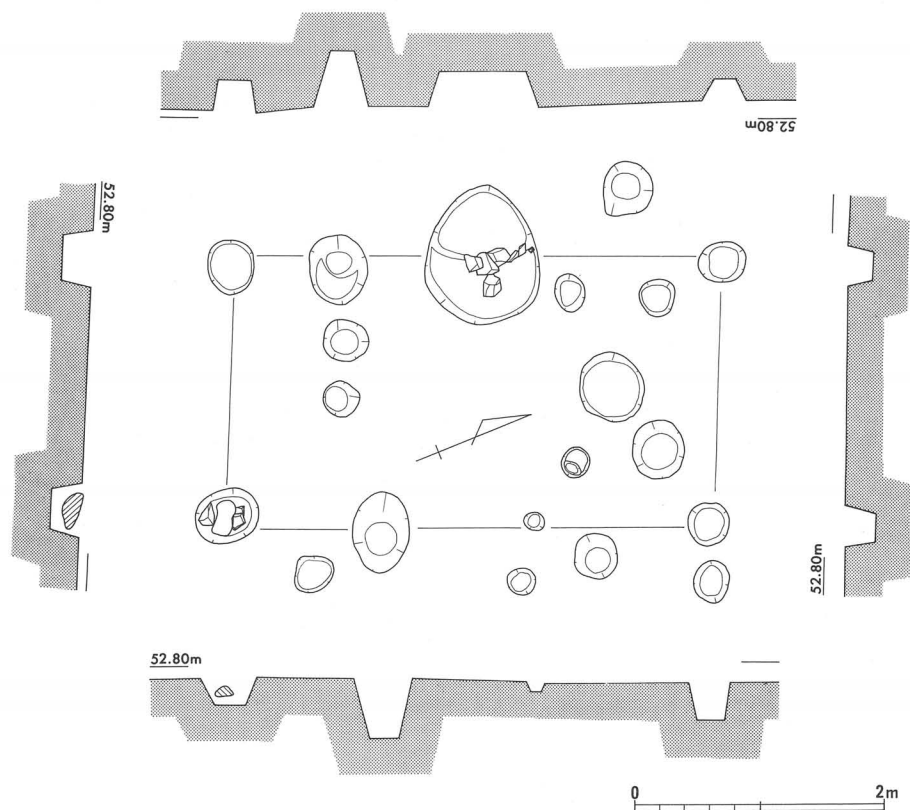
Ⅱ区の中央部で検出した。全長8.0m、幅4.0cm、深さ1.0cmを測る。出土遺物は肥前系陶磁器があり、江戸時代と思われる。また、調査前は畑の区画であり、これが江戸時代まで遡ることがわかる。

#### SD04

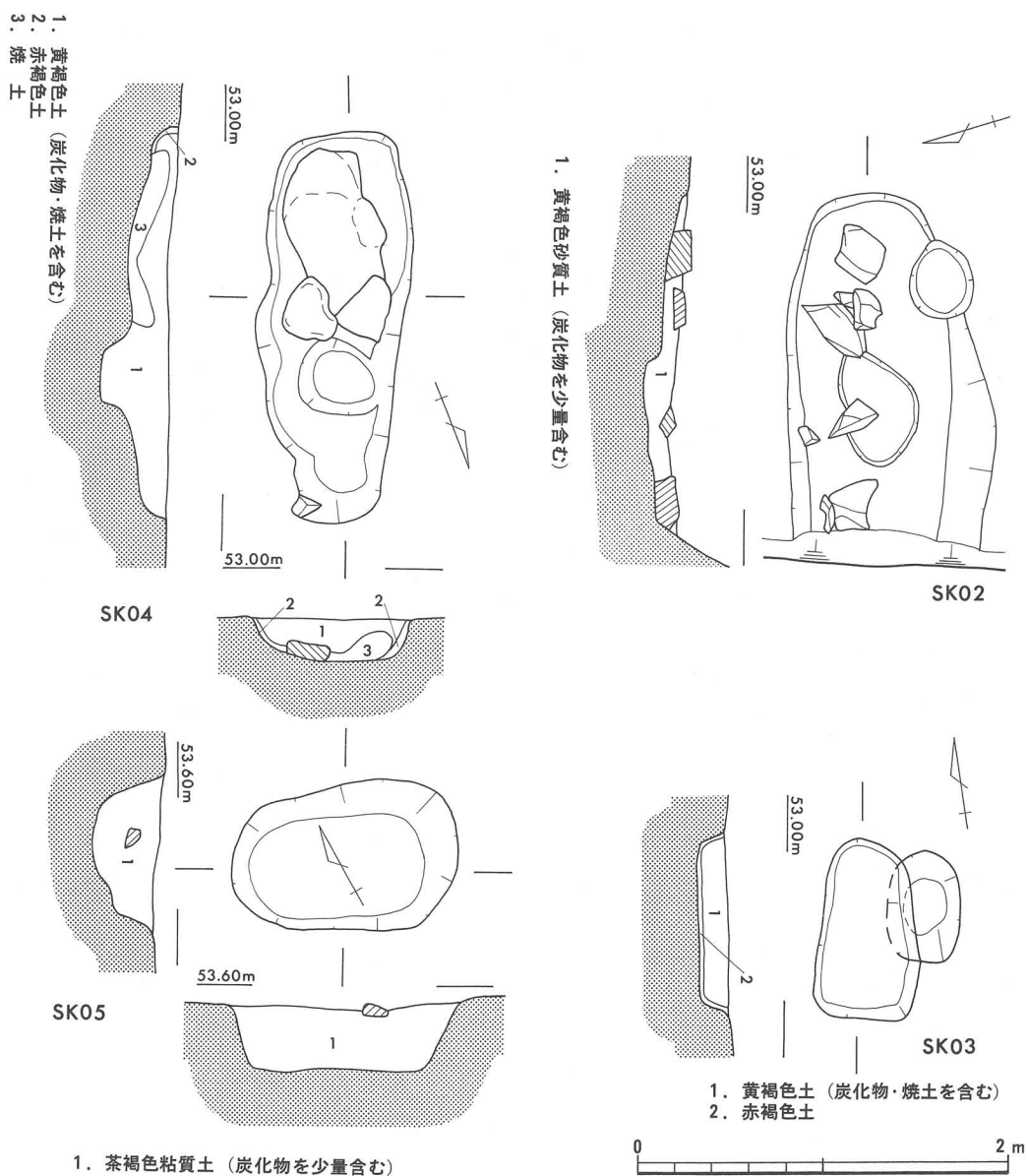
Ⅱ区の中央部で検出し、SB04の南側に位置する。2.0cm離れて、SD03が存在する。全長1.6m、幅4.0cmと小さく、深さも1.5cmと浅い。出土遺物は青磁があり、15世紀を中心とした時期である。

#### SD05

Ⅱ区の中央部で検出し、2m離れて、SD03が存在する。全長1.8m、幅0.5mと小さく、深さも1.0cmと浅い。出土品はなく、時期は不明である。



第49図 大峠遺跡S B 0 7実測図



第50図 大峠遺跡土坑実測図

SK02

Ⅱ区の南西隅で検出した。内部から拳大の石を7個確認した。出土品としては瓦器がある。

SK03

平面形は長方形で、床面は平坦であった。土坑の周辺は熱を受け、赤褐色に変色していたが、その土自体は軟質である。焼土や炭化物が多く出土した。遺物はなく、時期は不明である。

#### SK04

SK03の東側1mに位置する。SK03と同様に、熱を受け、土坑の壁面が赤褐色に変形していたが、その土自体は軟質である。埋土は黄褐色砂層である。南側半分には15×10cm、厚さ5cmの平坦な石が1個置かれていた。また、その西側には大変固い焼土塊があった。土坑内からは肥前系陶器が出土し、江戸時代のものである。

#### SK05

Ⅱ区の中央部やや東側で検出した。平面形は長方形で、床面は平坦である。土坑内から瓦器が出土している。

#### SK06

Ⅱ区中央部に位置し、形態、規模などSK05と似る。土坑内から青磁が出土している。

P5の底部には柱痕が残存していた。形態は円形で、残存長30cm、直径13cmを測る。

#### Ⅲ区（第51図）

大峠遺跡の調査区の南端に位置している。Ⅱ区とⅢ区の間には「赤道」が存在し、Ⅲ区の地形がこの道を境に80cmほど高くなっており、これを考慮してⅡ区とわけた。調査区外の南側は現在、墓地となっており、地山まで掘り返されている。さらに、南側は川に向かって急な崖になっている。調査区の西側及び北側で、多くの近世・近代の遺物を検出した。北側および西側には石垣があり、これは、畑にしていたときに土の崩落を防ぐために造られたという。また、北西隅には井戸がある。この井戸跡は地元の話では、昭和20年代に掘ったが、水が出ず、途中で掘ることをやめたということである。さらに、その南側には池跡があった。これは調査区外の西隣に民家があり、その家の人が生活に使用するために掘ったものである。ここからは昭和30年代の陶磁器が廃棄された状態で多くの陶磁器が出土した。その他、中央にはピット数穴、礎石の根石と思われる集積箇所を確認した。

土層堆積状況を見ると、南東隅で約20cm、厚いところで50cmの耕作土が堆積していた。しかし、耕作土の下はすぐに地山となっており、中央の溝状遺構の埋土中にはガラス片を含んでいた。南西隅の池跡付近では30～40cmの石や陶磁器を含んだ整地土が耕作土の下に堆積していた。

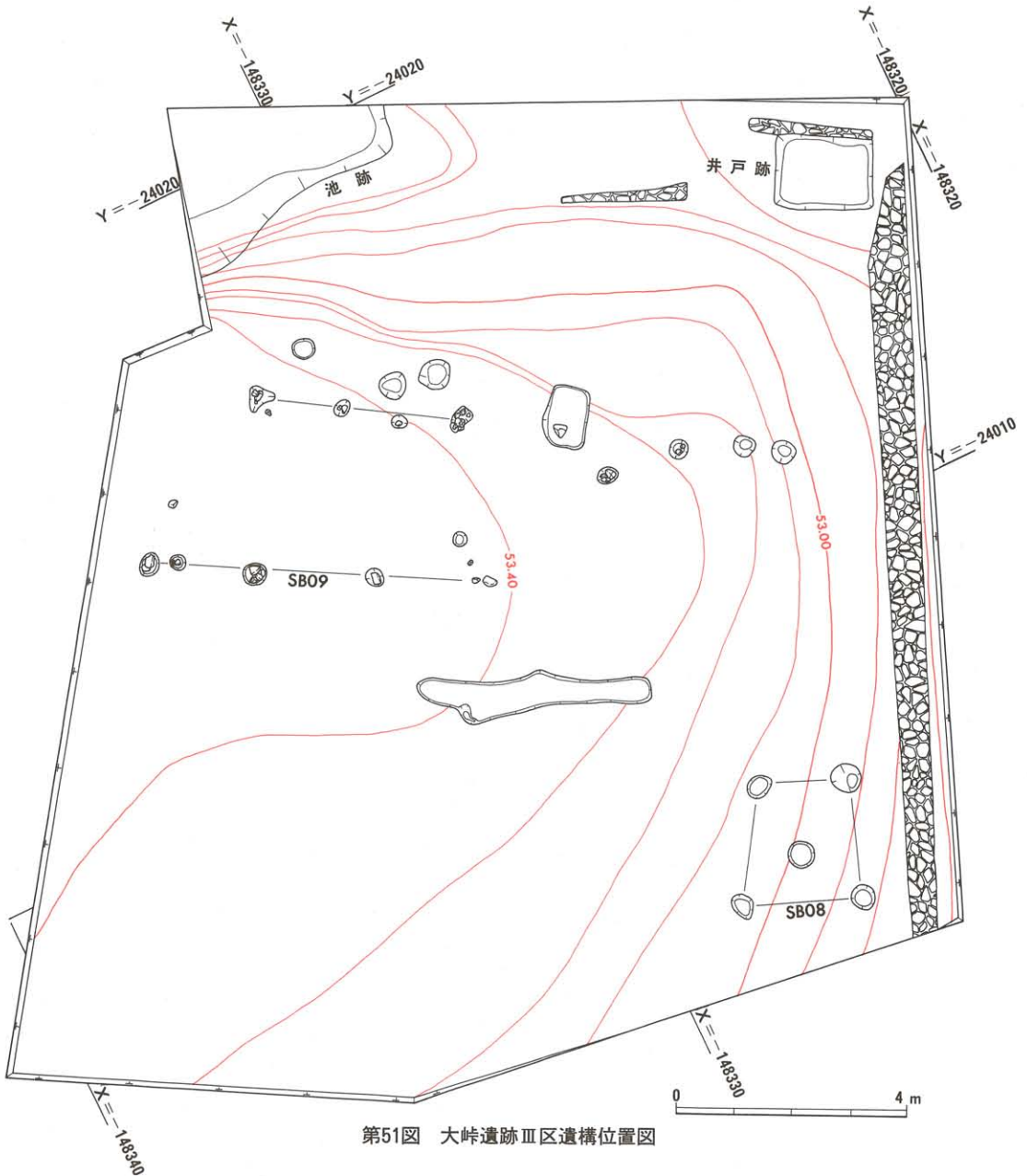
#### SB08（第52図）

調査区の東側で、サイコロの5の目状で配したピット5穴を検出した。これらのピットは同じ規模で、上端で40～45cmを測る。しかし、ピット間の距離が1.6m、2.0mと不揃いで、配置も整っておらず、不整形になっている。各ピットの深さは10cmと浅く、傾斜地に位置していることをも合わせて、これらを柱穴とし、建物とするには躊躇する。ここではとりあえず、建物跡としたが出土品はなく、時期は不明である。

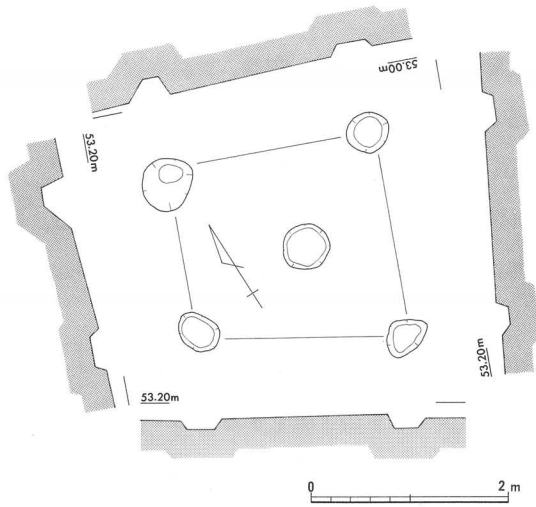


SB09 (第53図)

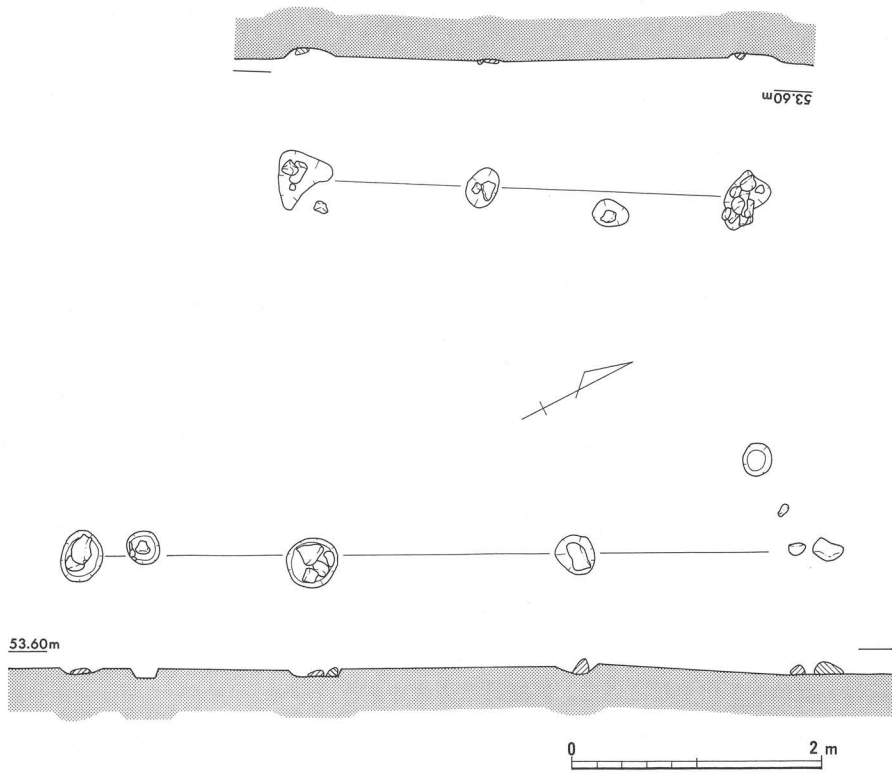
深さ10cmほどの浅い穴を掘り、その中に、15cmぐらいの小さい角礫を2~4個詰めたピットが二列並んでいた。各礫間の距離は東側で、2.0m、1.8m、西側で1.4m、2.0mを測る。方位はN-28°-Eである。東西の角礫の距離は3mで、桁行の二列はほぼ一直線上にあり、平行して並んでいる。梁行の角礫の位置は直線にならず、不揃いである。角礫は根石と考えられ、ここではとりあえず、建物跡とした。出土品はなく、時期は不明である。



第51図 大峠遺跡Ⅲ区遺構位置図



第52図 大峠遺跡SB08実測図



第53図 大峠遺跡SB09実測図

### 第3節 遺物

大峠遺跡からは須恵器、土師器を中心に瓦器、陶器、貿易陶磁、土錘、古銭、金属器、鉄滓が出土した。以下、遺物別に記述する。

#### 須 恵 器 (第54、55図、図版35、36)

大峠遺跡の須恵器はI、II区を中心に出土した。その量は僅かである。器種としては蓋坏・壺・鉢・高坏・甕がある。数量的には蓋坏が多く、鉢・高坏・甕は1ないし2個しか確認されていない。

#### 蓋坏蓋 (第54図1～5)

つまみにはボタン状と輪状の二種類がある。ボタン状は1個のみで、他は総て輪状である。輪状のつまみは総て大きい。形態は外反するもの・直立するもの・内湾するもの・低いものと多様である。肩部が大きく張るもの(2)、(3)はなで肩で、笠形のもの(5)の二形態が存在する。成形では天井部が糸切りのもの(4)、調整としては肩部外面に磨きをもつもの(2)が認められる。

#### 蓋坏身 (第54図6～15)

総てが高台をもつ。体部は低く、少し外開きとなり、しっかりと踏ん張った高台をもつものと、長く外に開く体部に低い高台が底部端に付くものとの、大きく2形態にわかれる。

#### 壺 (第55図1～4)

高台をもつ壺で、頸部と底部の破片が出土している。頸部には二条の凹線と肩部にカキ目があるもの(2)、体部と底部の境にもカキ目が施されているもの(3)がある。(2)の高台は低く、底部の端に付くが、(4)はやや高く、外に開く。

#### 甕 (第55図5、6)

図化できるのは底部付近の体部の破片で、二個ある。(5)は内面に同心円状の叩き痕をもつもので、器壁は厚い。(6)は大型品で、外面の下方にはヘラケズリを施している。なお、これは大型の壺の可能性もある。

#### 鉢 (第55図7)

口縁部の破片で、口唇部の内側は少し肥厚している。

#### 高 坏 (第55図8)

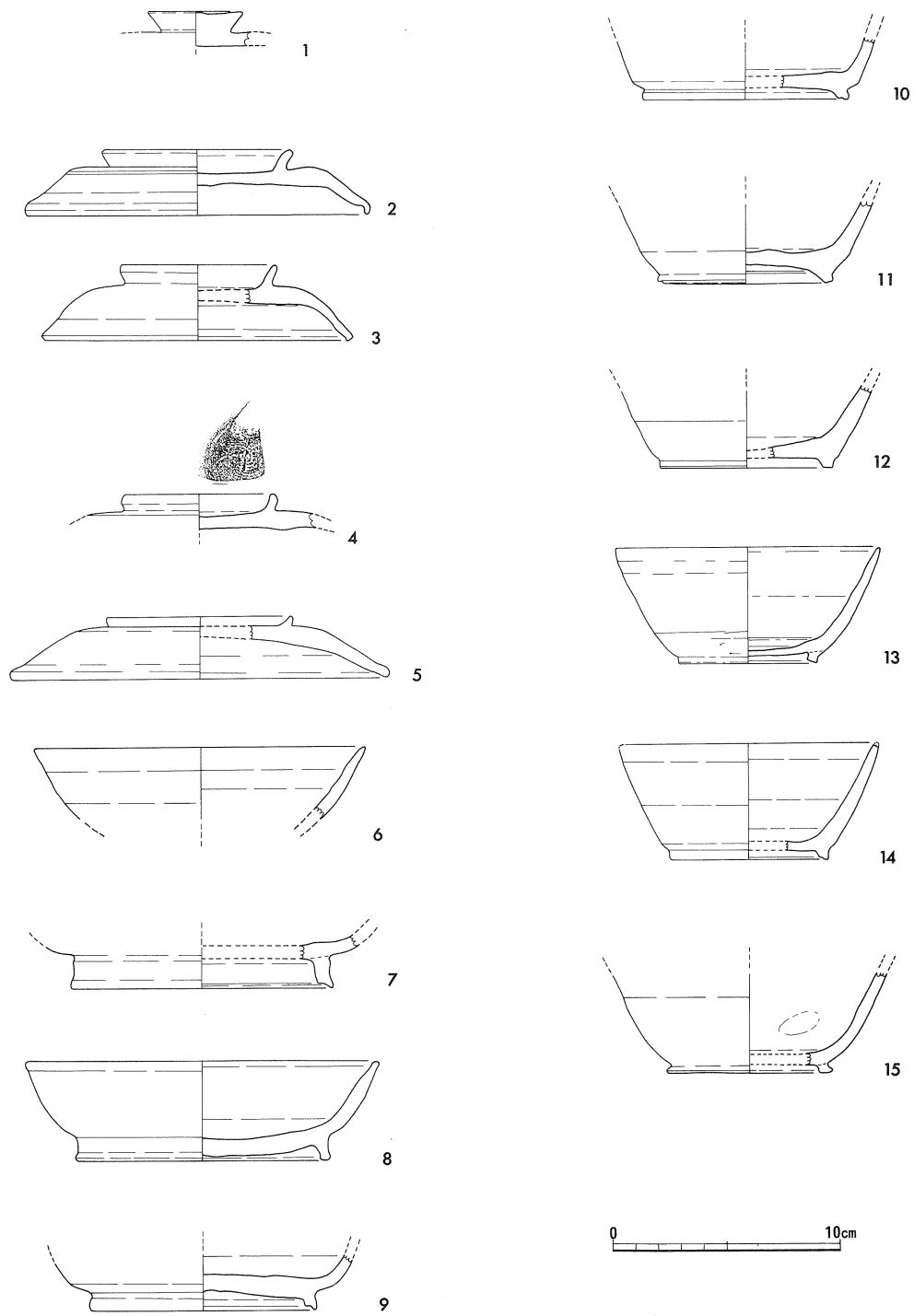
深さのある坏の破片で、体部から底部にかけて大きく屈曲する。

#### 土 師 器 (第55図、図版36)

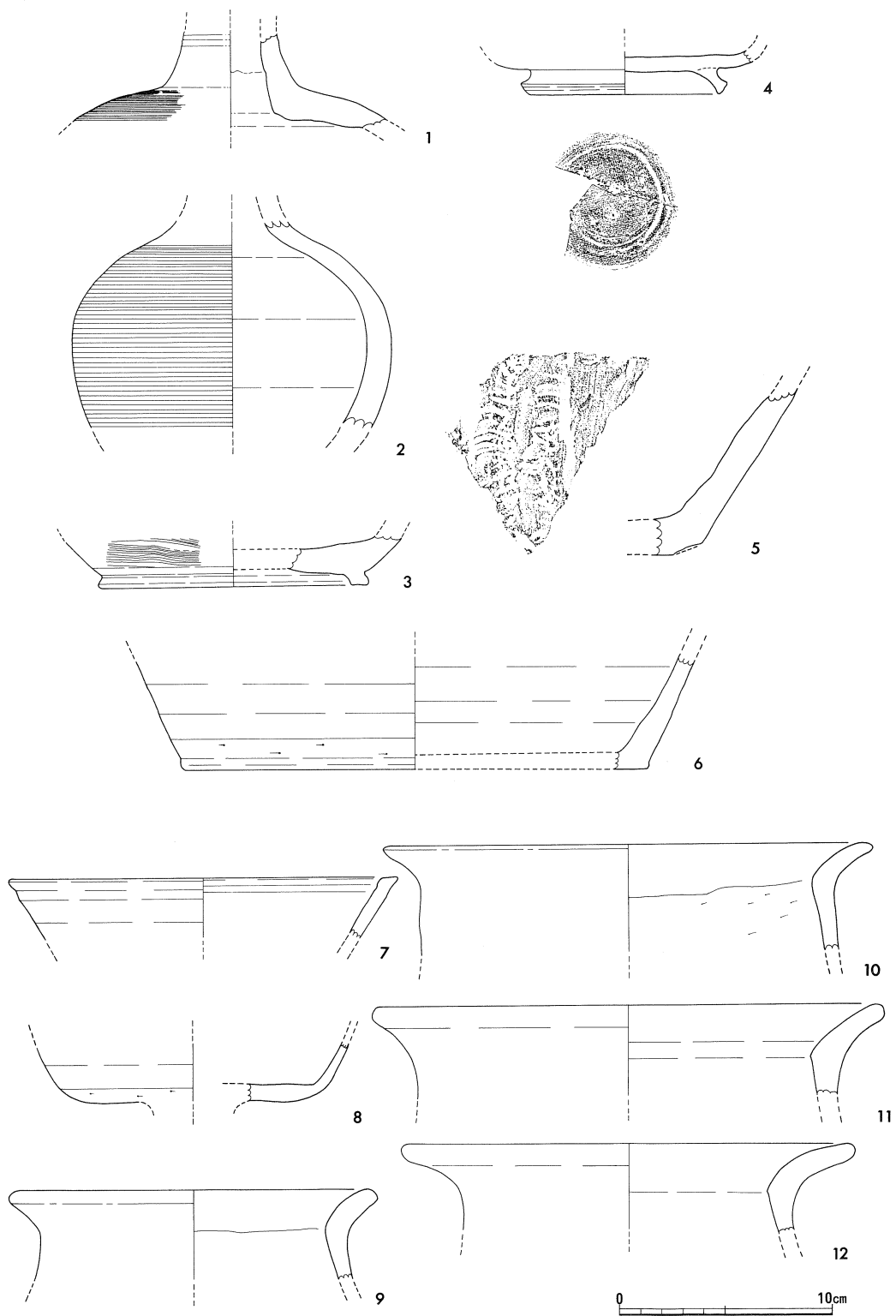
土師器は、甕のみが出土している。供繕具は皆無である。

#### 甕 (第55図9～12)

口縁部は「く」の字に大きく外反し、体部は直線状になる。調整は口縁部の内外面はヨコナデ、体部外面が縦方向のハケ目、内面がヘラケズリとなる。



第54图 大峠遺跡出土須恵器実測图 1 : P 6 2, 6, 11, 12, 13, 14 : I区黒褐色土 3 : P 20  
4, 5, 7, 8, 9, 10 : II区黒褐色土 15 : P 4



第55図 大峠遺跡出土須恵器・土師器実測図 1,2,3,5,7,8,9,10 : II区黒褐色土 4 : P3 6 : SD 0 1  
11,12 : I区黒褐色土

第3表 大峠遺跡出土土器観察表1

器種	挿図番号	調査区	法量 (cm)	焼成・胎土・色調	調整	備考
須恵器坏身	図54-1	II	口径器高 つまみ径 2.0	焼成：良好 胎土：緻密 色調：内外とも灰色。外面に淡緑色の目 然釉がかかる。	外面：回転ナデ 内面：静止ナデ	ボタン状のつまみ
須恵器坏蓋	-2	I	口径 15.0 器高 2.8 つまみ径 8.4	焼成：良好 胎土：密 色調：内外とも灰色	外面：肩部ヘラナデ、他は回転ナデ。回転糸切り 内面：天井部静止ナデ、体部回転ナデ	外面に重焼き痕残る。 輪状のつまみ
	-3	I	口径 13.6 器高 3.3 つまみ径 6.8	焼成：良好 胎土：密 色調：内外とも青灰色	外面：回転ナデ 内面：天井部静止ナデ、体部回転ナデ	外面に重焼き痕残る。 輪状のつまみ
	-4	II	口径器高 つまみ径 6.5	焼成：良好 胎土：密、1mm以下の砂粒を含む。 色調：内外とも灰色	外面：肩部ヘラケズリ、つまみ回転ナデ。底部回 転糸切り 内面：静止ナデ	内面は二次的に研磨 されている。 輪状のつまみ
須恵器坏身	-5	II	口径 16.4 器高 2.4 つまみ径 8.0	焼成：不良 胎土：密 色調：内外とも淡灰色	内外面とも風化著しく調整不明	
	-6	I	口径器高 底径 14.4	焼成：不良 胎土：密 色調：内外とも淡灰色	外面：風化著しく調整不明 内面：回転ナデ	
	-7	II	口径器高 底径 11.4	焼成：良好 胎土：密 色調：内外とも灰色	外面：回転ナデ 内面：静止ナデ	
	-8	II	口径 15.5 器高 4.4 底径 11.2	焼成：良好 胎土：密、1mm大の砂粒を少し含む。 色調：内外とも灰色	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後回転ヘラケ ズリ 内面：体部回転ナデ、底部静止ナデ	
	-9	II	口径器高 底径 10.0	焼成：良好 胎土：密 色調：内外とも灰色	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後静止ナデ 内面：体部回転ナデ、底部静止ナデ	
	-10	II	口径器高 底径 0	焼成：良好 胎土：密 色調：外面暗青色。内面灰褐色。外面に 茶褐色の自然釉がかかる。	外面：体部回転ナデ、底部不明 内面：体部回転ナデ、底部静止ナデ	
	-11	I	口径器高 底径 7.7	焼成：良好 胎土：密 胎土：2~3mm大の長石を含む。 色調：外面暗青色。内面灰褐色。	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ、後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部静止ナデ	内面底部に黒色の砂 粒が付着（焼成時）。
	-12	I	口径器高 底径 7.7	焼成：良好 胎土：密 胎土：密 色調：内外とも灰色	外面：体部回転ナデ、底部静止ナデ 内面：体部回転ナデ、底部静止ナデ	
	-13	I	口径 11.8 器高 5.0 底径 6.2	焼成：良好 胎土：密 胎土：密 色調：内外とも灰色	外面：体部回転ナデ（下方ヘラケズリか） 底部ヘラキリ後静止ナデ 内面：体部回転ナデ、底部静止ナデ	
	-14	I	口径 11.4 器高 5.0 底径 7.0	焼成：良好 胎土：密 胎土：密 色調：内外とも灰色	外面：体部回転ナデ、底部静止ナデ 内面：体部回転ナデ	
	-15	II	口径器高 底径 7.2	焼成：不良 胎土：密 胎土：密 色調：内外とも淡灰色	外面：体部回転ナデ 内面：体部回転ナデ、底部静止ナデ	
須恵器長頸壺	図55-1	II	口径器高 底径	焼成：良好 胎土：密 胎土：密 色調：内外とも灰色	外面：頸部回転ナデ。肩部カキ目 内面：回転ナデ、頸部に絞りが残る。	頸部～肩部
須恵器壺	-2	II	口径器高 胴最大径 10.0	焼成：良好 胎土：密 胎土：密 色調：外面濃青灰色、内面暗青色	外面：体部カキ目 内面：回転ナデ	胴部
	-3	II	口径器高 底径 9.0	焼成：良好 胎土：密 胎土：密 色調：内外とも灰色	外面：体部カキ目、底部回転ナデ 内面：静止ナデ	
	-4	II	口径器高 底径 12.8	焼成：良好 胎土：密 胎土：密 色調：内外とも灰色	外面：体部回転ナデ 内面：底部回転ナデ	底部
須恵器甕	-5	II	口径器高 底径	焼成：良好 胎土：密 胎土：密 色調：内外とも灰褐色	外面：上方タタキ、下方ヘラケズリ 内面：タタキ後ヨコナデ	底部
	-6	I	口径器高 底径 21.8	焼成：良好 胎土：密 胎土：密 色調：外面暗青色、内面紫褐色	外面：上方回転ナデ、下方ヘラケズリ 内面：回転ナデ	底部
須恵器鉢	-7	I	口径器高 底径 18.4	焼成：普通 胎土：密 胎土：密 色調：内外とも淡灰色	内外面とも回転ナデ	口縁部
須恵器高杯	-8	II	口径器高 底径	焼成：良好 胎土：密 胎土：1mm以下の砂粒を多く含む。 色調：外面淡茶色、内面灰色	外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ 内面：体部回転ナデ、底部静止ナデ	坏部

土師器甕	-9	II	口径 器高 底径	17.3	焼成：良好 胎土：2～4mm大の長石等を多く含む。 色調：内外とも赤褐色	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部に黒斑が認められる。
	-10	II	口径 器高 底径	23.0	焼成：良好 胎土：1～2mm大の長石等を多く含む。 色調：内外とも黄褐色	外面：風化のため調整不明 内面：体部ヘラケズリ	
	-11	I	口径 器高 底径	24.0	焼成：良好 胎土：1～2mm大の砂粒を多く含む。 色調：内外とも黄褐色	外面：口縁部ヨコナデ 内面：体部ヘラケズリ	
	-12	I	口径 器高 底径	21.2	焼成：良好 胎土：1mm前後の砂粒を多く含む。 色調：内外とも黄褐色	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部に黒斑が認められる。

## 貿易陶磁

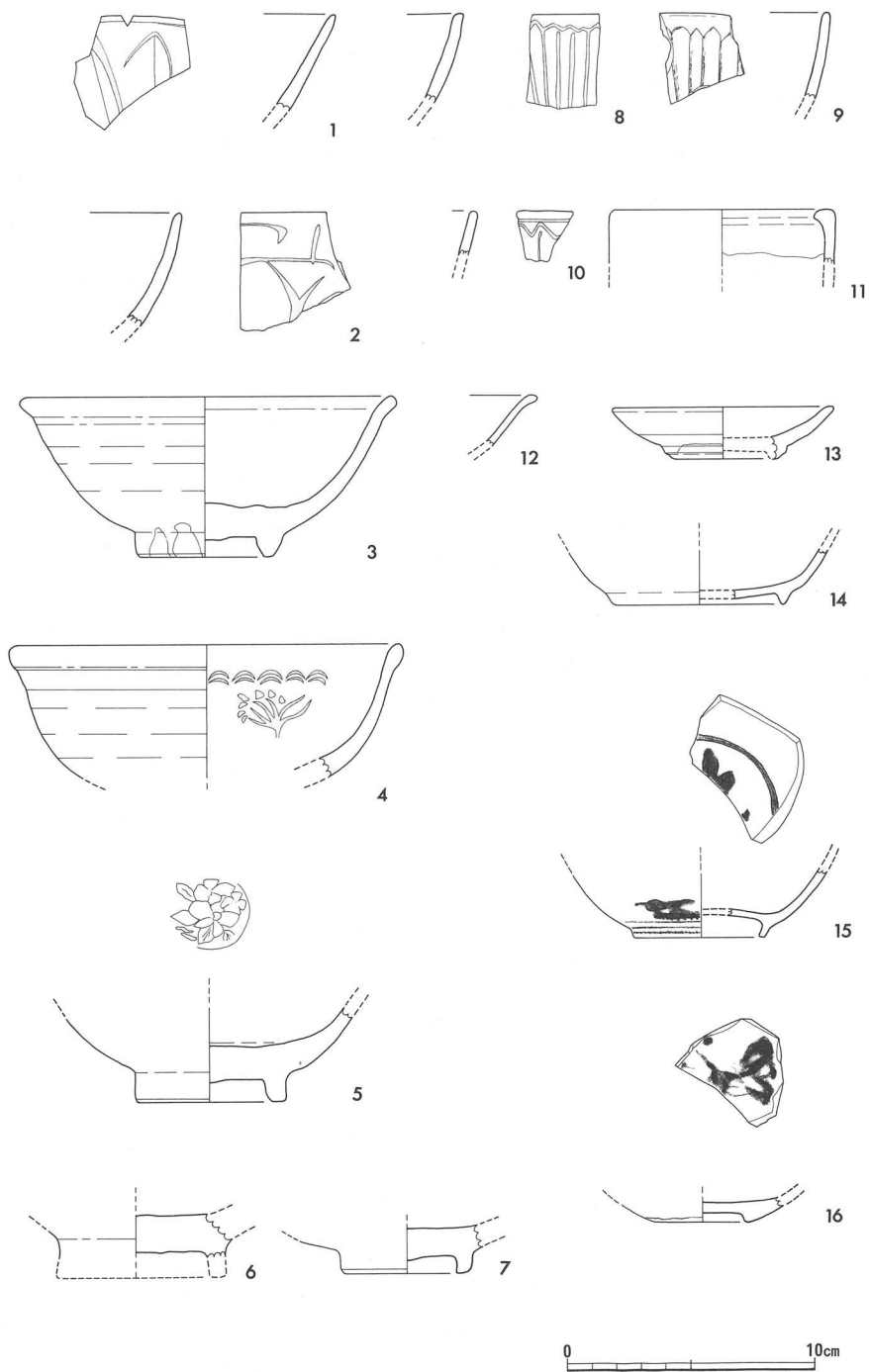
### 青 磁 (第56図1～11、図版37)

大峠遺跡のI・II区から少量出土している。小片が多く、器種としては皿、碗、香炉などがある。量的には碗が大部分を占め、皿と香炉は各1片のみ出土した。

(1)は口縁部の破片である。外面には片切り彫りの蓮弁が施されている。胎土は密で、釉は透明感のある緑灰色を呈する。(2)は外面に雷文帯と大きな線描きの蓮弁文を有する口縁部の破片である。釉は緑灰色を呈し、透明感がある。(3)は全形を窺うことができる唯一の個体である。碗で、体部は丸みをもち、口縁部は外反する。内外面無文で、高台はやや高い。釉は緑灰色で、高台の内側以外に施されている。口径15cm、底径5.3cm、器高6.5cmを測る。(4)は体部が丸みをもち、口縁部は肥厚する。外面は無文であるが、内側には草文と思われる文様が印刻され、いわゆる人形手といわれるものである。釉は厚く、緑色を呈する。口径15.4cmを測る。(5)～(7)は底部の破片である。(5)の見込みには印花文が施されている。釉は厚く、緑色～緑灰色を呈し、透明感がある。(5)は高台の内側にも釉がかかる。底径5.0～5.9cmを測る。(8)～(10)は口縁部の破片である。外面に細い線描きの蓮弁をもつ。(8)、(9)は同一個体の可能性がある。釉は厚く、(8)、(9)が緑灰色を、(10)が淡緑色をしている。(11)は香炉で、口径9.2cmを測る。口縁端部は内側に肥厚し、体部は直線的に下がる。(図版38-1)はII区耕作土から出土した輪花形小皿の口縁部の破片で、体部から口縁部にかけて外側に広がっている。

### 白 磁 (第56図12～14、図版37)

大峠遺跡では上久々茂土居跡より多く、7点出土した。すべて小片である。(12)は皿の口縁部で、端部が外反する。器壁は薄い。(13)は皿の破片で、口径8.9cm、器高2.1cm、底径4.3cmを測る小型品である。器壁は厚く、高台には釉はかからない。内面に目跡がある。(14)は皿の底部で、底径5.2cmを測る小型品である。作りは丁寧で、灰白色である。釉は透明度が高く、全面に施す。高台畳付けは削り取り、砂敷きで焼成している。その他(図版38-3)の白磁の破片は断面に漆が塗られており、補修して再び使用している。I区黒褐色土出土。



1, 2, 3, 6, 9, 11, 12, 13 : II区黑褐色土  
 4, 5, 7 : I区黑褐色土 8 : P15 10 : SD04  
 14 : P14 15 : P12 16 : P18

第56图 大峠遺跡出土陶磁器実測図



## 青花 (第56図、図版37)

(15)は低い高台をもつ碗の破片で、内底面が盛り上がるいわゆる饅頭心のものである。見込みには草文があり、その外側に2条の圏線を巡らす。外面には3条の圏線と草文を描いている。釉は透明度が高く、畳付けは削り取る。呉須は鮮やかである。底径は5.4cmを測る。(16)は碁笥底の破片で、内外面には淡青白色の釉を施し、畳付けは無釉である。見込みには草文を描く。呉須の発色はやや悪い。その他に実測できないものが6点ある(図版38-5~10)。発色のよい藍色の呉須を使用しているものが多い。I区黒褐色土出土で、高台内に「長命富貴」の字款の「命」をもつもの(図版38-5)、低い高台をもち、底部内面に十字花文を描く小碗の破片がある。II区耕作土出土。(図版38-14)

## 朝鮮王朝陶磁(図版38)

大峠遺跡から4片確認した。(図版38-11、12)の2つはII区P10から出土し、同一個体と思われる。白色で、胎土には黒色や白色粒子を含む。(図版38-13)はI区黒褐色土からの出土で、青灰色の釉が施され、やはり胎土には黒色や白色粒子を含む。(図版38-14)はII区P7から出土した高台が断面三角形の底部である。高台や底部内面には胎土目がある。釉は灰青色で、高台内にもかかる。

## 石鍋(図版38-15)

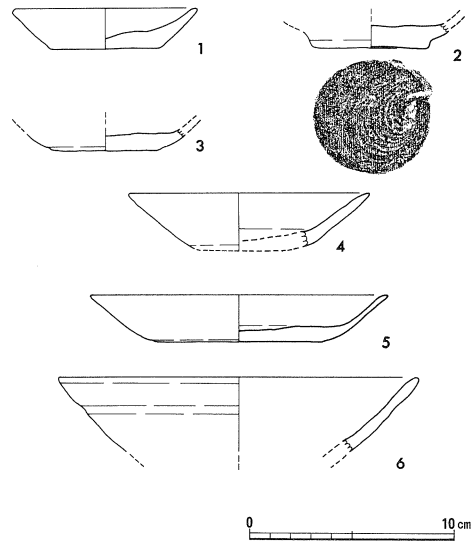
II区耕作土から1片出土している。滑石製で、小片のため部位は不明である。

## 中世土器

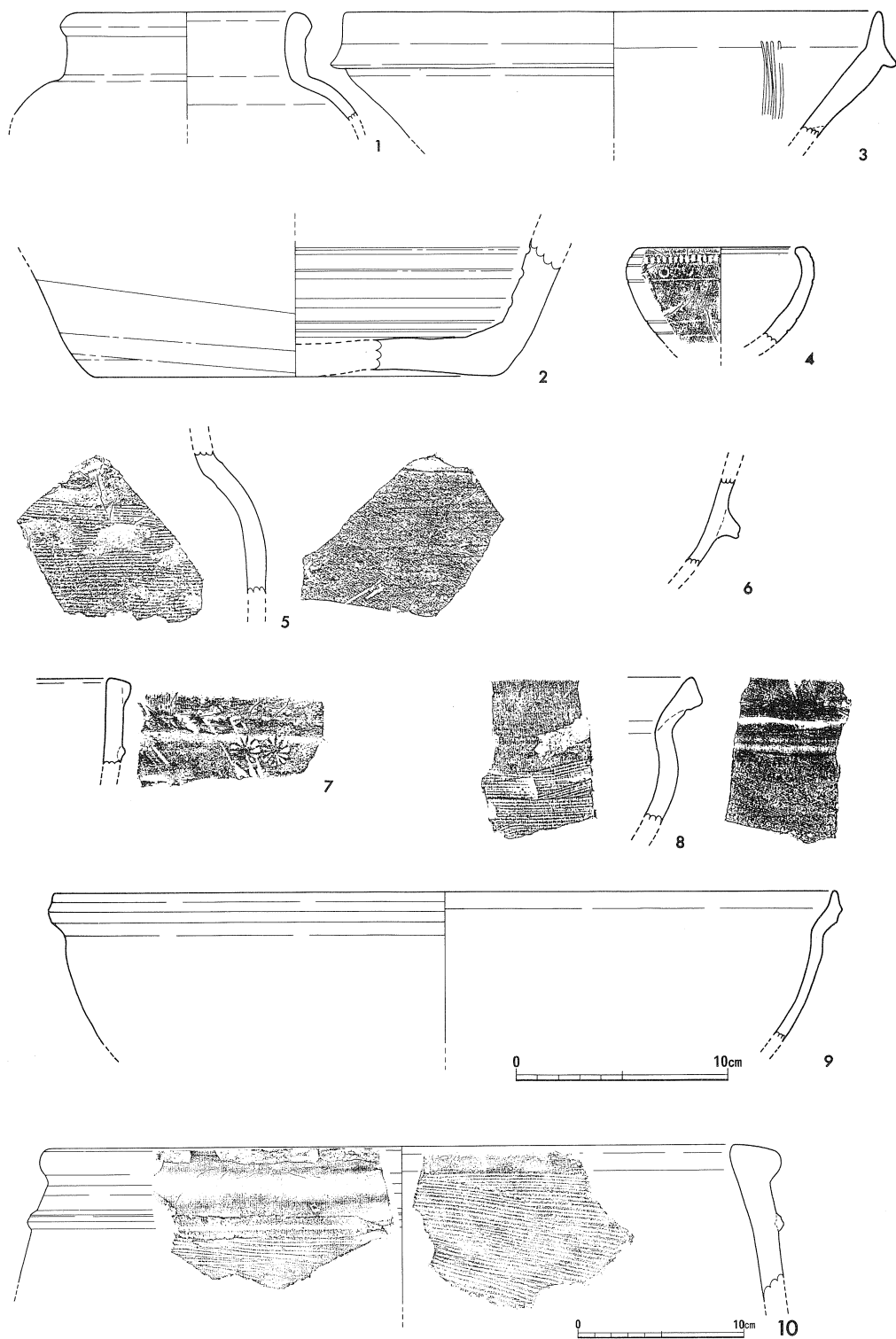
国産のものとしては、備前と地元産の瓦器および土師器がある。器種としては、備前が壺と挿鉢、地元産の瓦器としては香炉、茶釜、火鉢、鍋、甕、挿鉢が知られ、I・II区を中心に出土している。

## 土師器(第57図、図版36)

土師器はI・II区を中心にコンテナ1箱分が出土している。小片が多く、また、風化が著しい。高台を確実にもつものはなかった。器種としては皿、坏がある。胎土はすべて精良で、黄橙色や淡黄色を呈している。作りはロクロ整形により丁寧で、底部の切り離しは、確認できるものはすべて糸切りである。(1)は皿で、口径9.0cm、底径5.4cm、器高2.0cmを測る。底部内面の中央部が凹



第57図 大峠遺跡出土土師器実測図  
1, 2: II区黒褐色土 3: I区黒褐色土  
4: P2 5: II区耕作土 6: P11



第58图 大峠遺跡出土陶器・瓦器実測図

1, 3, 6, 7, 9, 10 : II区黒褐色土 2 : P13 4 : I区黒褐色土 5 : P17 8 : SK 0 5

み、短い口縁部がつく。(2)、(3)は底部の破片で、底部は厚く、アクセントをもって体部にいたる。(2)はわずかに上げ底である。底径は5.2 cm、5.6 cmを測る。(4)、(6)は口縁部の破片で、口径は(4)が12.8 cm、(6)が13.6 cmを測る。(6)の外表面は凹凸で、ススの付着が認められる。(5)は口径14.6 cm、底径8.2 cm、器高2.3 cmを測る皿である。底部は内面中央が凹み、外表面はわずかにアクセントをもって体部にいたる。

#### 備前(第58図、図版40)

大峠遺跡からはほとんど出土しなかった。

(1)、(2)は壺の破片である。(1)は口縁部から肩部にかけてのもので、短く直立する頸に玉縁の口縁部が付く。(2)は平底の破片で、大型のもの。

(3)は播鉢で、口縁部から体部の破片で、体部は逆ハの字状を呈し、口縁部は上方へ伸び、下端は多少垂れる。櫛目は4条確認できる。

#### 瓦器など(第58、59図、図版39、40)

I・II区から出土した。量的には少ないが、器種は豊富にある。

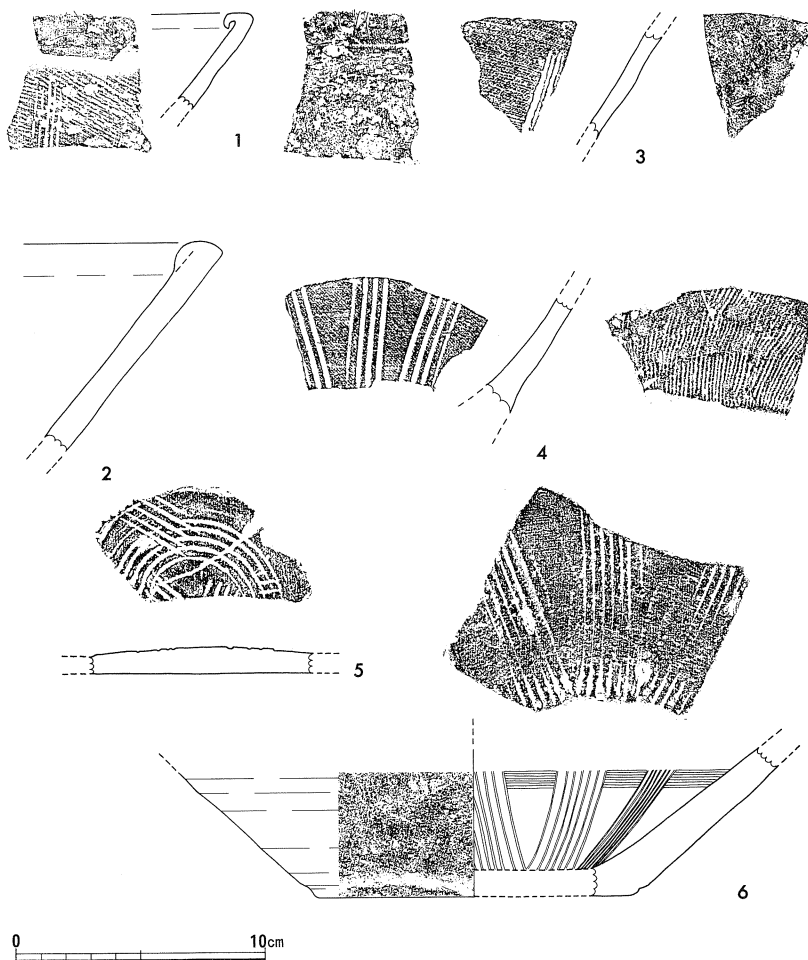
(4)は瓦質の香炉で、小型品。口縁部の端部は丸く収まり、やや内傾する。体部は丸くなり、鉄鉢型を呈す。体部の外表面には五条の沈線が引かれ、肩部にある三条の沈線の間には印判による方形と菊形の文様が二段に施されている。(5)、(6)は茶釜の一部で、(5)は肩部、(6)は体部下方の突帯部分の破片。(7)は土師質の火鉢。体部は垂直に伸び、口縁部外表面は肥大する。口唇部より3 cm下方に幅5 mm、高さ2 mmの細い突帯が付く、口唇部との間に印判による菊形の文様が施されている。(8)、(9)は瓦質の土鍋で、上久々茂土居跡の鍋と同様に防長型。(8)の口縁部は短く、外に開く。端部はやや膨らみ、その直下には一条の沈線が引かれている。(9)の口唇部は上方へ伸び、体部との境は屈曲する。(10)は瓦質で、大型の甕の口縁部。やや内湾気味に立ち上がり、外表面に玉縁状を呈し、頂部には平坦面がある。口縁部の下方2 cmに幅1 cm、高さ5 mmの張付け突帯が付し、体部の外表面は磨きで仕上げている。(第59図1～6)は瓦質のもので、防長型の播鉢。(1)、(2)は口縁部の破片。(1)の口唇部は内面に折り曲げているため肥厚し、内面には五条の櫛目が施されている。(2)の口唇部の断面は三角形に肥厚する。(3)、(4)は体部の破片。内面には櫛目が施されている。(4は四条)(5)は底部の破片。内面には、防長型特有の四条の複雑な櫛目が施されている。(6)は体部から底部の破片である。内面には七条の櫛目がある。

#### その他の遺物(第60図、図版40)

(1)は口径13.2 cmの口縁部の破片である。口縁端部はやや面をもち、そこに二条の沈線が施されている。外表面の調整は横ナデである。(2)は低脚坏の破片である。調整は横ナデである。(3)は口縁部の破片である。端部はやや外側に開く。(4)は高坏の坏部の破片である。底には丸

い凹みがある。(5)は手づくね土器である。口径8 cm、器高4.5 cmを測り、内外面には指頭圧痕が残っている。

(2)・(3)・(5)の焼成は良好で、赤褐色を呈する。(1)・(4)の焼成はやや不良で、淡黄色を呈する。(6)は須恵器の蓋坏身で、口径11.7 cmを測る。立ち上がりは高く、端部は丸い。(7)は肥前系の皿で、口径11.1 cm、底径4.1 cm、器高3.5 cmを測る。体部から口縁部にかけて逆「ハ」の字に開き、端部は単純に終る。底部は削り出しで、釉は



第59図 大峠遺跡出土土器実測図 1:P9 2,3,4,5,6:II区耕作土

かかっていない。その他の部分には茶褐色の釉がかかり、底部内面には4ヶ所の胎土目跡が残る。

### 石器 (第61図、図版41)

(1)は長さ15.9 cm、幅17.1 cm、厚さ5.3 cmを測る自然石を利用した石皿である。底面は平らで、安定感がある。中央部には9.7 cm、11.4 cmの範囲が凹み、よく磨滅している。安山岩である。(2)は長さ6 cm、幅4 cm、厚さ1.0~1.7 cmを測る砥石で、二面が使用されている。石材は(1)が石英斑岩、(2)がホルンフェルスの変成した砂岩である。その他、碁石が一個確認できた(図版38-16)。碁石は長さ2.2 cm、厚さ0.7 cmの小さな円礫で、黒色を呈する。

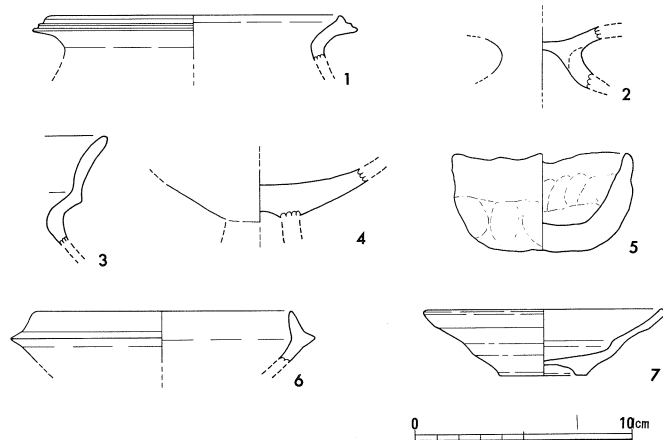
### 土錘 (第62図、図版41)

出土総数48点で、内46点がI区SK01からの出土である。残存状態は比較的良好である。成形はすべて手づくねで、作りは雑で、色調は橙色を呈し、胎土中には砂粒を多く含む。形態は長

第4表 大峠遺跡出土土器観察表2

器種	挿図番号	調査区	法量 (cm)	焼成・胎土・色調	調整	備考
陶器壺	図58-1	II	口径 器高 底径 11.2	焼成：良好 胎土：1mm大の砂粒を多く含む。 色調：外面赤褐色、内面青灰色	内外面とも回転ナデ	備前 口縁部～肩部 外面に自然釉かかる。
	-2	II	口径 器高 底径 19.0	焼成：良好 胎土：1mm大の砂粒を多く含む。 色調：内外面とも淡灰色	外面：体部ヘラケズリ 内面：体部回転ナデ、底部荒いナデ	備前 体部下端～底部 底部端に砂粒付着 (焼成時)。
播鉢	-3	II	口径 器高 底径 25.2	焼成：良好 胎土：2～3mm大の砂粒を含む。 色調：内外面とも赤褐色	内外面とも回転ナデ	備前 口縁部 放射状の櫛目
瓦器香炉	-4	I	口径 器高 底径 7.4	焼成：不良 胎土：1mm程度の砂粒を多く含む。 色調：外面灰褐色、内面黄褐色	内外面とも風化のため調整不明	口縁部～体部 外面に4条の沈線と 印文が施される。
茶釜	-5	II	口径 器高 底径	焼成：良好 胎土：密 色調：外面灰色、内面青灰色	外面：ミガキ 内面：横方向のハケ目、片部に指頭圧痕が認められる。	地元産 茶釜肩部
茶釜	-6	II	口径 器高 底径	焼成：良好 胎土：密 色調：内外面とも灰褐色	外面：体部回転ナデ 内面：ナデ	地元産 体部 蹄状突帯をもつ。
土師器火鉢	-7	II	口径 器高 底径	焼成：不良 胎土：密 色調：内外面とも黄褐色	内外面とも風化のため調整不明	地元産 火鉢口縁部 外面に印花文が施される。
瓦器鍋	-8	II	口径 器高 底径	焼成：良好 胎土：密 色調：内外面とも灰褐色	内外面とも口縁部回転ナデ 外面：体部ミガキ 内面：横方向のナデ	地元産(防長系) 口縁部～肩部
	-9	II	口径 器高 底径 36.8	焼成：良好 胎土：1～2mm大の砂粒を多く含む。 色調：内外面とも灰色	内外面とも口縁部回転ナデ 外面：ナデ 内面：体部回転ナデ	地元産(防長系) 口縁部～体部 外面にスス付着
甕	-10	II	口径 器高 底径 41.0	焼成：良好 胎土：1mm大の砂粒を含む。 色調：外面黄灰色、内面黄褐色	内外面とも口縁部回転ナデ 外面：体部ミガキ 内面：横方向のハケ	口縁部～体部 口縁部下に突帯をもつ
瓦器播鉢	図59-1	II	口径 器高 底径	焼成：良好 胎土：1～2mm大の砂粒を含む。 色調：内外面とも灰褐色	外面：体部ナデ 内面：体部斜め方向のハケ目	地元産(防長系) 口縁部～体部 放射状の5条の櫛目
土師器播鉢	-2	II	口径 器高 底径	焼成：不良 胎土：密 色調：内外面とも淡黄色	内外面とも風化のため調整不明	地元産 口縁部～体部
瓦器播鉢	-3	II	口径 器高 底径	焼成：良好 胎土：1～2mm大の砂粒を多く含む。 色調：外面茶褐色、内面灰色	外面：ナデ、指頭圧痕が残る。 内面：横方向のハケ目	地元産(防長系) 体部 放射状の櫛目
	-4	II	口径 器高 底径	焼成：良好 胎土：密 色調：内外面とも暗灰色	外面：横方向のハケ目 内面：横ナデ	地元産 放射状の4条の櫛目
	-5	II	口径 器高 底径	焼成：良好 胎土：1～2mm大の砂粒を含む。 色調：内外面とも灰褐色	内外面とも静止ナデ	地元産(防長系) 底部 内面に円形などの 5条の櫛目がある。
	-6	II	口径 器高 底径 12.8	焼成：良好 胎土：密 色調：内外面とも暗灰色	外面：ナデ 内面：横方向のハケ目	地元産 体部～底部 放射状の7条の櫛目 がある。

さ3.2~43.5 cm、  
最大幅1.2~17.5  
cmで、やや膨らみをも  
つ管状を呈する。多少  
中央部の張りに大小は  
あるが、基本的に同じ  
形態である。重量は3.  
1~8.0 gで、4~  
6 gが多い。



第60図 大峠遺跡出土土器実測図 1, 5, 6 : II区茶褐色土  
2, 3, 4 : I区黒褐色土 7 : P19

### 金属器

(第64図、図版42)

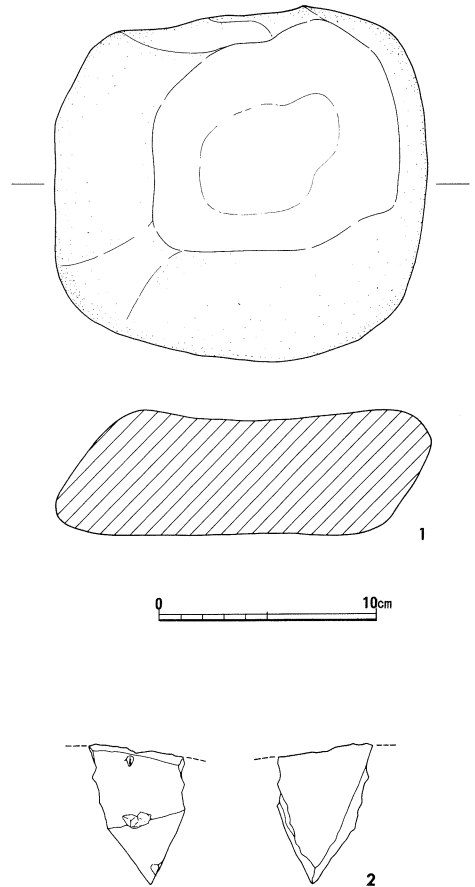
僅かではあるが、出土している。

(1) は刀の足金具と推測できる。銅製で、腹帯形は3.2 cm×1.5 cmを測り、やや丸みをもつ。足緒も丸みをもち、0.8 cm×1.1 cmの紐を通す穴がある。

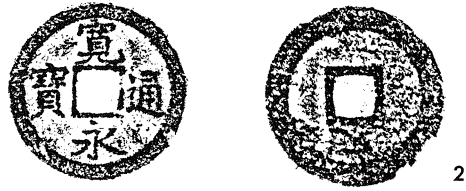
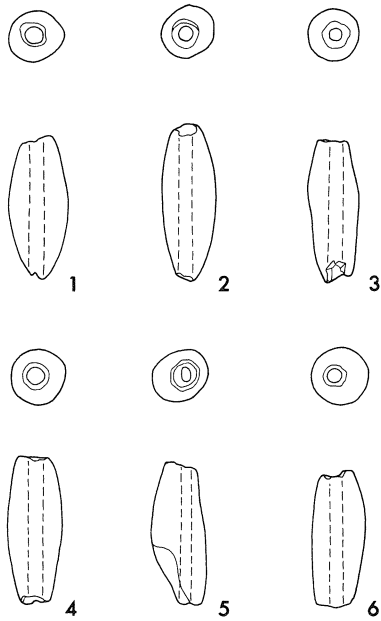
(2) は残存長20.7 cmを測る刀の切先の破片である。全面に錆が著しく、三ヶ所で折れるなど遺存状況は悪い。刀身は中央部で幅2.7 cm、厚さ0.5 cmで、刃に向かって緩やかに移行し、刃部は丸みを帯びる。錆のため詳細は不明である。

### 古 銭 (第63図、図版42)

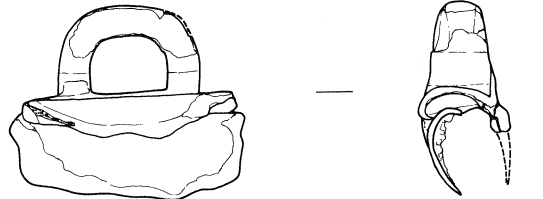
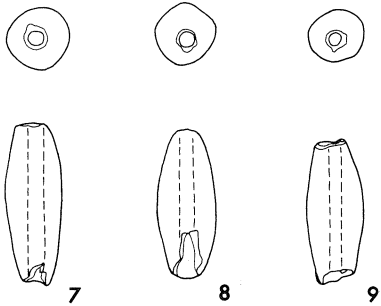
2点が耕作土から出土している。(1) は北宋時代(1064年)に初鑄された治平元寶で渡来銭である。直径2.3 cm (2) は江戸時代(1636年)に初鑄された寛永通宝である。直径2.4 cm。



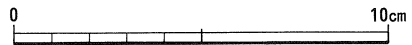
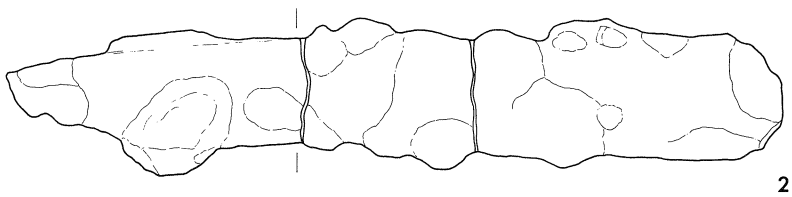
第61図 大峠遺跡出土石器実測図  
1 : P8 2 : II区耕作土



第63図 大峠遺跡出土古銭拓影  
1, 2: II区耕作土



第62図 大峠遺跡出土土錘実測図



第64図 大峠遺跡出土金属器実測図 1: II区耕作土 2: P12

## 第4節 小 結

調査の結果、奈良時代前半から平安時代前半の掘立柱建物や中世の掘立柱建物を中心とする遺構を検出し、また、これらに伴う遺物としては、古代から中世さらに近代をも含めた幅広い時期のものがある。古代の遺物として、須恵器と土師器が、また、中世のものとして貿易陶磁、瓦器、陶器などが出土している。

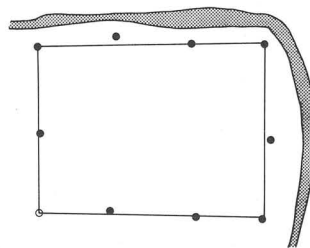
今回の調査で、石西地域の古代の住居跡や中世の遺構に伴う遺跡の資料が増え、上久々茂土居跡と同様、この地域の歴史の様相が解明し始めた。

### 古代の住居について

I区から2棟の掘立柱建物を検出した。遺物はほとんどが包含層からの一括出土のため、どの建物に伴うかは不明である。器種としては蓋坏、壺、高坏、大甕、鉢などがあるが、量的には蓋坏が最も多かった。

この時期の須恵器については大湫遺跡<sup>(1)</sup>で編年されている。この編年に当てはめると、I～IV期のすべての時期のものがあり、特に、III・IV期のものが多い。須恵器の絶対年代としては8世紀前半から9世紀前半として大差はないであろう。

同時期の遺跡は石見西部では前述の益田市大湫遺跡、美濃郡匹見町長グロ遺跡<sup>(2)</sup>、鹿足郡津和野町高田遺跡<sup>(3)</sup>などが知られている。これらの遺跡は集落跡で、住居跡が検出されている。しかし、これらの遺跡での遺構のあり方は少し違っ



第65図 大湫遺跡の掘立柱建物模式図

ている。つまり、大湫遺跡などの益田市内の遺構は山側に雨落ち溝を巡らし、その内側に掘立柱建物を築く。一方、美濃郡匹見町長グロ遺跡や邑智郡川本町キタバタケ遺跡<sup>(4)</sup>などの中国山地では堅穴住居で、前代の住居形態を維持して、地域色をもつ<sup>(5)</sup>。益田市内でも山間部に近い大峠遺跡では掘立柱建物であり、今後、益田川上流部の美濃郡美都町などの遺跡が明らかになれば、住居形態の分布の違いが明らかになるであろう。

### 中世の遺物について

中世の遺物として中国製の青磁・白磁・青花、朝鮮王朝陶磁、国産の土師器・備前・瓦器がある。中世遺物として出土量は、土師器が最も多く、貿易陶磁は僅かである。貿易陶磁の中では青磁が最も多く、白磁、青花、朝鮮王朝陶磁は数点である。時期を推定すると、次のようになる。

青磁は、第56図<sup>(6)</sup>(1)は縞蓮弁文をもつ口縁部で、14世紀中ごろ、(2)は雷文をもち14世紀後半から15世紀前半ごろであろう。(3)は15世紀のもの。(8)～(10)は線描きの蓮弁文で、15世紀後半から16世紀前半であろう。(12)・(13)の白磁は端反り皿で、16



世紀のものである。(15)の碗は、内底面が盛り上がるいわゆる饅頭心のもので、16世紀半ばから後半にかけてのものであろうか。(16)が碁笥底の皿で、15世紀後半から16世紀半ばのものであろう。

灰青釉碗は李朝陶器で、15世紀～16世紀である。島根県では広瀬町富田川河床遺跡から出土している。<sup>(7)</sup>

備前の壺や播鉢は間壁編年<sup>(8)</sup>のIV期にあたる。

瓦器の播鉢は、島根県では編年が確立しておらず、山口県の編年を参考にすると、第59図(2)は土師質であるが、16世紀のものである。(5)の底部には五条の櫛目を1単位とし、櫛目を中央で十字に交差させ、その外側に円形、その後放射状に描いている。同じ例は知られていないが、山口県下右田遺跡出土に同様の模様<sup>(10)</sup>の底部がある。時期は14世紀後半から16世紀のもの<sup>(11)</sup>とされている。瓦器播鉢の出土量はかなりまとまっていた。しかし、備前の播鉢は数点しかなく、上久々茂土居跡<sup>(11)</sup>では逆に、備前播鉢は多く出土し、瓦器の播鉢は少ない。茶釜は益田市三宅御土居跡から出土している。

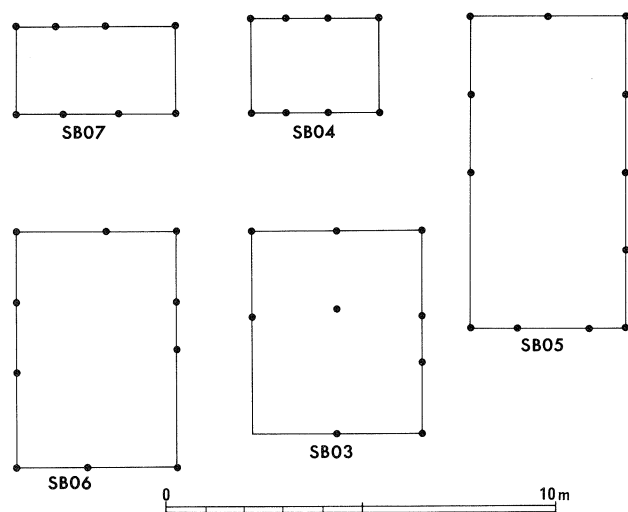
石鍋は浜田市下府廃寺跡、古市遺跡、鱈石遺跡、鹿足郡六日市町九郎原II遺跡、出雲市大梶古墳、松江市夫敷遺跡<sup>(16)</sup>、四王寺跡<sup>(17)</sup>などで知られている。島根県では滑石採掘跡は未発見であるが、周辺の地域では山口県宇部市下請川南遺跡<sup>(18)</sup>で発掘調査されている。

## 中世の遺構

II区から5棟の掘立柱建物を検出した。SB03、SB05、SB06、SB07から遺物が出土

しており、ほぼ14～16世紀で、15世紀を中心とした時期であるが、同時に存在したか確証はない。この時期は上久々茂土居跡の存続時期と同じである。

SB03は3間×2間の大型の建物である。倉庫としてはやや大規模であり、他の機能が考えられる。SB04、SB07は3間×2間の小型の建物で、倉庫的なものであろう。SB05



第66図 大峠遺跡の掘立柱建物模式図

は4間×3間であるが、長細い建物で、やはり倉庫あるいは納屋的なものであろう。しかし、谷部に立地し、水はけが悪いことを考えると、倉庫などとして使われたか不明である。大峠遺跡で最も整った建物はS B 0 6である。3間×2間の規模であるが、ピットはしっかりし、高所にある。この建物が調査した内では中心的な建物である。

大峠の丘陵で住居を築くにはⅡ区が最も良い場所である。調査の結果、上久々茂土居跡と同じような大型の住居等は検出できず、遺跡の性格は上久々茂土居跡と同じと考えるのは難しい。しかし、遺物は上久々茂土居跡に劣らない貿易陶磁や刀、足金具が出土している。この点から上久々茂土居跡と併存していたかの問題は別として、上久々茂土居跡と同クラスの人が居住し、有機的に関係をもっていたと推定される。

### その他

その他の遺物として、第60図(1)は弥生時代後期前半、(2)～(4)は弥生時代後半から古墳時代前半のものであろう。(6)は古墳時代後期後半、(7)は江戸時代の17世紀前半と思われるものが出土している。よって、大峠の丘陵上には弥生時代後期から人々が住み、古代、中世、現在まで集落を営んでいる。第60図(7)のような肥前系陶磁器が土坑やピットから出土しており、江戸時代の遺構も存在する。

今回の調査で、古代や中世の遺物、遺構が保存状態良く残されており、今後、周辺の発掘が進めば、遺構の性格や変遷がより具体的に理解できるであろう。

第5表 大峠遺跡土坑一覧表

土坑番号	区	平面形	規模 (cm)			出土遺物	主軸方向	備考
			長軸	短軸	深さ			
SK01	I	不整形	156	90	30	土 錘	N-34.5-W	
SK02	II	不整形	300	106	23	土師器・瓦器	N-73.0-W	
SK03		楕円形	124	80	36		N-10.0-E	
SK04		楕円形	92	66	43	肥前系陶器	N-22.0-E	
SK05		楕円形	90	64	36	瓦器	N-60.0-W	
SK06		楕円形	114	72	18	青磁	N-64.0-W	

注

- (1) 島根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』 1992年
- (2) 匹見町教育委員会『水田ノ上A遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』 1991年
- (3) 津和野町教育委員会『高田遺跡』Ⅲ 1993年
- (4) 川本町教育委員会『キタバタケ遺跡発掘調査報告書』 1992年
- (5) これは出雲地方や安芸地方の中国山地も同じ傾向である。
- (6) 国立歴史民俗博物館「日本出土の貿易陶磁」『国立歴史民俗博物館資料調査報告書』 4  
1993年  
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』 2 1982年  
(1) は龍泉窯系碗B1類で、(2) は龍泉窯系碗C2類で、(3) は龍泉窯系D類で(8)  
～(10) は龍泉窯系碗B類である。
- (7) 村上勇「島根県富田城関連遺跡群出土の陶磁」『貿易陶磁研究』 7 1987年
- (8) 間壁忠彦「備前焼」『考古学ライブラリー』 60 1991年
- (9) 岩崎仁志「防長地域の足鍋について」『山口考古』 17 1988年  
岩崎仁志「防長型播鉢について」『山口考古』 19 1990年
- (10) 山口県教育委員会『下右田遺跡』 1979年
- (11) 益田市教育委員会『三宅御土居跡』Ⅱ 1992年
- (12) 浜田市教育委員会『下府廃寺跡』 1993年
- (13) 浜田市教育委員会 原裕司・榊原博英両氏のご教示。
- (14) 島根県教育委員会『中国縦貫自動車道に伴う埋蔵文化財調査報告書』 1980年
- (15) 山本 清『大梶古墳調査報告』 1955年
- (16) 島根県教育委員会『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ 1983年
- (17) 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅳ 1985年
- (18) 宇部市土地開発公社・山口県教育委員会『下請川南遺跡』 1987年

## 第6章 ま と め

上久々茂土居跡の築造時期は、前回の範囲確認調査以前では地元研究者によって鎌倉時代後半と<sup>(1)</sup>されていた。しかし、一連の調査においても、鎌倉時代後半という時期を確証する遺構は確認できず、多くのものは室町時代のものであった。

三ヶ年にわたる調査で13～14世紀の高麗青磁<sup>(2)</sup>や天目茶碗が出土しているが、数が少なく、14世紀後半からの遺物の量が増加し、この時期に多くの遺構が造られたと思われる。ただし、主要部と考えられる西側は未調査であり、屋敷的な機能が当初から備えていたかは定かではない。

上久々茂土居跡の存続時期は13世紀後半から14世紀前半に始まり、15～16世紀半ばの青磁や青花が出土していることからこの時期ぐらゐまでである。この後は、16世紀半ばあたりから17世紀にかけて隔絶した時期があり、江戸時代に入ってから再び、多くの肥前系陶磁器が出土し、遺構が造られる。ただ、16世紀代の白磁・青花も僅かであり、15世紀代の無文の青磁などが最も多く出土していることからすると、上久々茂土居跡はこの時期を中心とした遺跡である。

このように、上久々茂土居跡からは14世紀後半から16世紀前半の貿易陶磁や瓦器などが出土した。貿易陶磁のなかには、朝鮮王朝陶磁や中国製の青釉輪花形小皿<sup>(3)</sup>も含んでおり、遺跡の性格を考える上で重要な資料となる。さらに、同時期の貿易陶磁を出土している遺跡の性格を検討する際、益田市三宅御土居跡<sup>(4)</sup>、鳥取県西伯郡会見町浅井土居敷遺跡<sup>(5)</sup>、山口市大内氏館跡<sup>(6)</sup>などが参考になろう。

三宅御土居跡や大内氏館跡は土塁や堀を巡らせた中に本格的な館を築いている。これらの遺跡は守護およびそれに続く国人クラスの居館である。一方、浅井土井屋敷遺跡と上久々茂土居跡は建物の大きさや構造が類似しているが、防御的な土塁や堀はもたない。また、三宅御土居は東西の長さ180m、南北は東側で87m、西側で53mを測る長靴形、大内氏館跡は160m四方の規模をもつ。しかし、上久々茂土居跡についてはⅡ・Ⅲ区の加工段から山際までは50～60mしかなく、面積的に著しい差がある。これらの点から、前述のクラスの傘下に組み入れられた地域的な土豪の屋敷と推定できる。

また、地形的には、上久々茂土居跡は三方向が崖になり、西側には益田川が、北側には大峠川<sup>(7)</sup>が流れ自然の要害地となっている。このような立地の類例としては岡山県落合町赤野遺跡<sup>(7)</sup>が挙げられる。この遺跡は山側に溝と土塁を設け、他の三方は崖となり、屋敷地が区画されている。この中に掘立柱建物三棟確認されている。13世紀の遺物も出土しているが、15世紀を中心とした遺跡である。景観的にも時期的にも上久々茂土居跡と類似している。

上久々茂土居跡周辺の文献史料はほとんどなく、考古学的資料と対比できない。しかし、「土井」

という字名があり、周辺には石塔をもつ古墓が数基存在<sup>(8)</sup>する。井上寛司氏は「土井」という字名や益田家文書などを使い、上久々茂土居跡の性格や歴史的価値を明らかにしている<sup>(9)</sup>。これらの点を考慮すると、上久々茂土居跡の性格が前述の結果と同様になる。

次に、調査区が屋敷跡のどのような地点であったであろうか。発掘調査によって検出された遺構の性格は、道路のルート内の限定された範囲の調査のため、全貌を明らかにすることは困難であった。また、屋敷全体の中での遺構の性格付けは大変難しい。大内氏館跡の例を参考にすると居館の周辺に廃棄用の土坑を掘ることが知られている。また、東側で区画用の加工段があり、こういう点から考えると調査区は屋敷跡の周辺部ということになり、屋敷の中心的な建物は調査区の西側の平坦面で、現在、寺院や民家がある辺りと考えられる。さらに、Ⅲ区から急に遺構が少なくなることは、耕作により遺構が破壊されただけでなく、中世の屋敷には畑や作業場を含んでいると考えられていることを合わせて想像すると、Ⅲ区などは上記の機能をもっていた可能性がある。

次に、大峠遺跡を考えてみる。存続時期は14世紀後半から16世紀前半の遺物があり、15世紀を中心とした時期と考えられる。前述したように、遺物の質は両遺跡でそれほどの差はないが、遺構で見ると上久々茂土居跡のSB04は3間×5間で目隠し塀あるいは縁側と思われるものを伴っており、大型である。しかし、大峠遺跡は丘陵の中央部を掘ったにもかかわらず、2間×3間の建物しか存在しなかった。また、字名をみても屋敷を関連させるものはなく、大峠遺跡の建物群が上久々茂土居跡の付属的なものあるいは一時的なものと考えられる。

一連の調査で、周辺には保存状態良好な遺構が残されていることが判明した。今後、周辺の発掘調査が実施されれば、遺構のより正確な意味付けを行えるであろうし、併せて、考古学的な資料の蓄積だけでなく、益田家文書などの文献史料の研究が進み、両者の対比できれば、上久々茂土居跡の歴史的意義をより深く追求できるであろう。

## 注

(1) 広田八穂『中世益田氏の遺跡』1979年

(2) 高麗青磁は島根県の出土例では古い方であり、島根県において朝鮮王朝陶磁を出土した遺跡は能義郡広瀬町富田川河床遺跡、松江市小無田遺跡、才ノ峠遺跡、出雲国分寺跡、益田市三宅御土居跡などが知られている。出土遺跡の性格は寺院や館跡、城下町などである。文献史料として益田守藤原朝臣久直（益田藤兼）が1467（文明2）年に朝鮮と交易している記事がある（申叔舟『海東諸国記』1471年）。

島根県教育委員会『富田川－飯梨川改修に伴う富田川河床遺跡発掘調査報告』4 1984年

島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 小無田遺跡』Ⅲ 1984年

島根県教育委員会『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』IV 1983年  
地方史研究所『出雲の国分寺の発掘（出雲・隠岐）』1963年

益田市教育委員会『三宅御土居跡』II 1992年

- (3) 青釉輪花形小皿は、島根県において能義郡広瀬町富田川河床遺跡、鹿足郡津和野町高田遺跡、  
匹見町水田ノ上A遺跡など三遺跡が知られる。出土量にはばらつきがあるものの遺跡の性格  
としては、城下町など城館が多い。

津和野町教育委員会『高田遺跡』III 1993年

匹見町教育委員会『水田ノ上A遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』1991年

- (4) 益田市教育委員会『三宅御土居跡』II 1992年

- (5) 岡田善治「会見町・浅井土居敷遺跡の陶磁器」『松江考古』8 1992年

- (6) 山口市教育委員会『大内氏館跡』I～IX 1980～1992年

- (7) 赤野遺跡の性格は武士団・在地豪族の館あるいはそれに付属した施設と考えられている。

岡山県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』1 1973年

- (8) 今岡 稔「上久々茂地区の中世石塔と古墓について」『上久々茂土居跡』1992年

- (9) 井上寛司「上久々茂土居跡の歴史的性格」『上久々茂土居跡』1992年

## 第7章 理化学的分析

### 第1節 上久々茂土居跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

#### (1) はじめに

島根県では東部地域にある大井窯群と西部地域にある石見窯群の須恵器の間に、K、Ca、Rb、Sr因子に違いがあるため、これらの因子を使って容易に相互識別ができる。すなわち、東部の大井窯群の須恵器にはK、Rb量がより少なく、逆に、Ca、Sr量はより多い。これに対して、西部地域にある本片子窯、芝窯などの窯跡から出土した須恵器には、大井窯群の須恵器とは対照的な化学特性をもつ。そして、瑞穂町、旭町などの中間地域にある窯跡から出土した須恵器は大井窯群のものに類似した特性をもっていることが知られている。これらの基礎データを使って、現在、島根県内の須恵器の伝播・流通の研究が進められている。このような新しい研究の一環として、上久々茂土居跡から出土した須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

#### (2) 分析結果

須恵器片試料は、すべて表面を研磨して、付着物を除去し、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉碎された。粉末試料は15トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3~5mmの錠剤試料にして蛍光X線分析を行った。波長分散型の完全自動式のスペクトロメーターが使用された。標準試料には岩石標準試料JG-1を使用した。

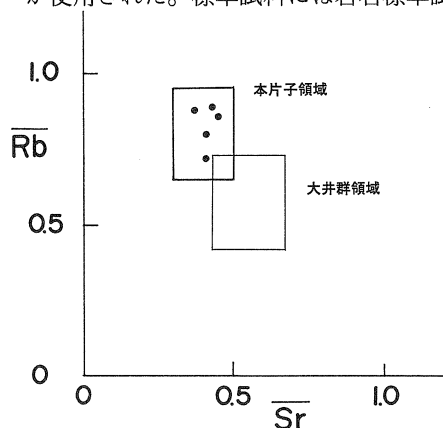


図1 上久々茂土居跡出土須恵器のRb-Sr分布図

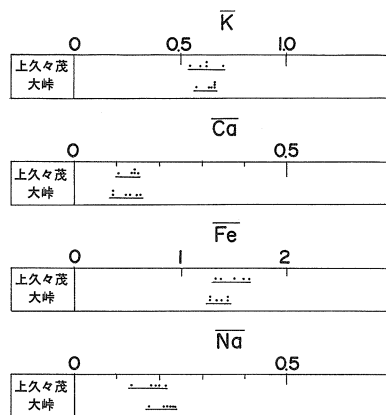


図2 K、Ca、Fe、Na因子の比較

分析値は表1にまとめられている。全分析値はJG-1による標準化値で表示されている。

はじめに、Rb-Sr分布図を図1に示す。データ解読の第一歩はRb-Sr分布図を作成してみることである。図1から上久々茂土居跡の須恵器胎土は東部の大井群のものには類似せず、ここでは西部の代表として選んだ本片子窯によく対応することがわかる。少なくとも、図1から東部型の須恵器でないことは明らかである。

そこで、東部の代表として池ノ奥窯群、西部の代表として本片子窯をとり出し、両母集団の間の2群間判別分析を試みた。K、Ca、Rb、Srの4因子を使い、両母集団の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値を計算した結果も表1に示されている。5%の危険率をかけたHotellingの $T^2$ 検定の結果から、両母集団への帰属条件を $D^2(X) \leq 10$ とした。(X)は母集団名である。この結果、上久々茂土居跡の須恵器は本片子窯に代表される島根県西部型であることが判明した。しかし、ここで注意しなければならない点は三次市周辺の広島県北部地域に在る窯跡から出土する須恵器の化学特性は島根県西部型に類似している点である。したがって、上久々茂土居跡の須恵器は石見地域からの供給品である可能性をもつと同時に、広島県三次市周辺からの搬入品である可能性をもつ訳である。胎土分析からは両者の相互識別はやや困難である。もし、器形からみて、両者に明確な相違があれば、問題は容易に解決する。

次に、近くに在る大峠遺跡出土須恵器の胎土と比較してみた。大峠遺跡の須恵器もRb-Sr分布図では本片子領域に分布した。K、Ca、Fe、Na因子の比較を図2に示してある。4因子とも、両者は一致しており、上久々茂土居跡出土須恵器の胎土は大峠遺跡のものと同質であると判断された。したがって、同一産地の製品である可能性が高い。

表1 上久々茂土居跡出土須恵器の分析データ

	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	$D^2$ (本片子)	$D^2$ (池ノ奥)
1	0.620	0.141	1.32	0.855	0.447	0.215	8.4	17
2	0.696	0.147	1.59	0.876	0.368	0.178	7.6	21
3	0.623	0.139	1.64	0.798	0.411	0.200	3.3	12
4	0.541	0.103	1.50	0.723	0.411	0.134	10	14
5	0.589	0.136	1.37	0.888	0.429	0.192	8.8	29



## 第2節 大峠遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

### (1)はじめに

大井窯群を中心とした島根県東部地域に在る窯跡や、瑞穂町、旭町などの中間地域に在る大迫窯などの窯跡から出土する須恵器は類似した化学特性を持つが、石見地方や広島県三次市周辺の窯跡から出土する須恵器とは異なる化学特性を持つ。主として、K、Ca、Rb、Srの長石系因子が異なるのである。そのため、これら4因子を使って、これらの地域間の須恵器の伝播、流通の研究を推進することができる。

本報告では、大峠遺跡から出土した須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

### (2)分析結果

須恵器片試料はすべて粉碎し、粉末試料をプレスして錠剤試料として蛍光X線分析を行った。理学電機製の波長分散型のスペクトロメーター、3270型機が使用された。標準試料には岩石標準試料JG-1を使用した。

分析値は表1にまとめられている。全分析値はJG-1による標準化値で表示されている。

図1にはRb-Sr分布図を示してある。6点とも本片子領域に分布し、島根県東部地域産の須恵器ではないことは明白である。

また、各因子の一次元分布図上で対応させたところ、大峠遺跡の須恵器は全因子で上久々茂土居跡の須恵器によく対応し、同じ産地の製品であると推定された。

東部地域の代表として池ノ奥窯、西部地域の代表として本片子窯をとり出し、両者の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値を計算した結果は表1の右端に示されている。5%の危険率をかけたHotellingの $T^2$ 検定により、母集団への帰属条件は $D^2(X) \leq 1.0$ であることがわかったので、本片子窯に代表される石見地域の窯が産地候補として合格する訳である。本片子窯の須恵器と同じ

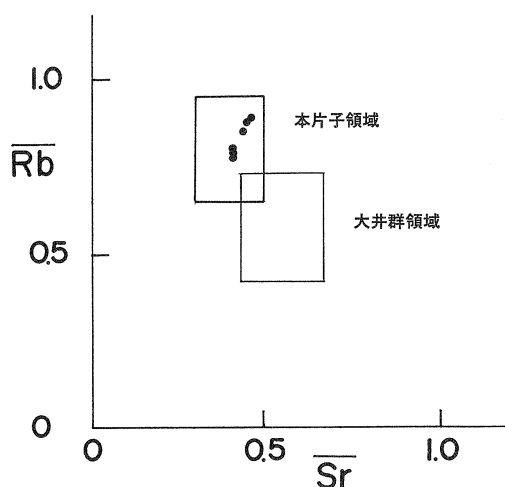


図1 大峠遺跡出土須恵器のRb-Sr分布図

化学特性を持つ須恵器を出す窯跡は本片子窯以外にも石見地域にはあるはずである。したがって、ここでは石見地域を産地として上げておく。ただ、広島県三次市周辺でも石見地域のものと同様の化学特性をもつ須恵器があり、広島県北部地域からの搬入品である可能性もあることを断っておく。

表 1 大峠遺跡出土須恵器の分析データ

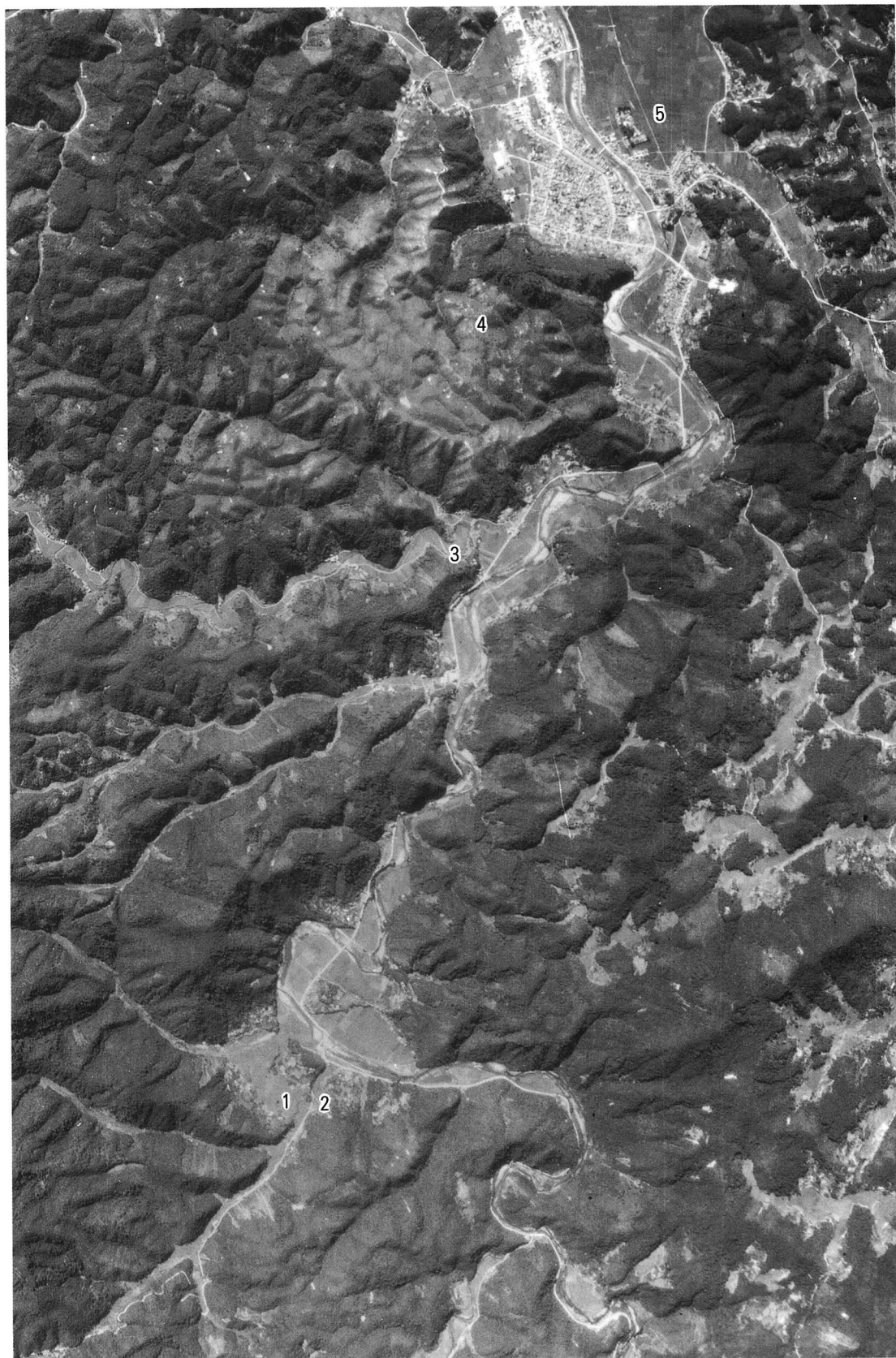
	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D <sup>2</sup> (本片子)	D <sup>2</sup> (池ノ奥)
1	0.640	0.145	1.27	0.888	0.460	0.213	10	19
2	0.567	0.130	1.38	0.782	0.406	0.174	4.7	17
3	0.630	0.156	1.27	0.882	0.448	0.231	4.0	20
4	0.655	0.088	1.42	0.792	0.411	0.215	3.6	13
5	0.651	0.121	1.33	0.854	0.440	0.227	8.5	14
6	0.654	0.090	1.44	0.805	0.413	0.244	3.3	13



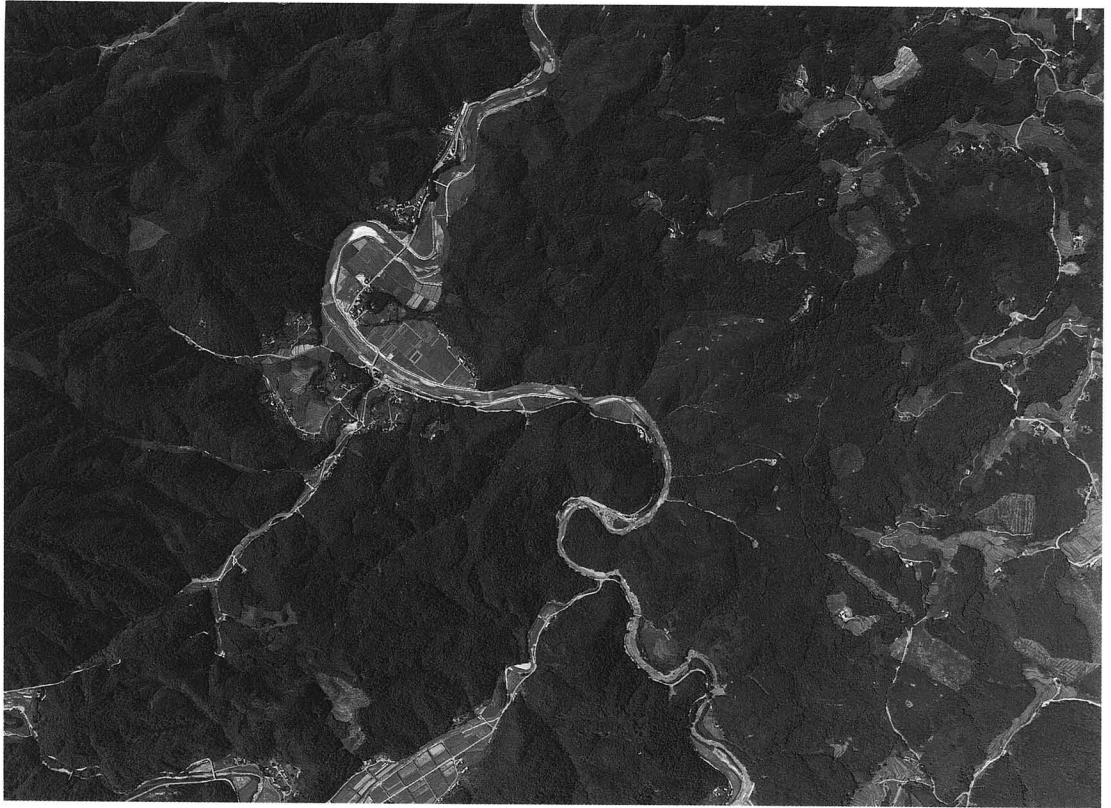
圖

版





1947年米極東空軍撮影空中写真 (1. 上久々茂土居跡 2. 大峠遺跡 3. 大谷土居跡)  
4. 七尾城跡 5. 三宅御土居跡



1986年撮影空中写真



上久々茂土居跡・大峠遺跡全景（西から）





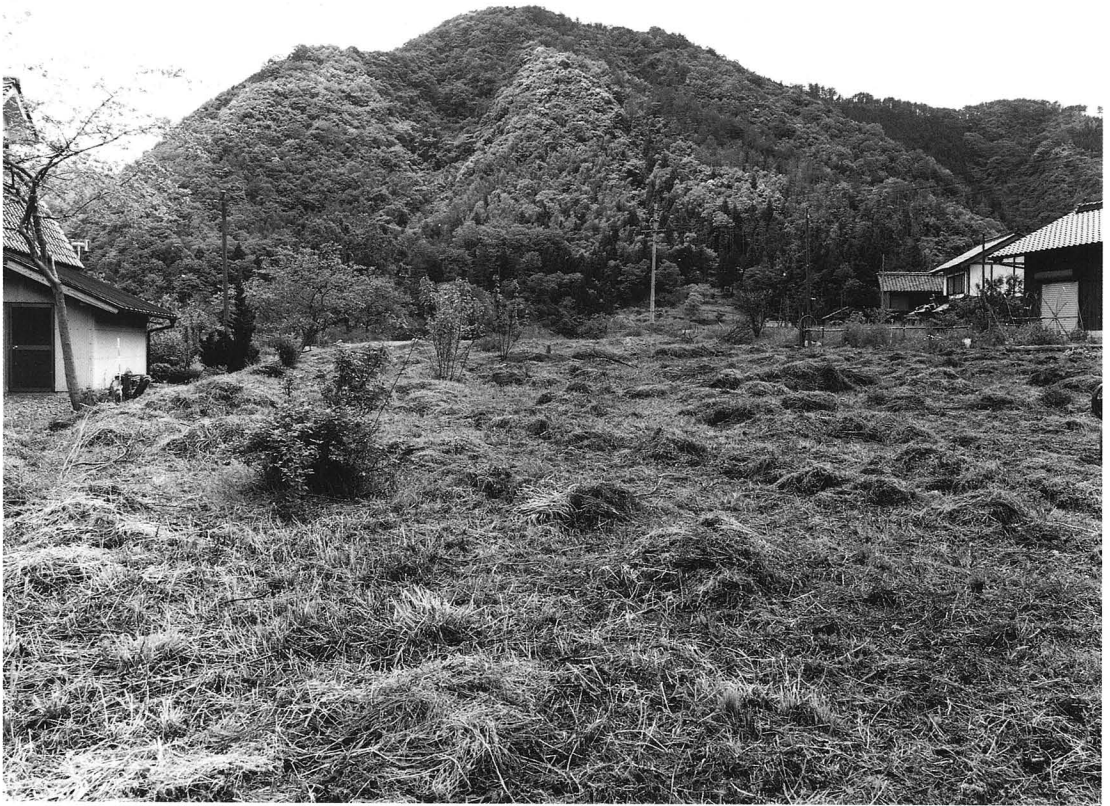
全 景 (東から)



全 景 (西から)



図版4 上久々茂土居跡



調査前風景



全 景



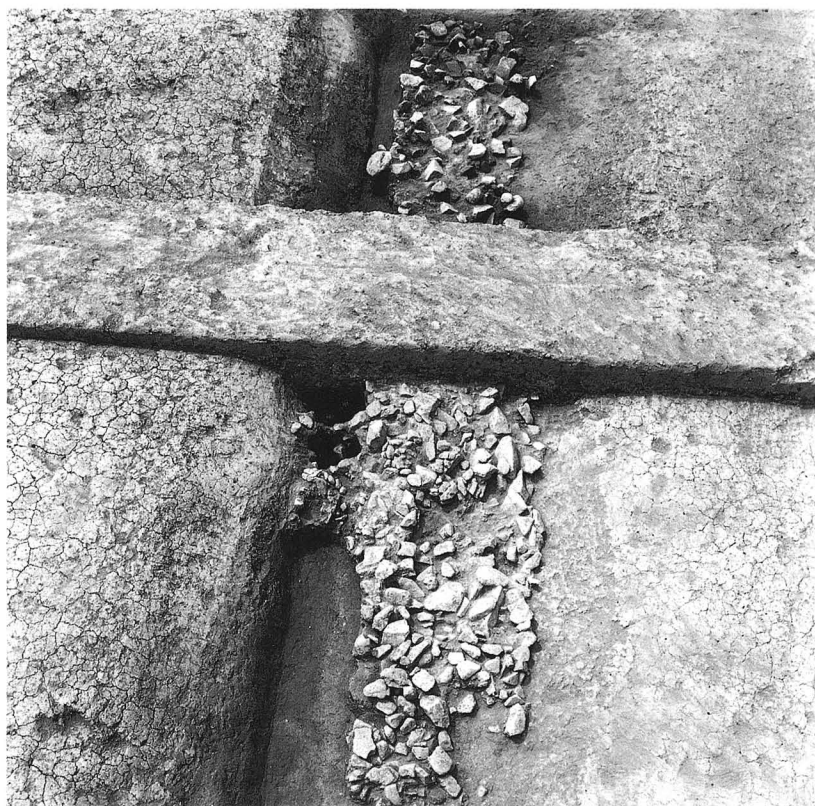
I 区 全 景



I 区 全 景 (東から)



SD 05 土層堆積状況



SD 05 検出状況





SD05 完掘状況



SD03 土層堆積状況

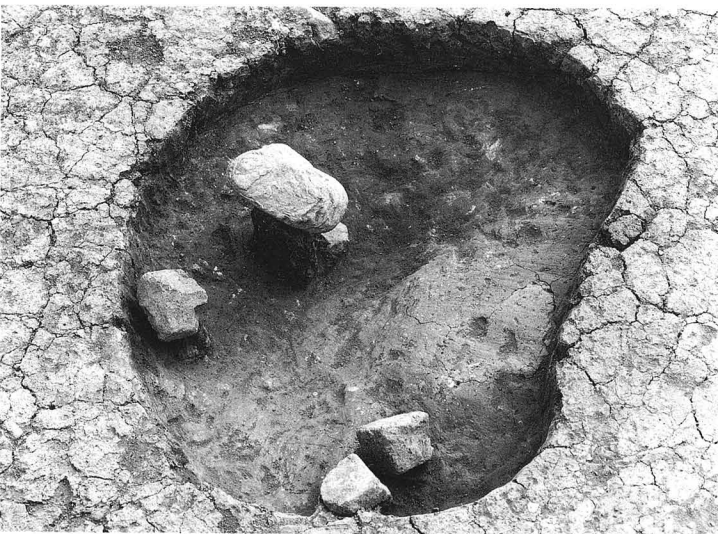
図版 8 上久々茂土居跡



SK 0 1



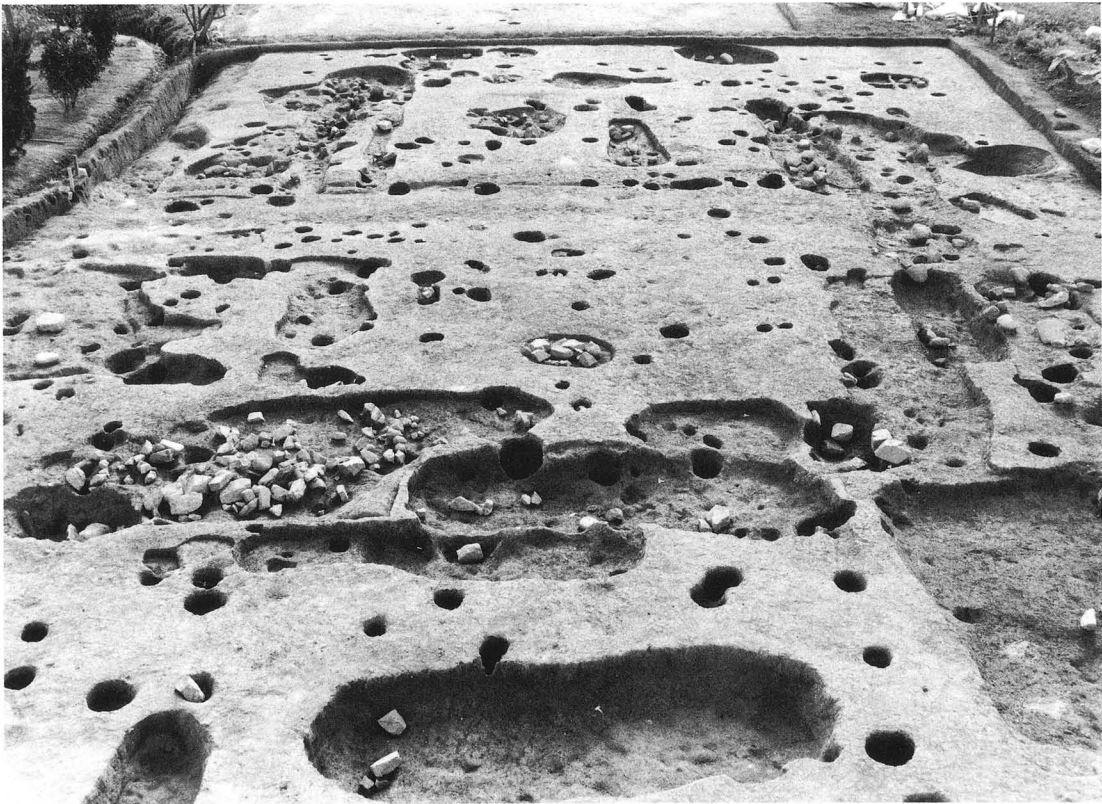
SK 0 2



SK 0 4



Ⅱ区全景

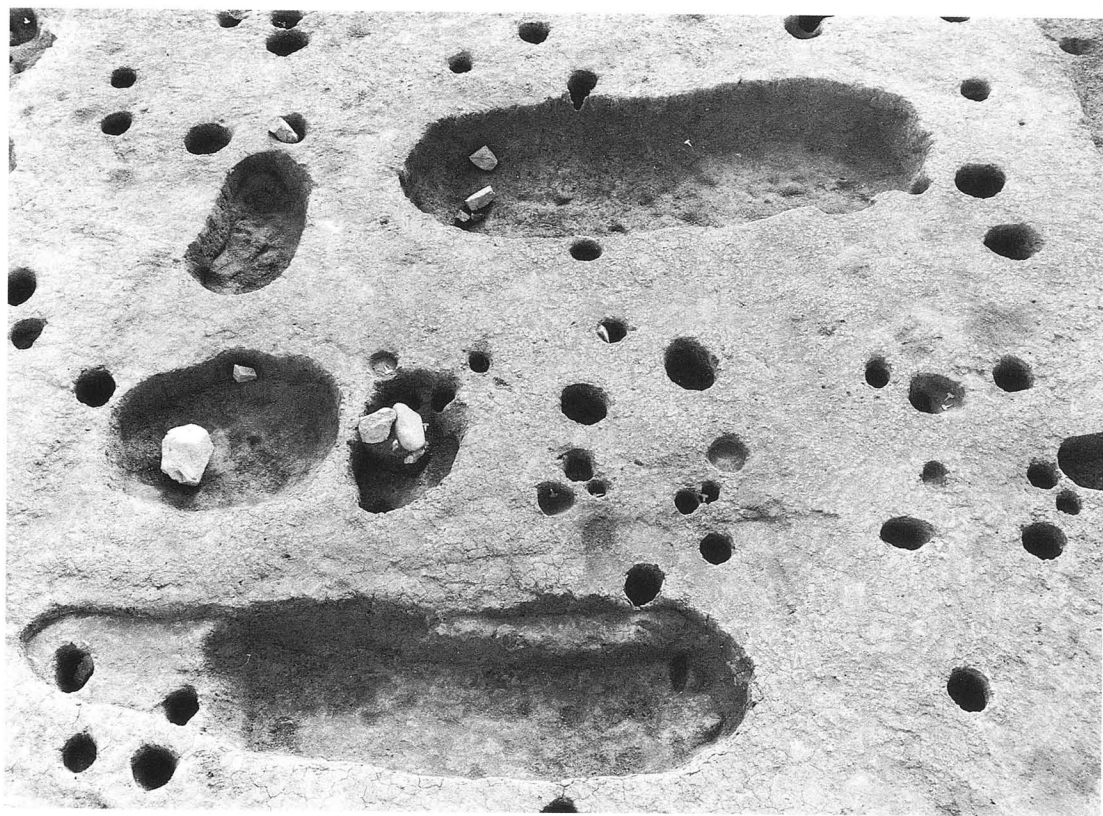


Ⅱ区全景(北から)





S K14, 15, 16, 17



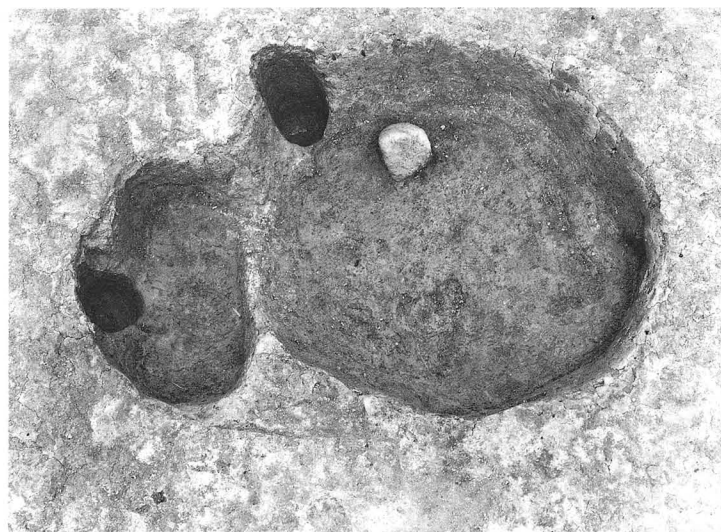
S K09, 10, 11, 12, 18



SK05

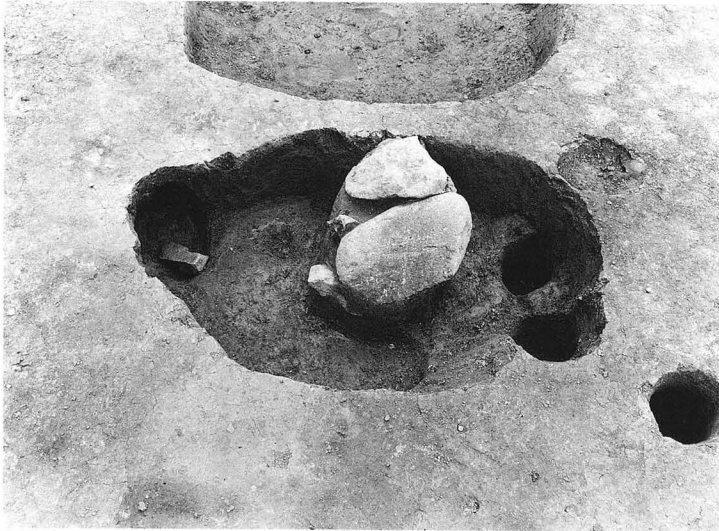


SK07

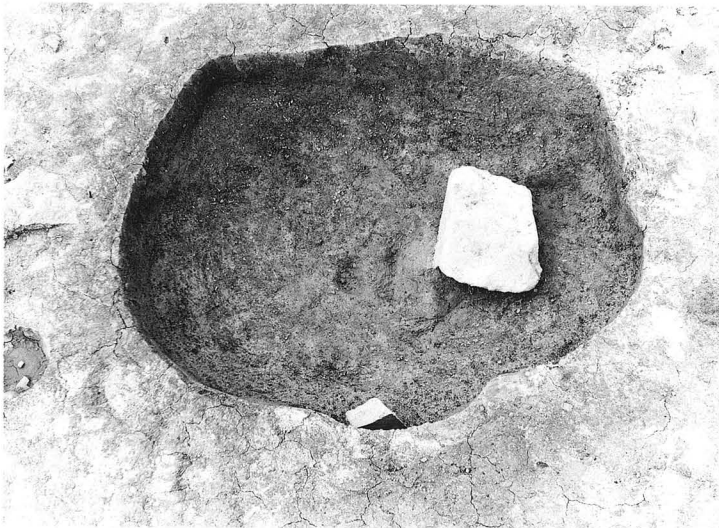


SK08

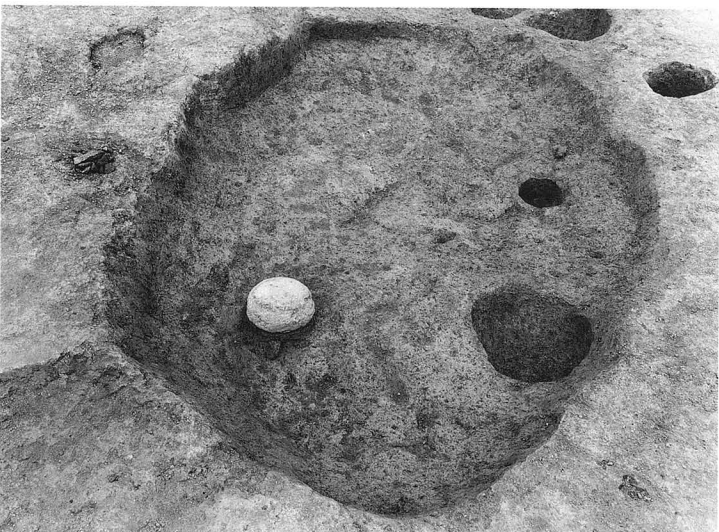




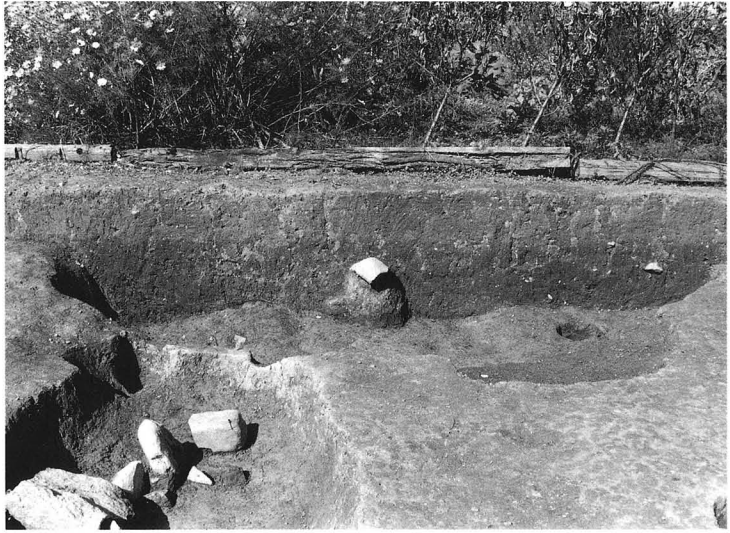
SK 10



SK 11



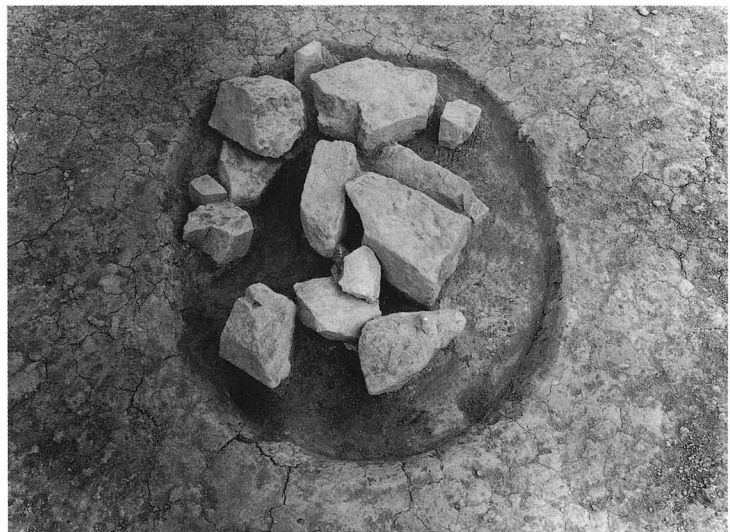
SK 15



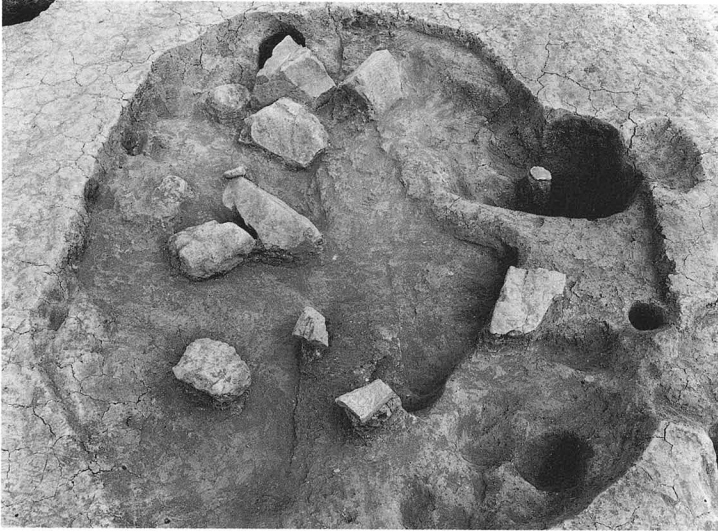
SK 2 1



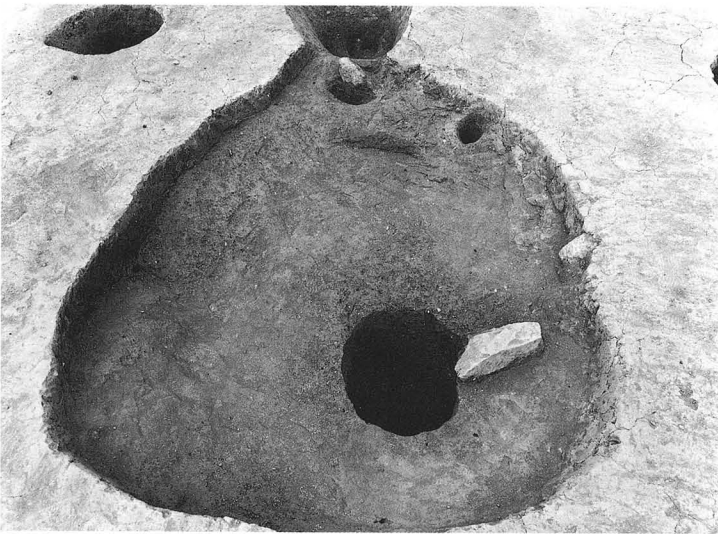
SK 2 4, 2 5



SK 3 2



SK 4 3



SK 4 4



SK 4 6



SK 4 7

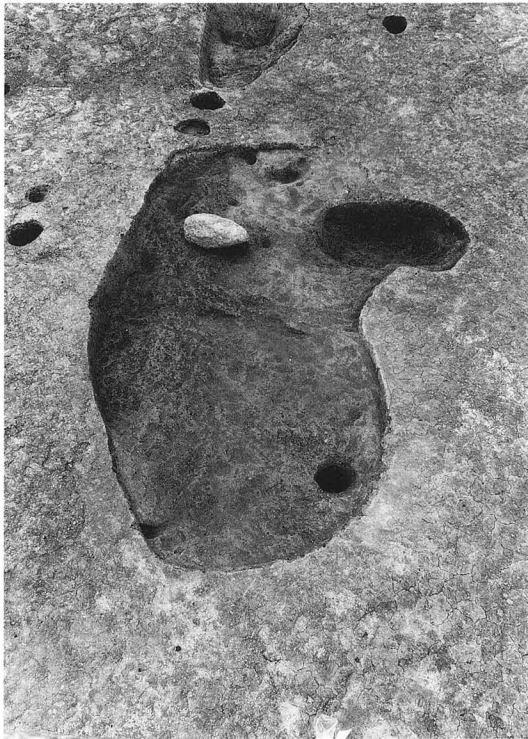


SK 5 2

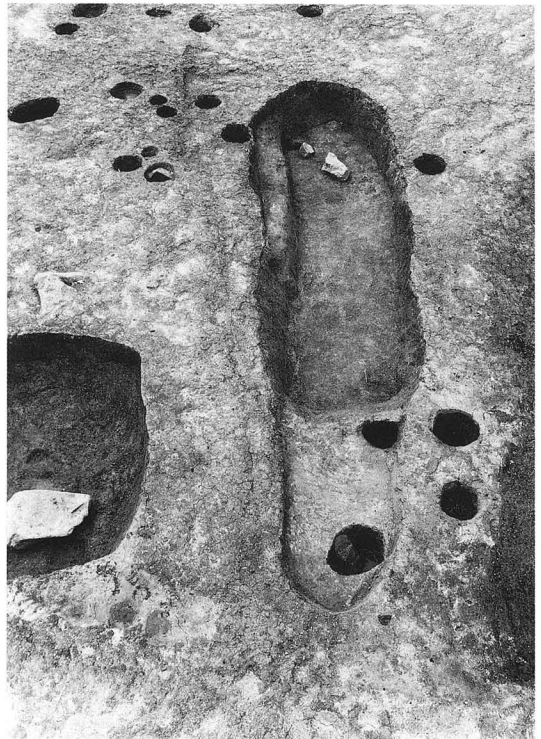


SK 4 2  
遺物出土状況



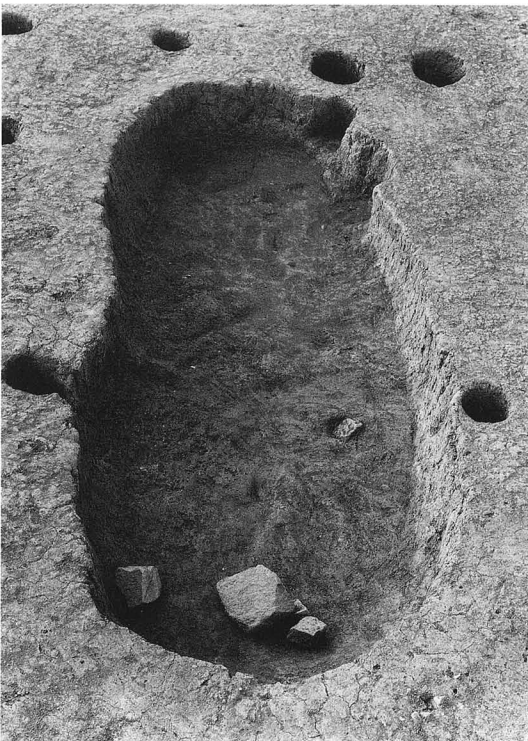


SK06



SK09

SK18



SK30





SK 31

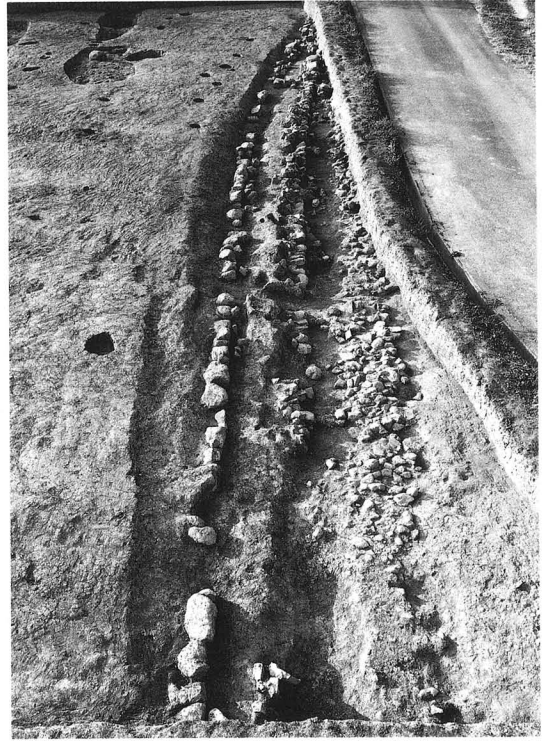


SK 39, 40, 41

SK 42



II区 石敷検出状況





Ⅲ・Ⅳ区 全景



Ⅲ区 南東部 (北から)





SB05

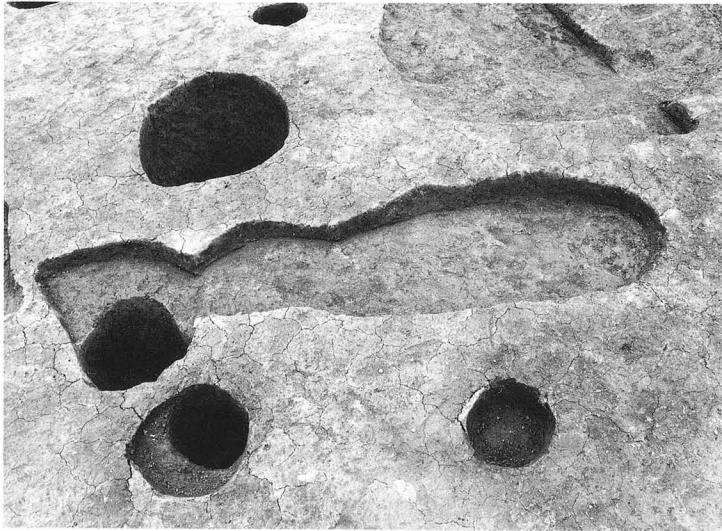


SK54

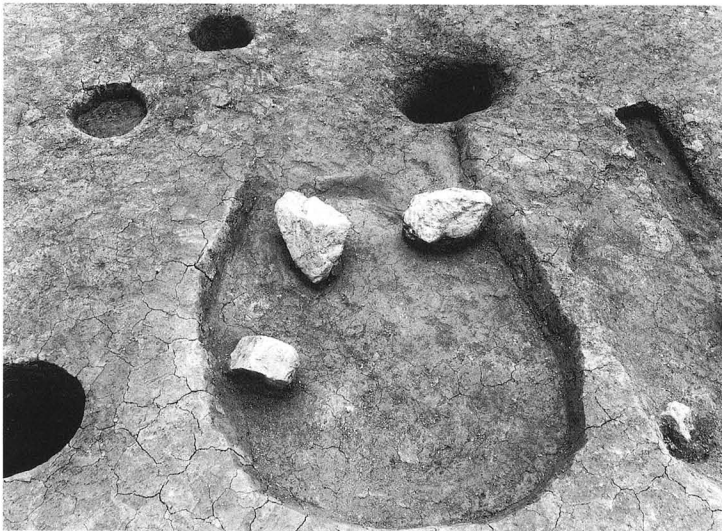


SK55





SK 5 6



SK 5 7



SK 5 8